

なにわ

大阪

研究

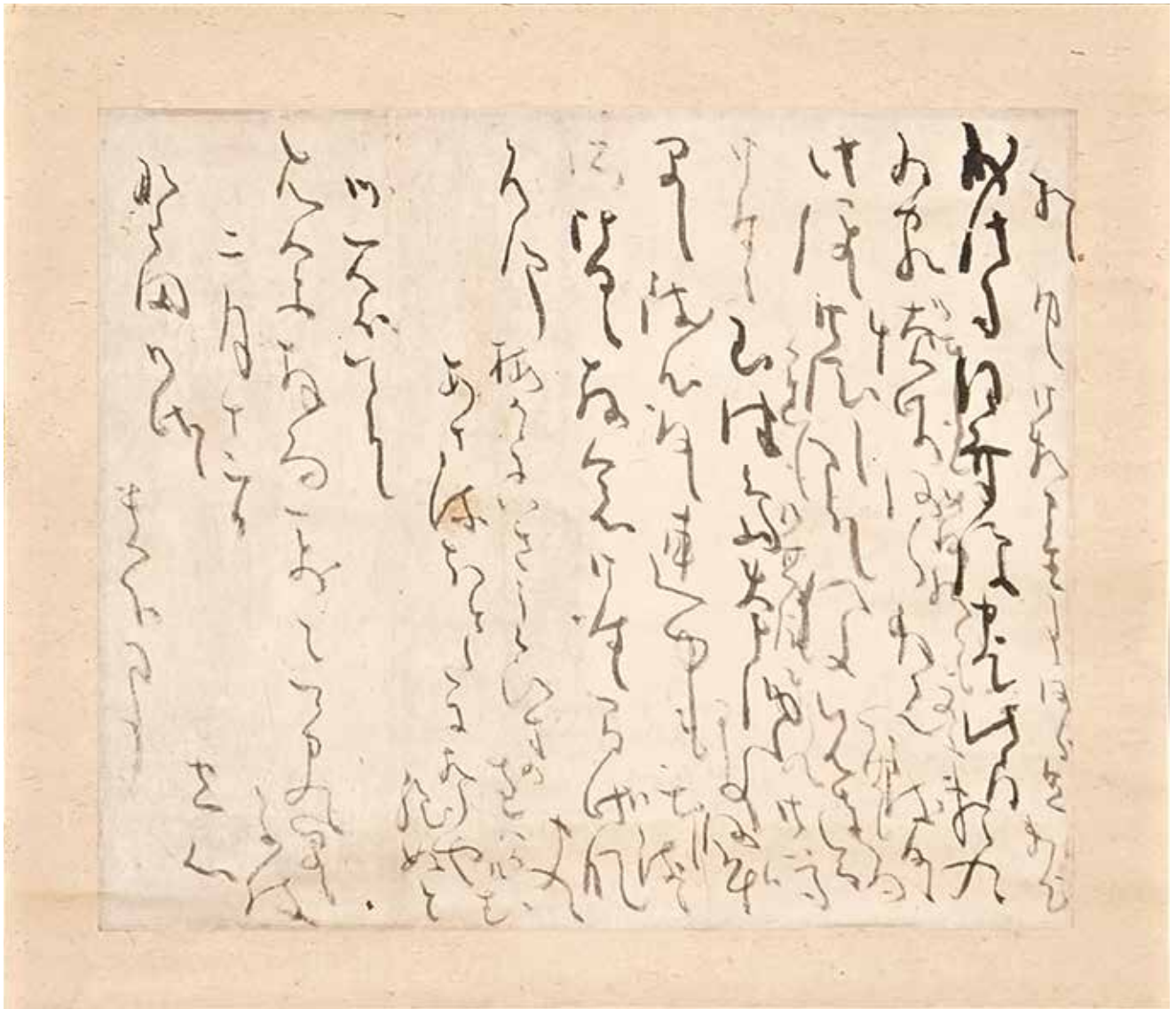
第 6 号



関西大学なにわ大阪研究センター

口絵

関西大学図書館蔵「契沖書状」 一軸・本紙26.2×31.1cm



(翻刻)

猶内々御頼申候事何分宜頼上候

妙法寺任幸便申上候此間頼入候

御咄申上候如何様にも又々

為家懐紙(昏)何分拝見致度候

可仕候

此使へ御渡し可被下候猶又先達而御噂

くれぐれも御世話頼入申候事

御座候玉津島奉納之事何卒

早々致度存候連中も咄し致候

所皆々存念御座候間此段申入候

乍序

梅かえ(、カ)にいさうくひすの糸はかけむ

あさるほとたに聲や絶えぬと

御一笑可被下候

右余拝面萬々可申入候不備

二月十二日 空心

野田御氏へ

貴下用事

図版解説

(読解本文)

妙法寺任幸便申上候。此間頼入候為家懐紙、何分拝見致度候、此使へ御渡し可被下候。猶又先達而御尊御座候玉津島奉納之事、何卒早々致度存候連中も咄し致候所、皆々存念御座候間此段申入候。
乍序

梅かえにいさうくひすのゑはかけむ

あさるほとたに聲や絶えぬと

御一笑可被下候。

右余拝面萬々可申入候。不備

二月十二日 空心

野田御氏へ

貴下用事

(追書)

猶内々御頼申候事、何分宜頼上候。御咄申上候如、何様にも又々可仕候。くれぐれも御世話頼入申候事(?)

(解説)

本軸については、『契沖全集 第十六卷 書入二 遺文 書簡集』(1976、岩波書店) 586頁に掲載されており、解説(848頁)によると「野田忠肅のところへ為家の懐紙を借りにやった時のもの」であり、確言はしていないが、「玉津島奉納のことが延宝集に見えることだとすれば、延宝九年以前となるが」とされる。なお、【追記】に「この書簡は戦災で焼失したとのことである。」とある。偶然かもしれないが、2005年に本学蔵となった「背面先生説」の軸も戦災で焼失したとされていた。

歌の第一句、契沖全集では「梅かゝ(えカ)」として「誤記であろう」とする。たしかに「ゝ」のようにみえるが、自筆とするならば「え」である可能性もある。歌の内容からは「え」でなければならず、「か(香)」は考えにくいからである。『漫吟集類題』にも「梅が枝に」となっている(34、『漫吟集』(龍公美本176)も同じ)。ただし、これが「ゝ」だとすると、誤記または誤写ということになり、本軸自体の問題として疑問が残る。

謝 辞

図版を提供いただいた関西大学図書館に厚く御礼申し上げます。

(乾 善彦・関西大学文学部教授)

なにわ
大阪
研究
第 6 号

目 次

口絵

論文

- 3次元CGによる火縄銃製作の可視化……………林 武 文 1
- 堺アルフォンス・ミュシャ館をテーマとした
バーチャルミュージアムの開発……………加 藤 愛 15
岩 崎 崇 朗
林 武 文

研究ノート

- 近代大阪における歌舞伎の辻番付……………北 川 博 子 25

資料

- 堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家所蔵資料選「メーカーの鉄砲史」1
宝暦二年「鉄炮御断控」……………藪 田 貫 1

なにわ大阪研究センター事業に係る研究成果報告

- 2022年度なにわ大阪研究センター基幹研究班
「なにわ大阪研究センターにおける基幹研究班の役割と意義について
— 2022年度の報告と今後の展望 —」……………乾 善 彦 33
林 武 文
藪 田 貫 崇
井 浦 寺 知 子
橋 山 徹 子
丸 山 博 子
北 川 博 子
- 2021～2022年度なにわ大阪研究センター公募研究班
「甘樫丘遺跡群の基礎的研究 — 発掘調査の成果を中心に —」……………井 上 主 税 39
西 本 昌 弘
長谷川 透

なにわ大阪研究センター事業に係る研究概要報告

- 2023年度なにわ大阪研究センター基幹研究班
「なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化」……………乾 善 彦 45
- 2022～2023年度なにわ大阪研究センター公募研究班
「『大大阪』の時代と関西大学 — 山岡家文書の調査・研究を中心に —」
……………官 田 光 史 47

表紙にちなんで	橋 寺 知 子	51
2023年度なにわ大阪研究センター事業紹介		53
投稿規程		57
編集後記	乾 善 彦	59

表 紙：赤松麟作『大阪三十六景』より 「心齋橋」
裏表紙：赤松麟作『大阪三十六景』より 「大正橋」

Contents

Frontispiece

Article

- Visualization of the production process of old Japanese style matchlock guns
by 3D computer graphics HAYASHI Takefumi 1
- Development of virtual museum on the theme of the Sakai Alphonse Mucha Museum
..... KATO Ai 15
IWASAKI Takaaki
HAYASHI Takefumi

Research Notes

- Kabuki Tsuji-banzuke in modern Osaka KITAGAWA Hiroko 25

Materials

- Selection of Records of Gunmaker *Inoue Sekiemon* in Sakai in Early Modern Japan
..... YABUTA Yutaka 1

Report of the Research Projects

- On the Role and Significance of the Core Research Group in the Naniwa-Osaka Research Center
— A Reexamination of the Structure of the Research Organization —
..... INUI Yoshihiko 33
HAYASHI Takefumi
YABUTA Yutaka
IURA Takashi
HASHITERA Tomoko
MARUYAMA Toru
KITAGAWA Hiroko
- Basic Research on the Amakashinooka Site Group—Focusing on the results of excavation research
..... INOUE Chikara 39
NISHIMOTO Masahiro
HASEGAWA Toru

- Summary of the Research Projects 45

Cover Art: 36 Views of Osaka by Akamatsu Rinsaku: Shinsaibashi	HASHITERA Tomoko	51
Research Projects in 2023		53
Submission Guidelines for Naniwa–Osaka Studies		57
Editorial Note	INUI Yoshihiko	59

3次元CGによる火縄銃製作の可視化

林 武 文

要 旨：近世の日本国内における火縄銃の製作技術は、鉄炮鍛冶の間で受け継がれた門外不出の秘伝の技術であった。その技法の詳細は、研究が進んだ今日でも不明な点が残されている。本研究では、井上家古文書を含めた歴史研究の成果を踏まえ、火縄銃の製造工程を3次元コンピュータグラフィックス（CG）を用いて再現した。

キーワード：火縄銃、歴史研究、鍛造、3次元CG、鉄炮鍛冶、地域振興

1. はじめに

我が国における火縄銃の製作技術は、1543年に種子島に漂着したポルトガル人から購入した2丁の鉄炮を元に、国内の鍛冶職人が独自に発展させたものであり、鉄炮鍛冶の間で門外不出の秘伝の技術として継承された⁽¹⁾⁽²⁾。その詳細に関しては、現代の歴史研究が進展してもなお、多くの未解明の点が残されている。日本刀の鍛錬は現代まで続けられているのに対し、火縄銃は、明治維新以降は製造が極端に縮小し刃物や工具のような別の鍛造品に移行したため、現代では製造を受け継ぐ者は存在しない。本研究では、火縄銃の製作工程を3次元コンピュータグラフィックス（CG）により再現し、歴史研究の成果を可視化するとともに、情報発信によって教育や地域振興に貢献することを目的としている。

大阪府堺市は、鉄炮伝来から江戸末期までの300年以上にわたり、根来（和歌山県）、国友・日野（滋賀県）とともに西日本の火縄銃の製造拠点として繁栄した。堺市の環濠エリア北部に位置する井上関右衛門家（以下「井上家」）は、江戸時代に急成長した鉄炮鍛冶である。江戸中期以降は、戦国時代から続く榎並家、芝辻家などのいわゆる「五鍛冶」が衰退の一途を辿る一方で⁽³⁾、井上家は逆に生産量を伸ばしていた⁽⁴⁾。2014年に井上家住宅に伝わる古文書資料（井上家文書）の確認作業が開始され、火縄銃の図面や取引先の名前が記された文書、帳簿類など江戸期の鉄炮生産に関する資料が多数発見された。その歴史的価値の高さから2015年より堺市と関西大学の共同研究調査が行われた⁽⁵⁾。その後、井上家住宅は、現存する唯一の鉄炮鍛冶の作業場兼住居の跡地として、市の有形文化財に指定された。また、保存工事の後に堺の鉄炮文化の発信を目的にした「鉄炮鍛冶屋敷」として2024年3月より一般公開されることになった⁽⁶⁾。

本研究では、可視化の対象として、井上家における江戸中期以降の火縄銃製作を取り上げた。CGのモデルにしたのは、井上関右衛門によって製作された細筒の火縄銃（図1参照）である。堺筒特有の装飾を一切施さず、銃身をシンプルな八角形に仕上げたこの量産型は、井上家製の火縄銃の典

型的な特徴を有している⁽⁷⁾。2021年度には、全パーツの形状を3Dスキャナーで計測し、得られたデータを用いて3次元CGモデルと質感データを制作した⁽⁸⁾。2022年度にはCGの試作映像を制作し、これをシンポジウムで公開した⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。その後のシンポジウム参加者や有識者からのフィードバックにより、火縄銃製作とCG映像に関する数々の貴重な知見を得た。

本稿では、2023年度に完成したCG映像「火縄銃の製造 ～鍛造による銃身の製造工程～」(図2)の制作過程と代表的なシーンについて解説する。銃身の製作工程に関しては、江戸時代に出版された火縄銃製作に関する書物⁽¹¹⁾⁽¹²⁾とその研究書^(7, 13-17)に加えて井上家文書中の「鉄炮作法秘伝書」⁽⁵⁾を参照し、不明な側面については専門家や現役の鍛冶師からの意見を取り入れて映像化した。さらに、映像の後半部分では、火縄銃の発射メカニズムを詳細に表現したCG映像を制作した。



図1 火縄銃 三匁筒 摂叟住 井上関右衛門 作(堺市所蔵)
(全長123cm、銃身長90cm、総重量2.4kg、鉛弾径：12.284mm)



図2 制作したCG映像のオープニング画面

2. CG映像制作に用いた資料

鉄炮が伝来してからわずか数年で国産化に成功した火縄銃の製造技術は、戦国時代を通じて急速に進化した。しかし、江戸時代以降、戦闘における需要の減少に伴い、大規模な技術革新は見られなくなったとされている⁽¹³⁾。井上家における火縄銃製作が盛んであった江戸中期以降の火縄銃製作の手法を記した書物として『中嶋流炮術管闕録』⁽¹¹⁾と『大小御鉄炮張立製作扣』⁽¹²⁾が挙げられる。これらの書物に関する研究資料も豊富に存在している^(7, 13-19)。さらに、井上家文書には、火縄銃の製造過程を図入りで説明する『鉄炮作法秘伝書』⁽⁵⁾も含まれている。本研究ではこれらの文献を基にし

てCG映像で表現するシーンを選定した。その概要について以下に述べる。

2.1 中嶋流砲術管闕録⁽¹¹⁾

本書は、周防国徳山藩（現在の山口県周南市とその近郊）の砲術家であった棟居保春によって著された砲術書であり、天保14年（1843年）5月に刊行された。その中の一部に火縄銃の製作方法が紹介されている。本書には製造の詳細は記されていないが、製作手順は挿絵を通じて分かりやすく示されており、現代の多くの学術書や文献で引用されている⁽⁷⁾⁽¹⁴⁻¹⁷⁾。

図3では、中嶋流砲術管闕録に記された火縄銃銃身の鍛造工程⁽¹⁹⁾を示している。銃口径を決める心金（真金、マキシノとも呼ばれる）に軟鉄の板材（瓦金）を巻き付けて鍛接し、銃身の筒を製作する。これを荒巻と呼び、このまま銃身として使用したものを「うどん張」と称する（図3(a)）。次に、銃身に細長い薄板を巻き付けて鍛接し、銃身を強化する。これを葛巻（かづらまき）と呼び、このようにして強化した銃身を「巻張」と称する（図3(b)）。さらに強度を要する大筒などの場合には、葛巻を2重にすることもあり（二重巻張）、その様子も本書で描かれている（図3(c)）。銃口部分など強度が必要な箇所には補強材を巻き付けて鍛接することもあり、外形を整えた後に火皿や目当（照準器）を取り付ける。銃身内部は、錐（きり）を使って研削し、すきまを調整するためにセリ木や紙を挟むことが記載されている。（図3(d)）。

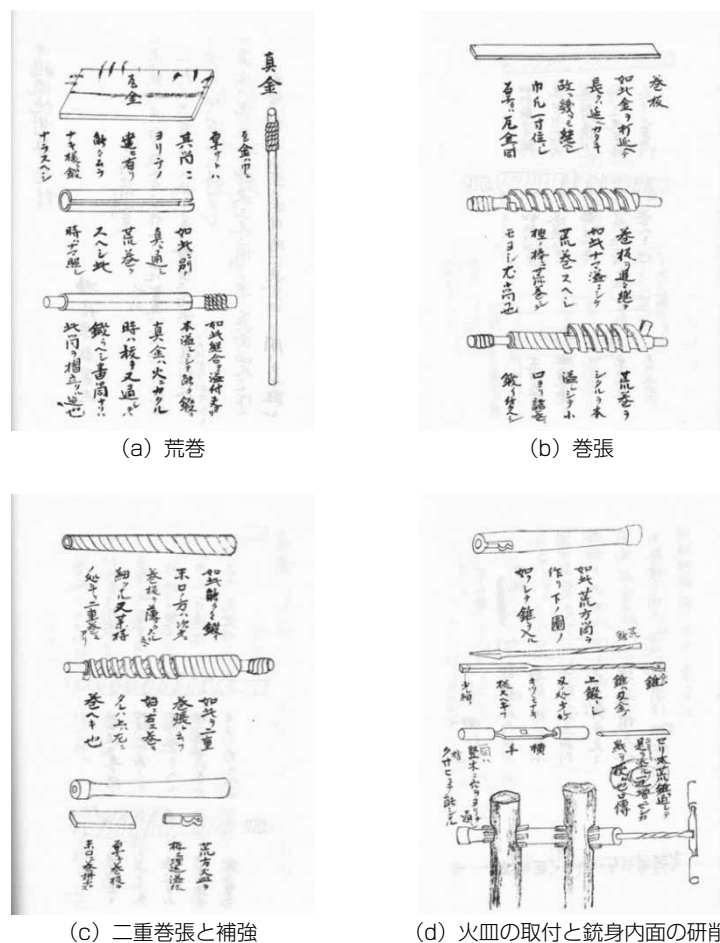


図3 中嶋流砲術管闕録に記された銃身の製作工程（国立歴史民俗博物館所蔵）⁽²⁰⁾

中嶋流砲術管闕録には、この後のページに、捻錐（ねじきり）による尾栓ねじ溝の形成、目当て（照準器）の合わせ方、台木（銃床）の製作手順、からくり（発射装置）の部品と組み立て方法、材料や作業上の注意点について記されている。

2.2 大小御鉄砲張立製作扣⁽¹²⁾

国友村（現在の滋賀県長浜市国友町）鉄砲鍛冶の国友一貫斎藤兵衛の著作であり、文政11年（1828）に刊行された。本書は、かつて老中であつた松平定信の依頼により、これまで秘伝であつた火縄銃製作技術を公開して普及させる目的で著されたものである⁽²¹⁾。一貫斎自身も製造拠点や職人によって異なる製作技術を標準化する必要性を書物の冒頭で述べている⁽¹⁸⁾⁽²²⁾。そのため、材料や部品の具体的な寸法や加工法など、製作上の注意点が詳細に記されている。基本的な製作工程は、上述した中嶋流砲術管闕録（図3）とほぼ同じであるが、本書では、細筒（二匁五分玉筒、本体の長さ約1m、重さ約3kg）の鍛造を例に取って荒巻、葛巻、銃身内部の研削と歪み取り、照準器の取り付け等を、当時の鍛冶職人が再現できるように記述している。ただし、尾栓ねじの製作方法に関する記述は本書には無い。また、実際の製作における経験的な作業のノウハウなど、文書化が不可能な部分もあり、現代において本書のみで当時の製造を完全に再現することは困難であると考えられる。

2.3 鉄砲作法秘伝書⁽⁵⁾

井上家文書には、図入りで火縄銃の製造過程を説明する『鉄砲作法秘伝書』（年未詳、文化9年（1812年）の注記あり）が含まれている（図4）。本書は、若林元敷（人物像は不明）の手になる鉄砲製造法の秘伝書を書写し、それに文化9年に大筒を制作した時の手順やメモを書き加えたものであり、筆者は井上関右衛門直次と考えられている⁽⁵⁾。

井上家の火縄銃製作における本書の位置づけについては明らかにされておらず、今後の研究の進展を待つ必要がある。ただし、本書に記述された銃身鍛造の基本工程は、上述した江戸中期の書物と一致しており、類似の絵図が多く含まれている（図5）。大砲の銃身の製作工程は、基本的には火縄銃と同じであるとされている⁽¹⁸⁾⁽²³⁾。ただ、口径が大きくなるにつれて、強度の確保や重さに対する取り扱いなど高度な技術を要するために、このような覚書が作成されたと考えられる。本書には、冒頭に「この書物に記載されている鉄砲は、全長が約70寸（2.1m）、口径約4寸5分（13.5cm）、先端部3寸5分（10.5cm）である。これらの寸法で鉄砲を作り、試しに立ててみることを勧める。」という旨の注意書きがある。また、大筒製作のための加工方法、作業スペース、ふいご、工具、治具、工程に必要な人数、材料などに関して詳細な付記がなされている。

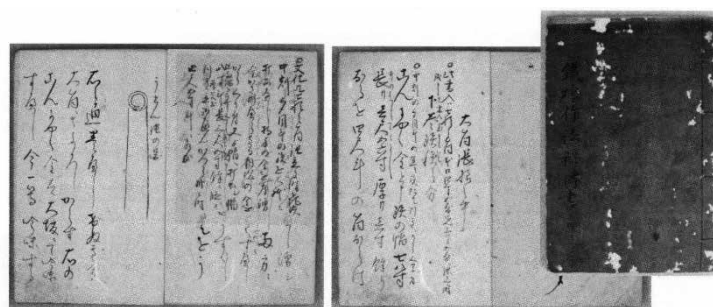


図4 鉄砲作法秘伝書（井上家文書）

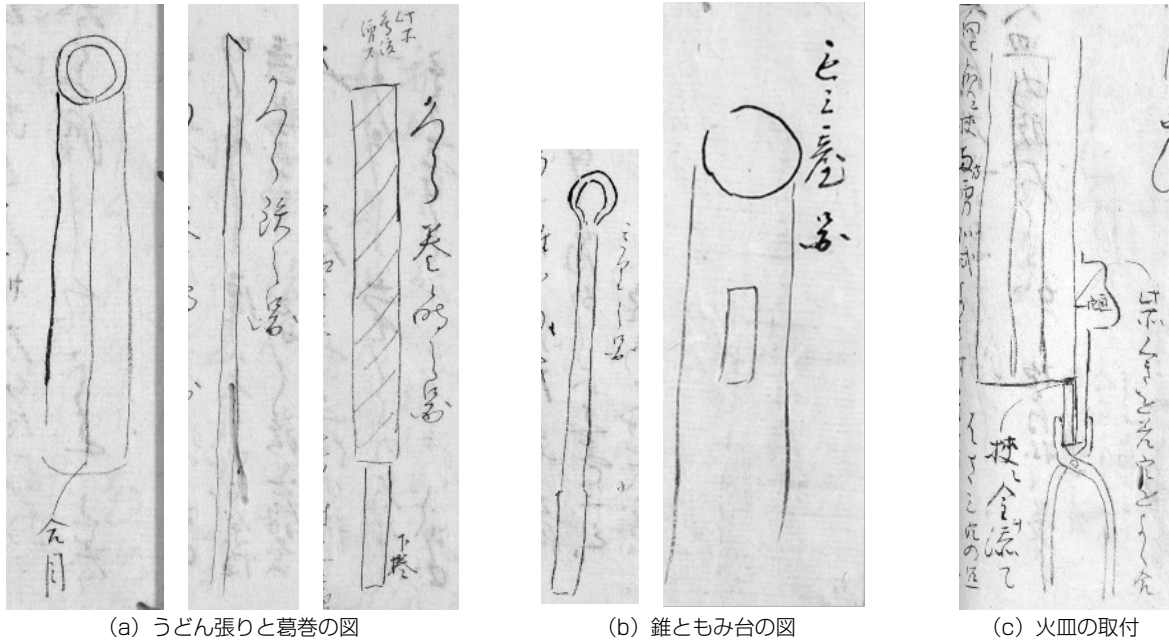


図5 鉄炮作法秘伝書中の銃身製作の挿絵

2.4 銃身鍛造の検証事例

銃身を鍛造する技術の再現と検証を目的として、堺鉄砲研究会の澤田平氏が監修した2種類の映像が制作され、鉄砲伝来や戦国時代の砲術を紹介するテレビ番組で放映された⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾。これらの映像では、銃身鍛造における荒巻と葛巻および尾栓ねじの熱間鍛造が再現されている⁽²⁶⁾。本研究で制作したCG映像は、作業の動きを含む状況を可視化するものであり、上述の文献資料に加えてこれらのビデオ映像の一部も参考にしている。

ここで製作された荒巻と葛巻の鍛造品は、鉄砲鍛冶屋敷のほか、国友鉄砲ミュージアム⁽²⁷⁾と堺市博物館⁽²⁸⁾でも参考展示されている(図6)。

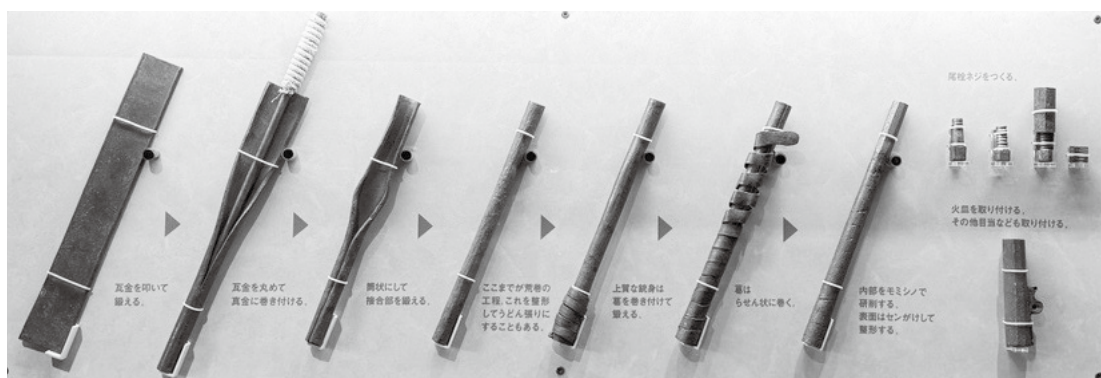


図6 銃身の鍛造工程を説明する展示(鉄砲鍛冶屋敷)

3. CGで再現する火縄銃の製作工程

火縄銃は、図1に示した通り、銃身、からくり(発射装置)、銃床(台木)の3パーツを主要な部

品として、これらを組み合わせた構造をしている。そのため、製作の基本工程は以下の4工程に分類される。

I. 銃身の鍛造と成形

II. からくり部品の製作と組み立て

III. 台木（銃床）の製作

IV. 全体の組み立てと調整

これらの作業は、一般には分業体制で行われており、井上家では、工程Iに加えてIVが行われていたと考えられている。また、工程IIとIIIに関しては、それぞれ近隣に住む金具師と台師が設計図に基づき制作して納品していたとされている。井上家住宅には、別棟の鍛冶場に加えて火縄銃の組み立てや調整を行う仕事場と完成品の火縄銃を顧客に提示して商談をするための「みせの間」が設けられていた⁽⁵⁾。なお、江戸時代の和泉国の名所を絵画と文章で紹介した地誌・旅行案内「和泉名所図会」⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾において、堺の鉄炮の製造や販売の様子が描かれているが、井上家において、鉄炮の店頭販売が行われていたかは明らかでない⁽³¹⁾（図7）。



図7 和泉名所図会に描かれた鉄炮鍛冶の店先（堺市博物館所蔵）

工程Iに関して、CGで表現すべき具体的な作業内容を以下のI_a～I_fの通りとし、工程IVとして完成品のパーツを組み合わせるシーンを加えて7シーンを制作した。

[CGで表現する製作工程]

I_a: 鍛造による銃身の成形（荒巻）

I_b: 葛巻（かずらまき）による銃身の強化

I_c: 銃身内側の研削

I_d: 尾栓ねじ（雌ねじ）の製作

I_e: 銃身外側の加工

I_f: 火皿や照準器の取り付け

IV: 銃身・台木・からくりの組み立て

工程ⅡとⅢに関しては、上述の文献資料の中に製作方法に関する記述があり、工程ⅢとⅣの一部を実践した事例⁽³²⁾もあるが、ここでは取り上げていない。組み立て後に、火縄銃の実際の動作を示すために、からくりの仕組みや発射のための火薬と弾丸の充填、着火と弾丸発射のメカニズム、発射シーンも制作した。

4. CG映像の制作

CGシーンのモデリングとレンダリングには、Autodesk社の3次元CGソフト3ds Maxを、また映像の編集には、Adobe社の映像編集ソフトAfter EffectsとPremiereを用いた。CG制作は、CGクリエイターの郷原啓二氏(PIXTOPE)が担当した。

制作したCG映像の各シーンの詳細について以下に述べる。

4.1 火縄銃制作工程の各シーン

(1) 工程Ⅰ_a: 鍛造による銃身の成形(荒巻)

軟鉄の板材(瓦金)に真金を当て、それを中心に筒状に変形させて合わせ目を鍛接する(図3(a)に相当)。真金は、鍛造の時のみ入れ、銃身を熱する時には抜き取ることが文献に記されており、CGでもそのように表現した。人間や腕のCGモデルを使うと動きの設定と質感表現に膨大な時間と労力を要するため、ここではハンマーのみを表示した(図8)。鍛造音は、堺市内の古式鍛錬者である水野鍛錬所⁽³³⁾にて収録した薄板の鍛造音を用いた。



図8 銃身の鍛造工程(荒巻)

(2) 工程Ⅰ_b: 葛巻による銃身の強化

銃身の筒に短冊状の軟鉄の薄板(巻板)を巻き付けて鍛接し強度を増す巻張の工程で葛巻ともよばれる工程である(図3(b)に相当)。ここでは、細筒に対して行われた1回だけの巻張を表現した。参考資料⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽⁵⁾には、うどん張りの銃身に巻板を巻き付けた後のスケッチ画が描かれているが、実際の鍛冶作業において、熱した長い薄板を銃身に巻きながら鍛造する具体的な方法が不明である。ここでは、鍛冶師と槌打ちによる二人がかりの作業⁽³⁴⁾を想定し、熱した巻板をハンマーで叩きながら銃身に巻き付け、継ぎ足しながら鍛接していくシーンを制作した(図9)。2022年度に制作した試作映像⁽¹⁰⁾では、小口径の火縄銃に用いられたとされる、予め巻かれた巻板を熱して銃身にはめ込む映像を制作したが、今回対象としているサイズの銃身の鍛造では、巻板を直接銃身に巻き付けて鍛接していたと考えられている。

なお、文献⁽¹²⁾では、巻板の寸法長さ3尺(約90cm)、幅2寸1分(約6.3cm)の板をタガネで半

分に切り4片を溶接して、全長1丈2寸（約309cm）の巻板を作成している。それを銃身に巻き付ける時に、「両小口をわかし留めし、中央部より前後に向かって鍛錬する」と記述されている。ただ、この方法では、長い巻板の全てを熱してから鍛接することは困難であり、先に銃身に巻いてから鍛造したことになる。この方法の検証は実証映像⁽²⁶⁾で一部試みられているが、確証は得られておらず、実際の加工法の解明は今後の課題となる。



図9 葛巻による銃身の強化

(3) 工程 I_c: 銃身内側の研削

銃身を作業台（もみ台）で固定し、研削用の錐「もみしの」を用いて銃身内部を研削する（図3(d)、図5(b)）。実際の作業環境と作業の様子は文献⁽⁷⁾⁽³⁴⁾⁽³⁵⁾および国友鉄砲ミュージアムにおける鍛冶場の復元展示⁽¹⁷⁾⁽²⁷⁾を参考にした。銃身の精度は銃の命中率に直接かかわるので、銃身のゆがみを修整しながら作業が行われた。最終的には、銃口の隙間を調節するために、もみしのと銃口の間には竹の薄板（せり木）と和紙を挟んで研削を行った⁽¹¹⁾。これにより、火縄銃の銃身内部は鏡面状に研磨された状態に仕上げられる。CGではすきまを調整しながら研削する点と鏡面状に仕上げられた銃身内部の表面の質感も再現した（図10）。

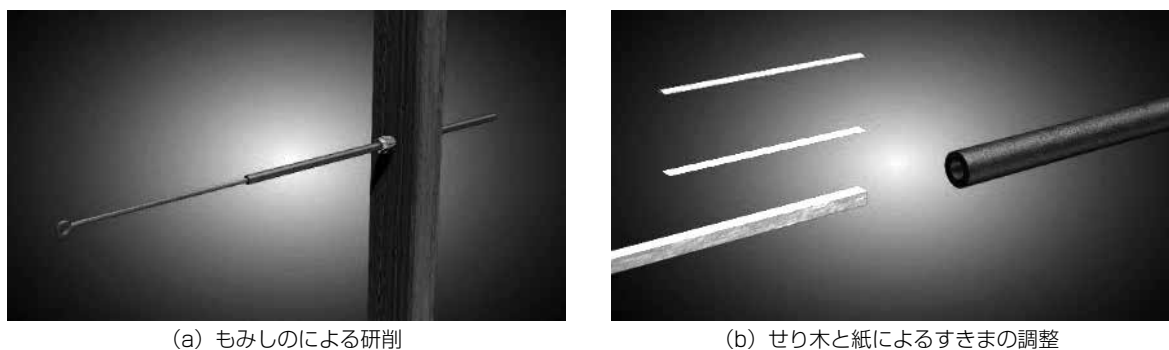


図10 もみしを用いた銃身内側の研削

(4) 工程 I_d: 尾栓ねじ（雌ねじ）の製作

銃身の最底端は取り外し可能なねじ（尾栓ねじ）となっているが、鉄砲が伝来した当時は、国内にはねじを切る技術が無く、ねじの制作に関しては様々な説がある。雄ねじは金属の円筒をやすりを使ってらせん状に削ってねじ山を形成するが、銃身の内側に切られた雌ねじの形成方法が問題となる。初期の頃は熱間鍛造で製作されたが、江戸時代にはねじ切り工具が開発され、切削加工で製

作されていたと考えられている。実際に、江戸時代に出版された文献⁽¹¹⁾には「尾栓ねじをねじ錐（きり）で作製する」ことが記されている。ただし、具体的な方法が分かる記述や挿絵が無く、「捻錐ノ仕上げ成りテ」の一文と捻頭（雄ねじ）の図が書かれているのみである。また同時期の文献⁽¹²⁾⁽⁵⁾には尾栓ねじに関する記述が無い。

近年では、金属工学の分野で、火縄銃を切断して組織の分析から加工法を調べる研究が行なわれており、年代と地域による加工法の違いが分かるようになってきた⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾。ただ、具体的な加工法を明記した文献は見つかっておらず、熱間鍛造と雄ねじの動きによる成型方法⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾のような説もある。ここでは、熱間鍛造法とねじ錐による切削法の両方をCGで表示することにして「初期には熱間鍛造、後にねじ錐が開発されて切削加工が行われた」旨をテロップで説明した（図11）。

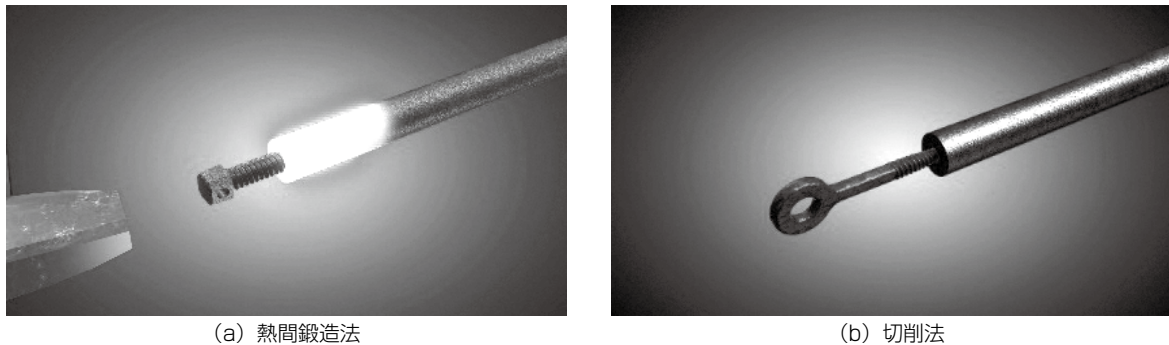


図11 尾栓ねじの作成

（5）工程 I_e: 銃身外側の加工

「せん」と呼ばれる切削工具を用いて銃身の外部を削り、やすりがけをして八角形に仕上げる。火縄銃の材料の軟鉄は柔らかいため、工具で切削することが可能である。実際には、鍛造過程で自ずと八角型に近い形状に仕上がると言われている⁽⁷⁾。ここでは、円筒の銃身をせんがけにより削るシーンを制作した（図12）。

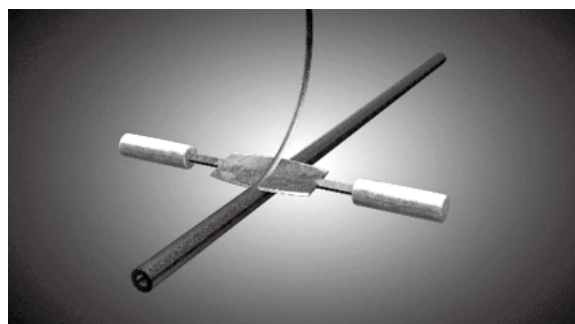
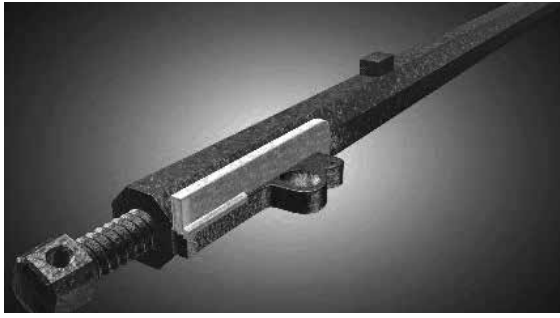


図12 せんがけによる銃身外側の加工

（6）工程 I_f: 火皿や照準器の取り付け

火皿や照準器は沸かし付け（溶着）もしくは銃身に逆テーパの「あり溝」を形成してはめ込んで取り付けられていた⁽⁷⁾。強度の観点からは後者の方が優位であり、現物の火縄銃もはめ込みとなっていたため、CGでもはめ込みのシーンを制作した（図13）。



(a) 火皿の取り付け



(a) 照準の取り付け

図13 火皿や照準器の取り付け

(7) 工程Ⅳ：組み立て

図1に示した通り、火縄銃は銃身、台木、からくりの3パーツからなり、これらははめ込みとピン留めによって固定されており、容易に分解可能である。実際に、火縄銃の使用後には、銃身を外し、尾栓ねじを外して内部に残った火薬の燃えかすを掃除していた。ここでは、これらの3パーツが空中で合体するアニメーションを制作し、最後に完成形を示した(図14)。

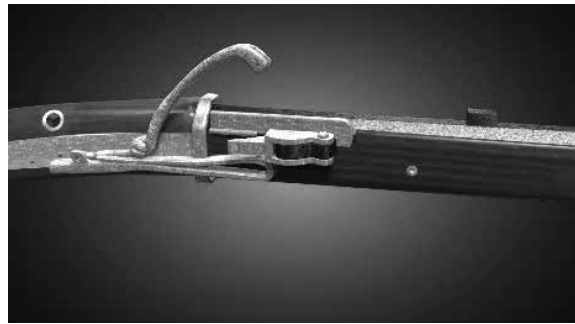


図14 銃身、台木、からくりの組み立て

4.2 火縄銃の操作と発射シーン

組み立て工程に続き、実際に火縄銃を撃つ時の操作と発射シーンもCG化して提示した。完成品の火縄銃とその扱いや発射の映像に関しては、Webサイトのビデオ映像や地域の歴史イベント等で見ることが出来る。ここでは、CG映像としてのみ表現可能な、からくりの内部のメカニズムや口薬への点火と玉薬への着火および銃弾の発射シーンを含んでいる。発射シーンには映画に用いられる火縄銃の発射音(松竹音楽出版株式会社提供)を用いた。制作したシーンは以下の通りである。

S1：玉込め

S2：口薬を入れる

S3：火縄に点火

S4：着火

S5：発射

代表的なシーン S4と S5を図15に示す



図15 発射のメカニズムと発射シーン

5. CG映像の編集と公開について

各シーンのビデオクリップを編集して映像を制作した。映像の全長は4分54秒であった。各工程を説明する字幕を提示した。フリーの音源を使ってBGMを追加した。鍛造作業の音や火縄銃の発射音などの音響効果によって、CG映像のリアリティが向上し、火縄銃制作の各工程の把握がより容易となった。

CG映像は、2024年度に、関西大学なにわ大阪研究センターのWebサイトを通じて公開される予定である。また、2024年3月3日開館の公開施設「鉄炮鍛冶屋敷」の鍛冶場における鍛冶技術の紹介映像の中でも一部が使用されている。

6. おわりに

火縄銃製作に関する歴史研究の可視化と歴史教育および地域振興を目的に、3次元CGを用いた映像を制作した。江戸時代に堺の鉄炮鍛冶 井上関右衛門が制作した火縄銃をモデルとし、文献資料に基づいて代表的な製作工程をCG映像で表すことができた。文献資料のみからは分からない点に関しては、有識者へのインタビューや堺市内の鍛冶への訪問調査により、可能な限り当時の製作方法に近づけて可視化を行った。

今後の方向として、様々な機会に映像を公開して情報発信を行いたいと考えている。また、複合現実感(MR)技術を用いた展示用コンテンツの開発や鍛冶場や七道浜試射場など当時の環境を再現したVRとメタバースコンテンツについても開発を進める予定である。

謝辞

本研究は、関西大学なにわ大阪研究センターの特別研究費および関西大学と堺市の連携事業費による支援を受け実施されました。資料調査とCG制作に際しては、井上家当主であり鉄炮鍛冶屋敷史談会の会長である井上俊二様、堺鉄砲研究会主宰の澤田平様、水野鍛錬所社長の水野淳様、国友鉄砲研究会会長の廣瀬一實様、長浜市長浜城博物館元学芸員の太田浩司様、早稲田大学名誉教授の中江秀雄様より、火縄銃製造に関する深い知見と貴重なご意見を賜りました。ここに、厚く御礼申し上げます。

本研究を遂行するにあたり、堺市文化観光局歴史遺産活用部文化財課、堺市博物館および鉄炮鍛

冶屋敷史談会副会長兼事務局長の土井健一様には多大なるご支援とご協力をいただきました。また、井上関右衛門家の史料をもとに堺市との共同研究を牽引してこられた藪田貫関西大学名誉教授、乾善彦なにわ大阪研究センター長、川畑一成理事長付参与および社会連携事務局・なにわ大阪研究センター事務担当の皆さんのご協力に感謝いたします。そして最後に、CG制作をご担当いただいたPIXTOPE代表の郷原啓二様、コンテンツ制作と一緒に取り組んだ林研究室大学院生の石田考毅さんと青木唯さんに深甚なる感謝を申し上げます。

参考文献

- (1) 宇田川武久：鉄砲伝来 ― 兵器が語る近世の誕生 ―，講談社，2013-5.
- (2) 霜禮次郎：和銃の歴史 ― 鉄砲伝来からオリンピックまで ―，文芸社，2019-12.
- (3) 澤田平：井上関右衛門鍛冶屋敷，堺鉄砲研究，No.11，pp.86-94，1983-4.
- (4) 藪田貫：堺の刃物鍛冶と鉄砲鍛冶，関西大学なにわ大阪研究，vol.5，pp.45-58，2023-3.
- (5) 堺市・関西大学，堺鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家資料調査報告書 ― 蔵のとびらを開いてみれば ―，2020-3.
- (6) 鉄砲鍛冶屋敷（堺市立町家歴史館 井上関右衛門家住宅），堺観光コンベンション協会公式サイト，<https://www.sakai-tcb.or.jp/spot/detail/27>（参照 2024.02.19）.
- (7) 澤田平：日本の古銃 総集編，堺鉄砲研究会，1995-5.
- (8) 坂口和弥，林武文：火縄銃の3次元デジタルアーカイブの構築とコンテンツ開発に関する検討，関西大学なにわ大阪研究，Vol.4，pp.39-50，2022-3.
- (9) 関西大学ホームページ：プレスリリース「(共同発表) 堺市と関西大学との地域連携事業『堺鉄砲鍛冶屋敷講演会』を開催」を配信〈https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/pr/news/2023/09/post_74292.html〉（参照 2024.1.31）.
- (10) 林武文：3次元CGによる火縄銃製造工程の可視化に関する基礎検討，関西大学なにわ大阪研究，vol.5，pp.59-66，2023-3.
- (11) 棟居保春：中島流砲術管闕録，1843-5（青木国夫他編，所荘吉解説，中島流砲術管闕録（江戸科学古典叢書 43），恒和出版，1982-9）.
- (12) 一貫斎国友藤兵衛：大小御鉄砲張立製作扣，1818-12（青木国夫他編，所荘吉解説，大小御鉄砲張立製作（江戸科学古典叢書 42），恒和出版，1982-9.
- (13) 長浜市長浜城歴史博物館編：「国友一貫斎関係資料」重要文化財指定記念，国友一貫斎 ― 発明とその夢 ―（企画展図録），市立長浜市長浜城博物館，2023-2.
- (14) 所荘吉：火縄銃，雄山閣，1964-12.
- (15) 所荘吉：図解 古銃事典，雄山閣，1971-2.
- (16) 宇田川武久編：日本銃砲の歴史と技術，雄山閣，pp.254-268，2013-9.
- (17) 長浜市立長浜城博物館：特別展「国友鉄砲鍛冶 ― その世界 ―」改訂版（図録），市立長浜城博物館，1991-3.
- (18) 有馬成市：一貫斎国友藤兵衛伝，武蔵野書院，1932-3.
- (19) 長浜市長浜城歴史博物館：江戸時代の科学技術 ― 国友一貫斎から広がる世界 ―，サンライズ出版（2003-10）.
- (20) 国立歴史民俗博物館：公式ホームページ〈<https://www.rekihaku.ac.jp>〉（参照 2024.02.19）.
- (21) 太田浩司：国友一貫斎の生涯，江戸時代の科学技術 ― 国友一貫斎から広がる世界 ―，長浜市長浜城歴史博物館，pp.20-31（2003-10）.

- (22) 太田浩司：「機械」としての国友鉄砲，江戸時代の科学技術 —— 国友一貫斎から広がる世界 ——，長浜市長浜城歴史博物館，pp.32-36（2003-10）。
- (23) 中江秀雄：日本の大砲とその歴史，雄山閣，2022-7。
- (24) 澤田平監修・出演：火縄銃が語る！戦国ハイテク革命（映像作品）（TBS 番組「地球浪漫（1986.4-1988.3.25）」にて放映）堺鉄砲研究会所蔵 DVD。
- (25) 澤田平監修：澤田式実験考古学（映像作品）（「NHK 歴史みつけた鉄砲伝来」1990.6.26放映），堺鉄砲研究会所蔵DVD（1990）。
- (26) 澤田平：「堺の鉄砲鍛冶」，フォーラム堺学 第9集，堺都市政策研究所，pp.5-35, 2003-3。
- (27) 国友鉄砲ミュージアム：公式ホームページ〈<https://kunitomo-teppo.jp/>〉（参照 2024.02.19）。
- (28) 堺市博物館：「堺と鉄砲」展示コーナー，公式ホームページ〈<https://www.city.sakai.lg.jp/kanko/hakubutsukan/>〉（参照 2024.02.19）。
- (29) 秋里籬島著，竹原信繁画：和泉名所図会「打物所」挿絵（堺市博物館所蔵）（1796）
- (30) 堺市博物館：堺鉄砲 —— その源流と背景を探る ——，開館10周年記念特別展図録，（1990-4）。
- (31) 藪田貫：「鉄砲史」のなかの堺鉄砲鍛冶井上関右衛門家について【特集 近世堺と鉄砲鍛冶】，大阪歴史学会『ヒストリア』，vol. 288, pp.10-31, 2021-10。
- (32) 廣瀬一實：火縄銃研究 銃床製作の控，国友鉄砲研究会，1991-6。
- (33) 水野鍛錬所：公式ホームページ〈<http://www.mizunotanrenjo.jp/>〉（参照 2024.02.19）。
- (34) 湯次行孝：国友鉄砲の歴史（別冊淡海文庫5），サンライズ出版，1996-7。
- (35) 岡崎清：国友鉄砲鍛冶小屋の現状，銃砲史研究，365, pp.59-68, 2010-4。
- (36) 中江秀雄，久保田俊輔，峯田元治，工学的金属組織観察が語る火縄銃の製法と材質，宇田川武久編：日本銃砲の歴史と技術，雄山閣，pp.254-268, 2013-9。
- (37) 中江秀雄，峯田元治：火縄銃の造り方 金属組織による解析，素形材，No.59, p.44, 2018-3。

堺アルフォンス・ミュシャ館をテーマとした バーチャルミュージアムの開発

加藤 愛 岩崎 崇朗 林 武文

要 旨：本研究では、堺アルフォンス・ミュシャ館に所蔵されている作品をVR上で鑑賞するバーチャルミュージアムの開発を行った。また、開発したコンテンツがVR上で美術品を鑑賞する方法として有効であるかを確認するため、アルフォンス・ミュシャに関する講演会や100名程度に対して本コンテンツ体験後にアンケート調査を行った。

キーワード：VR、VRミュージアム、VR酔い、アルフォンス・ミュシャ、地域振興

1. はじめに

近年、バーチャル・リアリティ（VR）技術はゲームなどのエンターテインメントだけでなく、防災教育や観光など様々な分野で活用されつつある^{[1][2]}。その中で、ミュージアム分野においてVR技術などを含むデジタル技術の活用が注目が寄せられるようになった。

1990年代の欧米にてミュージアムの役割が再検討をされ始めたことをきっかけに、デジタル技術とミュージアムの融合に関する研究が増加し、2006年には日本において文部科学省がデジタルミュージアム構想を立ち上げた^[3]。それ以降もデジタルミュージアムに関連するコンテンツやシステムが開発されているが、デジタルミュージアムにおけるVR活用は現地に行かなければ体験することができないシステムが多い^[4]。これによって、コロナなどの感染症や自身の体質や病気の問題で外出が困難な人や、物理的距離があることで時間や費用が掛かり訪れることを躊躇する人は体験を行うことが困難であると考えられる。

日本にあるミュージアムの一つ「堺アルフォンス・ミュシャ館（ミュシャ館）」は、アールヌーボの芸術家であるアルフォンス・ミュシャの作品に特化した収蔵と企画展示を行う博物館である^[5]。収蔵点数500点は国内最大であり、代表的な作品も含まれているにも関わらず博物館の規模や地域性といった点で知名度は高くない。このことから、本研究ではミュシャ館に収蔵されている作品をバーチャルミュージアムの中で展示し、現地に訪れなくとも体験者が時間や距離に縛られず体験することが可能なVRコンテンツの制作を行うこととした。本コンテンツでは、ミュシャ館を外部からでも体感できるよう実際の状態を再現した。また、本研究の結果ミュシャ館の知名度が上がり、現地を訪れる人が増えれば地域振興に繋がると考えた。

コンテンツの形式については、機材を保有していれば没入感があり狭い場所でも体験可能なヘッドマウントディスプレイ（HMD）を用いたウォークスルー型のVRミュージアムとした。開発過程

では、展示室の3Dモデリングを行うことによって会場の内装を制作した。近年、VRミュージアムは360°パノラマ画像を利用したコンテンツが多くみられるが^[6]、この場合移動可能な場所が限られており臨場感が味わえないと考えた。さらに、企画展などにおける作品の入れ替えにも対応ができない。これらの理由から、作品の入れ替えがスムーズに行うことが可能な3Dモデリングによる制作を選択した。

また、本コンテンツのVRミュージアムという形式が体験者にとって楽しめるものかを調査するため2回に渡って展示を行い、コンテンツ体験後にアンケート調査を実施することで有効性を評価した。

2. コンテンツ開発

2.1 開発方法

開発するVRミュージアムは、実在する博物館をステージとしてHMDを用いて展示を行うというコンセプトである。したがって、本開発ではミュシャ館の4階展示フロアを基に第一展示室・第二展示室・エレベーターホールや廊下を舞台としたVRミュージアムを制作した。以下にコンテンツの開発方法を記述する。

(1) 手書きの図面のCADデータ化

実物を再現するために、ミュシャ館4階の手書き設計図(図1、図2)を基にCADソフトJw_cadを用いて展示会場の枠組みを作成した。

(2) 展示会場の3Dモデル化

前述したCADデータを基に、3DCGソフトMayaと3dsMaxを用いて展示会場の壁を作成した(図3)。その後、作成したデータをゲームエンジンUnityにインポートし、床や天井を張り付けることで基本的な土台の作成を行った。

(3) ミュージアムの内装の制作

Unityを用いて3Dモデル化した展示会場に対して、ミュシャ館の学芸員が提案したデザイン案を基に作品の配置を行った。本コンテンツでは、アルフォンス・ミュシャが制作した絵画から彫刻や装飾品まで幅広い種類を取り扱い、あわせて約50点の作品を使用する。また、展示品を明るく見せる際、HMD上では同時に表示できるライトに限りがあった。したがって、Unityの基本機能であるライトを設置するのではなく展示品自体にベイク処理を施すことによって、作品が明るく見えるよう設定した。その他にも、実際の天井や壁・床に似たテクスチャの設定や、絵画を飾る際に必要なマットや額縁の作成・作品のキャプションの自動配置、椅子などの適切な家具の設置などを行った。(図4、図5)

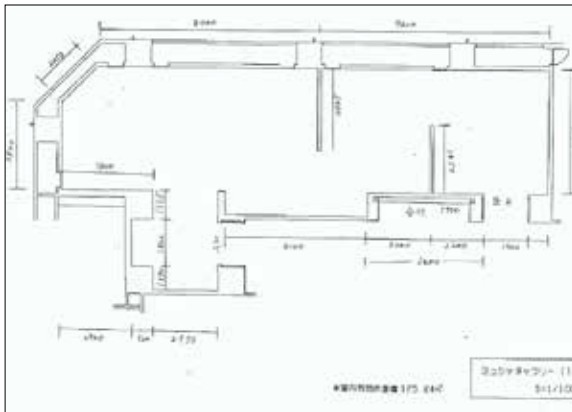


図1 第1展示室の図面

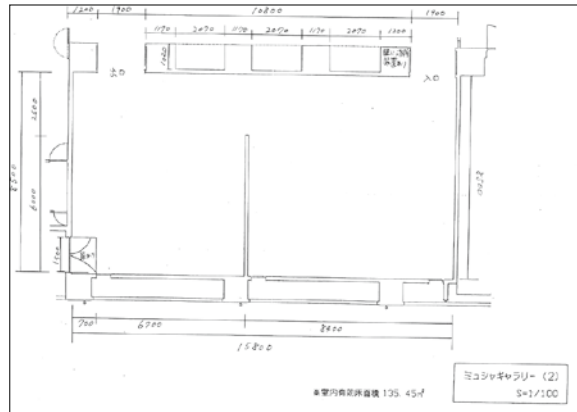


図2 第2展示室の図面

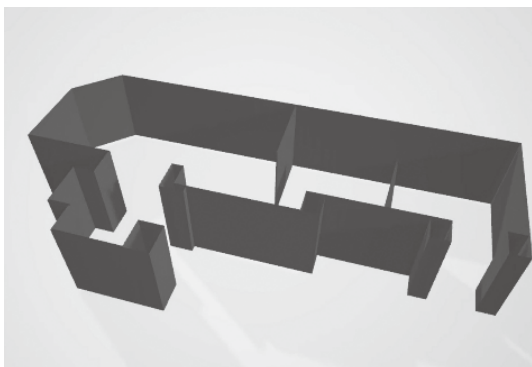


図3 展示会場の壁

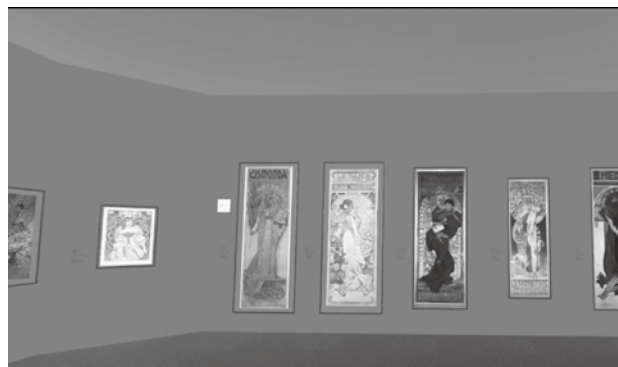


図4 VR映像の第1展示室①



図5 VR映像の第1展示室②

2.2 コンテンツの動作

開発した展示会場は、HMD 機器の Meta Quest2 を装着して体験することが可能である。展示会場内を移動する際には、Meta Quest2 付属のコントローラーを使用する。また、初期位置はミュシャ館4階の受付カウンターの前であり、右コントローラーのBボタンを押すことによって初期位置に戻る設定とした。(図6)



図6 VR内の初期位置

2.3 コンテンツの公開

本コンテンツは2か所で公開された。1か所目は、アルフォンス・ミュシャに関する講演会である。本講演会は2022年11月19日に関西大学東京センターにて開催され^[7]、ミュシャ館の学芸員による講演が主体であり、その他の時間で講演会の参加者がVRミュージアムを体験した。(図7)

2か所目はミュシャ館での企画展示である。本展示は、2022年12月3日から2023年4月2日まで行われた年間シリーズ展「ミュシャLabo」の第3弾「ミュシャ×メディア」という企画であり^[8]、その一部としてVR体験ブースを設置し訪問者が体験を行った。



図7 東京講演会

3. コンテンツの評価方法

本コンテンツについての評価を行うため、VRミュージアムの体験者に対してアンケート調査を行った。なお、アンケート調査の内容は調査場所や提示条件の違いがあったため、東京センターでの講演会（東京講演会）・ミュシャ館の企画展示の前半（ミュシャ館①）・後半（ミュシャ館②）の3種類で内容を変更した。以下では、この3種類に関して質問内容を記述する。

3.1 東京講演会

質問1から質問4及び質問6はコンテンツ以外に関する質問項目であり、「はい」か「いいえ」の二択式回答とした。また、質問5-1から5-4はコンテンツについての質問項目であり、1：「そう思わない」～5：「そう思う」の5段階で回答を行う形式である。以下にアンケート項目を記述する。

- 質問1 : 今までに VR を体験したことはありますか。
- 質問2 : 「堺アルフォンス・ミュシャ館」を訪問したことはありますか。
- 質問3 : (質問2 「はい」と回答した方に対して) 実際のミュシャ館をモデルにしているとわかりましたか。
- 質問4 : (質問2 「いいえ」と回答した方に対して) 実際のミュシャ館を訪問してみたくありませんでしたか。
- 質問5-1 : 酔いや目の疲れなどの疲労感はありましたか。
- 質問5-2 : コントローラーでの移動や身体を動かして方向を変えることに違和感はありましたか。
- 質問5-3 : 壁や天井の圧迫感はありましたか。
- 質問5-4 : 全体的に満足感は得られましたか。
- 質問6 : 次回作があれば体験してみたいと思いますか。
- 質問7 : 今回の VR 体験について率直な感想をお聞かせください。その他、気が付いたことがあればご自由にお書きください。

3.2 ミュシャ館①

ミュシャ館にて行った VR 体験であるため、上記で記述した本博物館への訪問歴を問う質問2と質問4は除外した。なお、本コンテンツはミュシャ館を VR 上で再現するというコンセプトを持つため、再現に関する質問3は除外せずにアンケート調査を行った。

3.3 ミュシャ館②

前項にて記述したものに、コンテンツに関する質問にて2つの項目を追加した。1つ目は展示作品の種類や量について1:「少ない」～5:「多い」とし、2つ目は質感について1:「悪い」～5:「良い」とする。また、3章1節にて記述した質問5-1については、「酔い」と「目の疲れ」を分け、1:「感じなかった」～5:「感じた」とする質問項目とした。

4. 提示条件

VR ミュージアムの体験について、研究当初は座位姿勢で Meta Quest2 の歩行における標準速度 (OVR Player Controller のデフォルト値) での体験を想定していた。しかし、東京講演会にてアンケート調査を行った結果、体験者の殆どに VR 酔いの症状が見られた。その中には、ひどい酔いを感じて体験を中断した体験者も存在した。

本コンテンツはミュシャ館での長期的な展示も行われる予定であったため、体験者が快適に VR ミュージアムの体験を行えるように改善をする必要があった。したがって、ミュシャ館での展示時には東京講演会と異なる提示条件を設定した。なお、上記の条件についてはアンケート調査にて分類した東京講演会・ミュシャ館①・ミュシャ館②の3種類にて条件の変更を行った。変更する点については、VR 酔いに関する先行研究で挙げられた「感覚不一致説」を基に、体験者の体勢と移動速度・移動方向の条件を設定した^[9]。

東京講演会では回転椅子に座位姿勢を取り移動速度は Meta Quest2 の標準速度 (1.10m/s) とし、移動方向に自由度を持たせた条件とした。ミュシャ館①では起立した状態とし、移動速度や移動方

向は東京講演会と同じ条件とした。ミュシャ館②はミュシャ館①と同じく起立した状態で、移動速度は標準よりも遅く（0.87m/s）、移動方向は顔を向けている方向のみに進む制限を設定した。

5. コンテンツの評価結果

コンテンツの評価結果は、2択式の質問項目や自由記述を3種類のアンケートごとにまとめ、最後に5段階回答の質問項目の結果をまとめる。なお、VRコンテンツの利用年齢に関するガイドラインに基づき13歳未満は体験に参加しなかった^[10]。

5.1 東京講演会（2択式と自由記述）

本アンケート調査には23名（うち21名が有効回答、34歳から60歳、女性10名、男性7名）が参加した。

質問1のVR体験の有無については71%が経験ありと回答し、質問2のミュシャ館への訪問歴については43%が訪問歴ありと回答した。質問3のミュシャ館の再現度や質問4のミュシャ館への訪問意欲については、全員「はい」と回答した。質問6の次回作の体験意欲については86%が「はい」と回答した。質問7の自由記述では「VR酔い」に関する記述を行った体験者は10名、「解像度の低さ」の記述は2名、「体験時間」に関する記述は2名、「彫刻作品の立体感の低さ」の記述は3名、その他に「没入感・臨場感」や「作品量の満足感」「鏡の映り込み」「展示会場の殺風景さ」などの意見が寄せられた。

5.2 ミュシャ館①（2択式と自由記述）

本アンケート調査には24名（うち24名が有効回答、17歳から76歳、女性16名、男性8名）が参加した。

質問1のVR体験の有無については58%が経験ありと回答し、質問2のミュシャ館の再現度は全員が「はい」と回答した。質問6の次回作の体験意欲については、91%が「はい」と回答した。質問7の自由記述では「操作性」に関する記述を行った体験者は4名、その他に「キャプションが見えない」や「コンテンツが少ない」「VR酔いの発生」などの意見が寄せられた。

5.3 ミュシャ館②（2択式と自由記述）

本アンケート調査には58名（うち52名が有効回答、14歳から63歳、女性32名、男性17名）が参加した。

質問1のVR体験の有無については、49%が経験ありと回答し、質問2のミュシャ館の再現度は92%が「はい」と回答した。質問6の次回作の体験意欲については、92%が「はい」と回答した。質問7の自由記述の項目では「楽しかった、面白かった」など肯定的な回答は9名、「操作性の困難さ」に関する記述は6名「移動操作の拡張」の記述は6名、「ピント調整の困難さ」の記述は6名、操作説明が分かりづらい」と回答した体験者は3名、その他「テクスチャの荒さ・画質の悪さ」や「立体感あり」などの意見が寄せられた。

5.4 5段階回答の質問項目

本節では5段階回答を行った質問項目について、3種類のアンケートの中で共通する項目ごとで

スコアの平均値の比較を行った。結果の分析は、テューキー・クレーマー法による一元配置の分散分析を用いた。テューキー・クレーマー法とは、各群のデータ数が異なる場合に3つのデータ群相互の母平均の有意差を調べる多重比較法である。

(1) 「疲労感」又は「酔い」について

東京講演会とミュシャ館①では疲労感、ミュシャ館②では酔いの項目で質問を行った結果を比較した。図8に質問5-1に対する結果の箱ひげ図を示す。東京講演会と比較するとミュシャ館①・ミュシャ館②でのスコアの平均値が低下する、すなわち酔いが改善される傾向を示した。東京講演会とミュシャ館①では $P=0.0481$ であり有意水準5%で有意な差が見られ、東京講演会とミュシャ館②では $P<0.001$ であり有意水準1%で有意な差が見られた。一方で、ミュシャ館①とミュシャ館②では $P=0.5389$ と有意な差は見られなかった。

(2) 操作の違和感について

図9に質問5-2に対する結果の箱ひげ図を示す。東京講演会とミュシャ館①では $P=0.7564$ 、東京講演会とミュシャ館②では $P=0.2017$ 、ミュシャ館①とミュシャ館②では $P=0.6133$ であるため、有意な差は見られない。

(3) 圧迫感について

図10に質問5-3に対する結果の箱ひげ図を示す。東京講演会とミュシャ館①では $P=0.9972$ 、東京講演会とミュシャ館②では $P=0.9996$ 、ミュシャ館①とミュシャ館②では $P=0.9926$ であるため、有意な差は見られない。

(4) 満足感について

図11に質問5-4に対する結果の箱ひげ図を示す。東京講演会とミュシャ館①では $P=0.7097$ 、東京講演会とミュシャ館②では $P=0.5370$ 、ミュシャ館①とミュシャ館②では $P=0.9855$ であるため、有意な差は見られない。

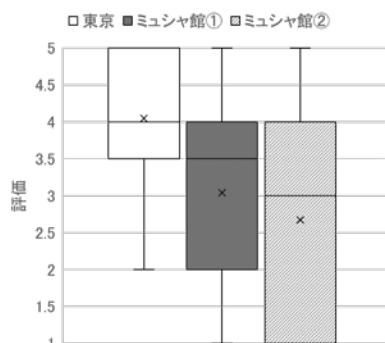


図8 疲労感・酔いについて

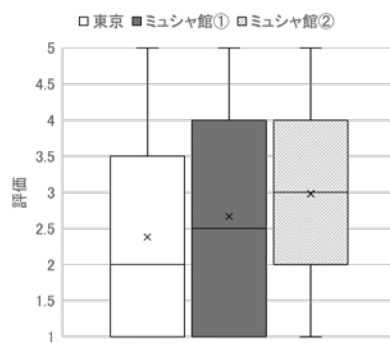


図9 操作の違和感について

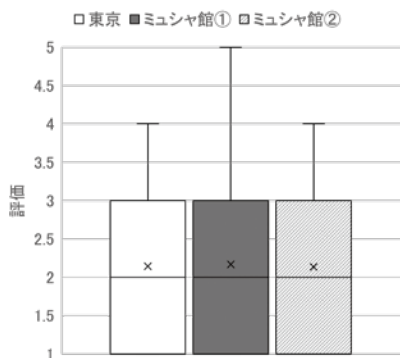


図10 圧迫感について

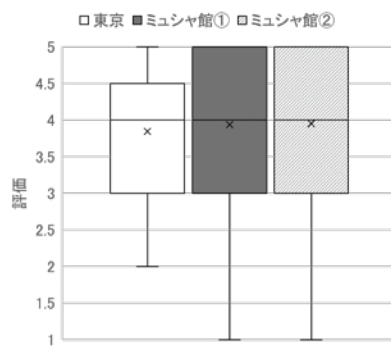


図11 満足感について

6. 考察

前章にて記述した調査結果を基に、本章ではコンテンツ全体に対するアンケート調査の結果とVR酔いに分けて考察を行う。

6.1 全体に対するアンケート結果の考察

第一に、本コンテンツがミュシャ館を再現している点については、東京で行われた講演会だけでなく、ミュシャ館内の展示においても再現していることが体験者に伝えられていることが分かる。

次に操作感については、東京講演会ではスコアの平均は2.38であり全体的な評価も違和感が少ないとの回答が多かったにも関わらず、ミュシャ館②ではスコアの平均が2.98と数値が増加し全体的な評価も違和感があるとの回答が増加した。これについては、移動速度と移動方向の制限を設けたことによる操作間の差異及びVR経験者の割合の差が要因として挙げられる。また、ミュシャ館での展示ではスタッフによる体験時の支援がなかったこともあり、自由記述でも述べられているように操作の説明表示だけでは理解が困難であった可能性も挙げられる。

一方で、圧迫感や満足感に関しては全体を通して肯定的な評価が得られた。また、自由記述の中でも「楽しかった」という意見が多数見られ、次回作があれば体験したいという項目については80%以上が体験したいと回答した。

したがって、本コンテンツについては操作性の難しさや展示作品の画質の悪さなどが見られるものの、VRミュージアムとして体験者が楽しめるものであったと考えられる。

6.2 VR酔いに関する考察

第一に、VR酔いとは「VR環境を体験することにより映像酔いと同様の体調不良を生じる状態」であり、一般的な症状にめまいや倦怠感・眠気・頭痛・胃部不快感・冷や汗・吐き気などが挙げられる^[9]。

本研究のアンケート調査においても、「疲労感」あるいは「酔い」という項目を用いて、コンテンツを通したVR酔いの発症を確認した。ここでは、VRミュージアムの体験者に対して3種類の提示条件で体験をさせ、その結果を基にVR酔いの発症に違いがあったかを調査した。

結果として、座位姿勢で移動速度が速いVRミュージアムを体験した東京講演会に比べて、起立姿勢でVRミュージアムを体験したミュシャ館①は酔いの症状を抑えられたことが確認できた。また、東京講演会よりも起立状態で移動速度が遅く、移動方向の制限を設けたミュシャ館②が最も酔いが少ないことが確認できた。

したがって、VR映像を視聴する際に体験者がそれに適した体勢（起立した状態）を取るのみでも酔いは軽減され、さらに提示される視覚情報の変化を制限することによって格段にVR酔いが改善されることが判明した。

7. まとめと今後の課題

本研究では、堺アルフォンス・ミュシャ館の3Dモデルと収蔵作品の画像を用いてVRミュージアムを構築し、2回の公開を行った。公開時のコンテンツ体験者に対するアンケート調査により、本コンテンツの有効性を確認できた。今後本コンテンツを様々な機会で開催することによって、堺

アルフォンス・ミュシャ館の知名度が上がり地域振興に貢献できると考える。また、本研究を通して主に3つの事柄が今後の課題として挙げられる。

1つ目は、VR酔いの原因の追究である。4章にて述べたように、VR酔いは視覚情報と身体情報の不一致で起こることが多く、本コンテンツにおける酔いの要因も同じものと考えられる。しかし、改善後のVR体験でも酔いが見られるため、再度VR酔いの原因を追究する必要があると考える。

2つ目は、コンテンツの品質の向上である。体験者の自由記述にも述べられているように、展示品の画質の荒さが見られるため、今後改良の余地があると思われる。

3つ目は、立体作品の3DCGモデル化である。本コンテンツにも展示されていた彫像「ラ・ナチュラル」や「蛇のプレスレット」の立体化を希望する意見が多く見られた。今後のVRミュージアムの可能性を広げるためにも彫刻の3次元モデル化は必須となると考えられることから課題の一つとして挙げる。

謝辞

本研究は2022年度関西大学と堺市の地域連携事業より支援を受けた。ミュージアムの図面と所蔵作品データの提供を受けた「堺アルフォンス・ミュシャ館」の関係者各位に感謝の意を表す。

参考文献

- [1] 板宮朋基：「VR/ARによるシミュレーション結果の可視化から体験化、経験化へ：防災教育等への応用」、日臨麻会誌、Vol.49、No.1、pp.109-114（2021）
- [2] 崎山皓平、佐久間康富：「観光コンテンツにおけるCGVRの実態と利用者の評価からいた可能性と課題に関する研究」、日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集、Vol.20、pp.73-76（2022）
- [3] 文部科学省：「資料4 デジタル・ミュージアムの実現に向けた研究開発の推進」、〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu2/006/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2012/07/30/1323379_4_1.pdf〉（2023.6.13アクセス）
- [4] 鳴海拓志：「デジタルミュージアムにおけるVR/ARの利用」、人工知能学会誌、Vol.31、No.6、pp.794-799（2016）
- [5] 堺アルフォンス・ミュシャ館：「堺アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）」、〈<https://muchasakai-bunshin.com/>〉（2023.6.15アクセス）
- [6] 国立科学博物館：「おうちで体験！かはくVR」、〈<https://www.kahaku.go.jp/VR/>〉（2023.6.13アクセス）
- [7] 堺アルフォンス・ミュシャ館：「アルフォンス・ミュシャ 東京駅に出現！講演及びVR体験イベント @関西大学東京センター」、〈<https://muchasakai-bunshin.com/event/tokyomucha2022-lec-1/>〉（2023.6.13アクセス）
- [8] 堺アルフォンス・ミュシャ館：「ミュシャLabo #03「ミュシャ×メディア」」、〈https://muchasakai-bunshin.com/event/mucha2022_labo3/〉（2023.6.13アクセス）
- [9] 氏家弘裕：「映像酔い、VR酔いの発生メカニズムと生体影響評価」、VR/AR技術における感覚の提示、拡張技術と最新応用例、技術情報協会、pp.20-33（2021）
- [10] エンターテインメントXR協会：「VRコンテンツのご利用年齢に関するガイドライン」、〈<https://extra.or.jp/pdf/guidelines.pdf>〉（2023.6.13アクセス）

近代大阪における歌舞伎の辻番付

北川博子

要旨：なにわ大阪研究センターには「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」があり、その中には近代の「芝居番付」178枚が含まれる。近代大阪の辻番付については、先行研究が不十分であったので、歌舞伎資料としての位置づけをし、当センター所蔵の辻番付の意義を見いだすものである。

キーワード：近代大阪、歌舞伎、芝居番付、中村儀右衛門資料、長谷川貞信、中村宗十郎

はじめに

なにわ大阪研究センターの前身である大阪都市遺産研究センターでは、平成24年（2012）に「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」を入手したことを契機に、大阪を中心とした近代歌舞伎の番付収集を進め、現在178枚を所蔵している。この芝居番付については、センターのHPの「沿革」→「大阪都市遺産研究センター」→「可視化プロジェクト」→「大阪都市遺産データベース」→「芝居番付データベース」で画像閲覧が可能である。ただし、この「芝居番付データベース」の検索項目には、番付として最も重要な情報である「演目」がない。そこで、2023年度に公開を開始した当センターが所蔵する資料・図書のデータベースには、資料名の項目に劇場と演目を合わせて入力している。なお、所蔵資料全体のデータベースは、段階的に成長させ、最終的には画像も付す予定であるが、現時点では、全体のデータベースにあわせ「可視化プロジェクト」の「芝居番付データベース」の画像をご覧いただきたい。

今回、データベースに項目を入力するに当たって、所蔵する芝居番付を再度確認した。近代大阪の歌舞伎番付については先行研究がほとんどないので、本稿では、歌舞伎番付の歴史をたどり、その中における当センター所蔵番付の意義を述べておきたい。

1. 上方の歌舞伎番付

まずは近世から近代にかけての上方（京都・大阪）の歌舞伎番付について説明しておこう。番付の種類には顔見世番付、辻番付、役割番付、絵尽し・絵本番付などがある。歌舞伎は、11月から翌年10月までの1年間、役者が契約した劇場に出演していた。江戸時代後期になると、この制度が維持できなくなり、興行ごとの契約へと変わっていく。とはいえ、11月はこれから1年の役者の顔ぶれを紹介する「顔見世興行」として独自の行事などもあり、賑々しく催されることが多かった。顔見世が終わると、いよいよ本格的な興行が始まるのである。

まず、歌舞伎の演目が決まると、それを周知するために大型の、現在のポスターに相当する「辻番付」が町の辻々に掲出された。そして配役が決まると、芝居茶屋から鼯眞筋に、そして劇場前を歩く人たちに「役割番付」が配られたのである。役割番付は基本的には文字のみの情報ではあるが、現在のチラシに相当し、元々は芝居茶屋が作成していた。芝居茶屋が作成した理由は、役割番付が主として芝居茶屋を通して配られるものであったからである。そして、劇場内では、草紙屋から出された絵入の筋書で、現在のパンフレットに相当する「絵尽し」が販売されていた。「絵尽し」は上方での名称で、絵と短文で芝居の筋を追っていく冊子であるが、これに相当するものを江戸では「絵本番付」と呼んでいる。上方の絵尽しが筋を追う出版物であるのに対し、絵本番付は名場面集的な性格が強い。なお、これら番付類はすべて木版で印刷されており、木版摺は同一の情報を大量に広めるために有効な手段だったのである。

なお、「絵尽し」と「絵本番付」の違いは、上方と江戸の嗜好の違いに起因している。江戸は17世紀末から浮世絵の一分野である「役者絵」が発達した。鼯眞の役者が描かれた浮世絵を手元に置いて愛でたいという要求に応えた商品で、芝居の一場面を写し取る形式が最も多い。一方、上方で役者絵が継続的に版行されるようになるのは、江戸より約1世紀遅く18世紀末からである。上方では役者の姿より芝居の筋に興味があったようで、幕内資料である歌舞伎の台帳（台本）が貸本屋により写本として流布していった。そして、江戸より遅れて始まった役者絵の流行を挿絵として取り入れ、写本であった台帳を「絵入根本」として19世紀初頭から版行するのは、大坂の版元、河内屋太助である。江戸でも絵入根本に倣った出版物が出るのだが、大坂の絵入根本のように毎年正月2日に出版される定期刊行物にはなり得なかった。なお、絵入根本については、拙稿「大坂出版史における絵入根本」（2024年1月刊『近世文芸』第119号所収）に詳述している。

2. 大阪の辻番付

さて、上方における番付類を概観したところで、当センター所蔵の番付について述べていきたい。種別としてはほとんどが「辻番付」（追加で出される「追番付」を含む）で、京都が1点、東京が1点あるが、残り176枚はすべて大阪上演のものである。年代的には明治21年（1888）10月、浪花座上演「菅原伝授手習鑑・与話情浮名横櫛」（図1）から大正7年（1918）10月、京都南座の口上番付までであるが、大正期のもは2年と7年の2枚のみなので、ほぼ明治期の辻番付である。

なお、明治期には大阪の辻番付の形式が大きく変容を遂げるのだが、そのことについては先行研究をみないので、本稿では周辺資料を精査した上で論述していきたい。まず、三世長谷川貞信著「祖父貞信と父貞信」（昭和17年6月『郷土研究 上方』138号）には、父の二代貞信について語った次のような記述がある。

明治十八年名優中村宗十郎と意気投合の上、大阪芝居画番附の改良を行ひ今日に及んで居る。是も初代以来の芝居好きが斯くしたのであらう。

ここにある「大阪芝居画番附の改良」を理解するためには、それまでの辻番付の形式を押さえておく必要があるだろう。辻番付は町中に貼られ消耗されるものだったので、他の番付類よりも現存率が低い。それでも、今日、インターネットにおける早稲田大学演劇博物館（以後「演博」）デジタル・アーカイブ・コレクション「近世芝居番付データベース」や立命館大学アート・リサーチセン

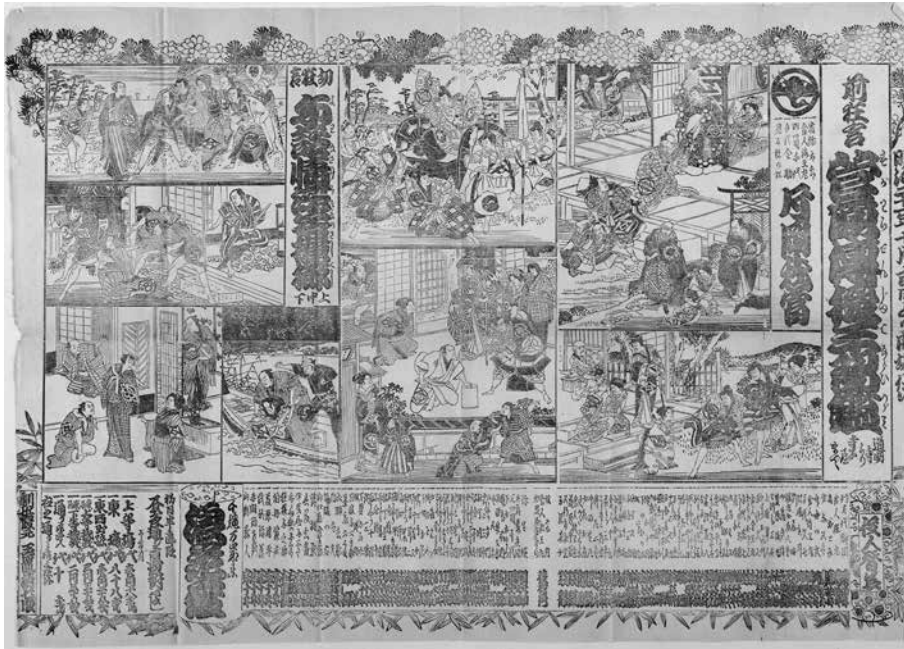


図1

ター（以後「ARC」）「番付ポータルデータベース」、日本大学「歌舞伎番付デジタルアーカイブ」などによって、国内外の番付類の画像を網羅的に閲覧することが可能になった。特にARCは自身の所蔵だけでなく、大阪府立中之島図書館や大阪公立大学図書館、松竹大谷図書館、国立音楽大学、そして、大英博物館をはじめとする海外の機関など、数多くの機関を調査対象とされているので、利用者としては大変ありがたい。これらのデータベースを見ていくと、上方の辻番付については演博の所蔵数が突出していることがわかる。

現時点で現存が確認できた歌舞伎の辻番付の最初は、明和元年（1764）閏12月、大坂角の芝居「天竺徳兵衛聞書往来」（演博蔵）である。以後、画像を確認し得る辻番付を年代順に見ていったが、大坂と京都ともにはほぼ同型式であった。小奉書縦型（およそ縦47×横33cm）で、右端上部に日付（具体的な日付もあるが、「近日より」が一番多い）と劇場、画面上半分に芝居の一場面、下半分に座本、外題と語り（役割番付にも記載される説明的、修辭的文章）を掲載しているのが基本である。

主として配布を目的としている役割番付や販売用の絵尽しは版元を明記しているが、辻番付には「鼯頁より」などがあるのみで、版元名を記載しないものが多い。これは、辻番付が劇場側の宣伝用の出版物で、版元の利権が薄かったことが理由なのかもしれない。役割番付も実際の彫りや摺りは職人たちが携わったはずであるが、版面に記されるのは芝居茶屋名であった。このように、原則版元を記さない大坂の辻番付ではあるが、安永7年（1778）2月、角の芝居「棹歌木津川八景」には「版元いづ平」（演博蔵）、同8年4月、中の芝居「俠飛脚花街往来」（演博蔵）には「版元泉平」と明記されている。このうち「棹歌木津川八景」の辻番付については、画面左に「右のゑづきりぬきくみたてのとうろうのはんこ あとよりいそぎ出し申候 御もとめ下さるべく候 以上 版元いづ平」とある。版元の商品、しかも芝居の立版古（「組上灯笼」とも言われるおもちゃ絵）の広告が載る珍しい番付であるが、この形式のものは後には続かなかったようである。その後、天明期には、「正本屋清兵衛」や「間月堂（寛政期に絵尽の版行あり）」、「山本」の版元名が記載された辻番付が若干見受けられる。

そして、文化13年（1816）9月、中の芝居上演「濃紅葉小倉色紙」（演博蔵）の辻番付に「版元

本清」とあるのは、本屋清七のことで、この頃、絵尽しを版行していた草紙屋である。以後、原則版元名を記さない辻番付にあって、「本清」の名を掲載したものが散見されていく。なお、本屋清七は寛政5年（1793）頃から歌舞伎絵尽しの版行を始めている。上方の絵尽しと版元については、拙稿「出版物としての上方絵尽し」（2024年、花鳥社刊予定、青山学院大学文学部日本文学科編『絵からみる歌舞伎の文化（仮題）』所収）に詳述しているが、本清は文政期末から道頓堀の劇場の絵尽し出版を一手に引き受け、天保の改革以後は役割番付も手がけるようになっていく版元である。そして、番付類だけではなく、文化13年からは役者絵の版行も手掛けていく。つまり、本屋清七は歌舞伎関連の出版物全般の版行を手掛ける版元へと成長していったのであった。

さて、明治初年の辻番付は現存数が少ないのだが、明治9年3月、大阪松島芝居「けいせい時代鏡」（中之島図書館蔵）の縦長の辻番付は、従来通り上部に一場面、下部に外題などを記す形式のもので、玉置（本屋）清七から出されている。その後、同10年11月、戎座「周防灘難船の場」（松竹大谷、国立音大蔵など）は横長で、場面を描いた絵だけでなく役人替名（配役）が掲載される、これまでとは異なる形式のものである。なお、明治初期の上方の辻番付の現存数は極端に少ない。おそらく、上記のように単発的に出されるものを除いて、辻番付そのものが作成されなかった時期があったのではないだろうか。

3. 中村宗十郎と番付

そして、いよいよ三代貞信が述べた「大阪芝居画番附の改良」の時期を迎える。「上方」の記事に従い、中村宗十郎の動向に照らし合わせて、このことについて考えたい。宗十郎の評伝・動向については、伊原俊郎著『明治演劇史』（1933年、早稲田大学出版部刊）の「第卅一章 延若と宗十郎」が最も詳しい。本稿では詳細な評伝が記載されている『明治演劇史』を基本とし、上演資料を確認しながら宗十郎の動向を見ておくことにする。本書には「延若（筆者注：初代実川延若）を京阪の菊五郎（同：五代目尾上菊五郎）とすると、宗十郎は京阪の団十郎（同：九代目市川団十郎）であった」という記載がある。五代目菊五郎と九代目団十郎は歌舞伎史に名を残す名優であるので、伊原俊郎がいかに宗十郎を高く評価していたかをうかがい知ることができる。

宗十郎は尾張熱田の出身で、旅役者から大阪で活躍する役者となった人物である。大阪の芝居師、赤穂屋太三郎が名古屋から大阪へ連れ帰り、二代目中村翫雀の弟子として、中村歌女蔵を名乗らせた。その後、初代中村雀右衛門の媒妁で四代目三枘大五郎の娘みちの婿養子となり、三代目三枘源之助を襲名したのである。この縁組は三枘大五郎家存続を見据えたものであった。というのも、三枘大五郎家は上方の名家であったが、安政6年（1859）に四代目が、翌年にはその養子の二代目三枘源之助が亡くなっていたからである。しかし、三代目源之助は元治2年（1865）頃には離縁となってしまい、名を「中村宗十郎」と改める。この名跡はそれまでも二代あったが、源之助はこの名を三代目として襲名した訳ではない。芝居師であった赤穂屋太三郎には四代目中村歌右衛門の弟子となった中村翫八という息子がいたが早世しており、また、沢村家では源之助から宗十郎となるのが通例であったため「中村宗十郎」にしたと言う。従って、本稿ではこの宗十郎を三代目とせず、代数なしに記載する。ちなみに、三枘大五郎の名跡は、その後四代目の門弟であった初代三枘梅舎が五代目として継ぎ活躍したが、明治6年に没した後に絶えてしまった。

宗十郎は気性の荒い人物として知られ、特に延若に対する競争心は強く、他の役者の間でもたびたびもめ事を起こしたが、明治6年に初めて東京へ上っている。それ以前から、宗十郎を東京へ呼

ぼうとする動きがあったのだが、座頭の役者が気に入らないなどの理由で、実現が延び延びになっていたのであった。東京の舞台に2年立った後に大阪へ戻るが、明治9年春には、新たな悶着を起こして役者を廃業、本名の藤井重兵衛の名で、道頓堀の太左衛門橋北詰に呉服店を出している。しかし、その直後の4月に竹田芝居から出火して、道頓堀は壊滅状態に陥った。宗十郎は道頓堀復活のため無給で10日間に限って舞台に復帰したが、それ以上舞台に立つことを断り、また無給と言いながらかなりの報酬を受け取ったなどと悪しき噂を立てられ、呉服屋の経営も振るわなくなってしまった。結局は翌年には東京の舞台で歌舞伎界に復帰することになったのである。

何かと世間を騒がす宗十郎であったが、5年間の東京滞在中に団菊に匹敵する役者と認められるまでになった。しかし、明治15年正月に突如大阪へ帰ってしまう。その理由は、団十郎の新家開きの祝宴に、自分が招待されなかったからだとも言われている。

ここまで2度の東京行きを経験した宗十郎であったが、このことが番付の改良に深く関わっていたと思われるのである。この時期の東京の辻番付は横形で、画面右端に上演日時が記され、主要部分には外題と場面が複数描かれ、下部に役人替名、その左に劇場、左端（右端や劇場名近辺の場合もあり）に入場料が記される形式である。これはそれまでの上方にはない形式でもあり、この効用を目にしていた宗十郎は、上方ではほぼ廃れてしまっていた辻番付の復活を、二代貞信に持ちかけたのではないだろうか。「上方」の記述にある「明治十八年」の正月、宗十郎は京都四条南側芝居に、3月には大阪戎座「葎曾我名誉鋪革・東都土産錦画姿」に出勤した。この戎座の辻番付が東京とほぼ同じ形式で、以後の上方で継承されていくのである。上辺に植物をあしらっているのも、この頃の東京の辻番付によく見受けられる形式で、宗十郎と二代貞信が東京の辻番付を意識していたことを裏付けるものと言えよう。画面を割って多数の見せ場を描いたこの形式の試みこそが、「上方」にある「大阪芝居画番附の改良」だったわけである。

なお、同年戎座上演の辻番付は現在、3月の「葎曾我名誉鋪革・東都土産錦画姿」、5月の「花雪歌清水・何桜彼桜銭世中」、6月の「名高田越後秘録・岸姫松轡鑑・恋飛脚大和往来」の3種が確認できる。3月、6月は大奉書（およそ縦39×横53cm）の大きさ（ともに演博所蔵）であり、3月、5月は大奉書の半分である大判の大きさ（ともに松竹大谷蔵）である。大奉書と大判の両方現存している3月の辻番付を比較すると、これらは別々に作成されたわけではなく、大判は大奉書用の板を切って、絵の部分若干削り、場面と役人替名を組み直したものであることがわかる。つまり、辻番付の板を再利用して、役割番付に転用したものである。明治19年の戎座にも見受けられたこの形式は、以後現存を確認できない。思いの外、再利用の手間がかかったため継続を断念した、というところであろう。

そして、当センターに所蔵される番付を年代順に見ていくと、明治18年に試みられたこの形式が大阪で定着していった様子が看取できるのである。

4. 辻番付の絵師

先述した「上方」の記事によれば、「大阪芝居画番附の改良」を行ったのは二代貞信の業績だといえる。とはいえ、画面に絵師名が確認できる最初は、明治23年6月、中劇場上演「簾間漏松操月影・恋飛脚大和往来」の辻番付（図2）である。画面左「切狂言 恋飛脚大和往来」の場面に「小信筆」（拡大図）とある。

長谷川貞信の代々は初代（1809～1879）から現在の五代（1946～）まで、血脈で繋がる上方浮世

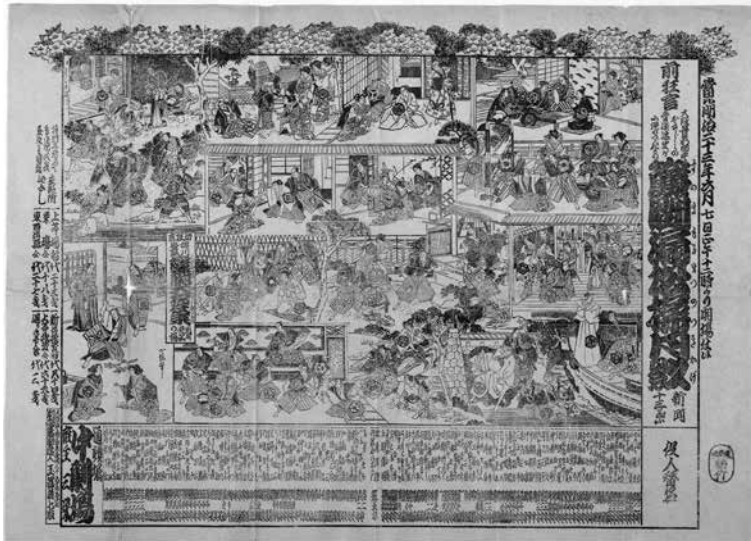


図2



図2拡大

絵師の系譜である。二代貞信は初代の長男で、父から絵を学び、初め初代長谷川小信を名乗って役者絵や開化絵を手掛け、明治8年に二代を襲名した。また、初代貞信には二代小信を名乗った次男がいたが、明治19年に若くして亡くなっている。そして、明治14年生まれである二代貞信の長男(1881~1863)が三代小信を名乗るのは明治27年、28年頃からと言われている。

辻番付に「小信」の落款が初めて見える明治23年、二代小信は没しているし、三代小信では幼すぎる。すでに後の三代小信が誕生しているのだから、弟子の誰かにこの名を名乗らせているとも考えにくく、明治23年の辻番付に見える「小信」は二代貞信と考えざるを得ない。なぜこのような名乗りを行ったのか、記録類も見いだせないため、明確な理由を述べることはできない。しかし、宣伝媒体に過ぎない辻番付には前名「小信」で、ということがあったのかもしれない。

なお、画面に「貞信」の落款が見えるのは、例えば明治29年1月、浪花座「伊達模様好織分・大杯觴酒戦強者・吉例曾我眩対面・勢獅子巖戯」(図3)、画面中央の「大杯觴酒戦強者」上部の場面

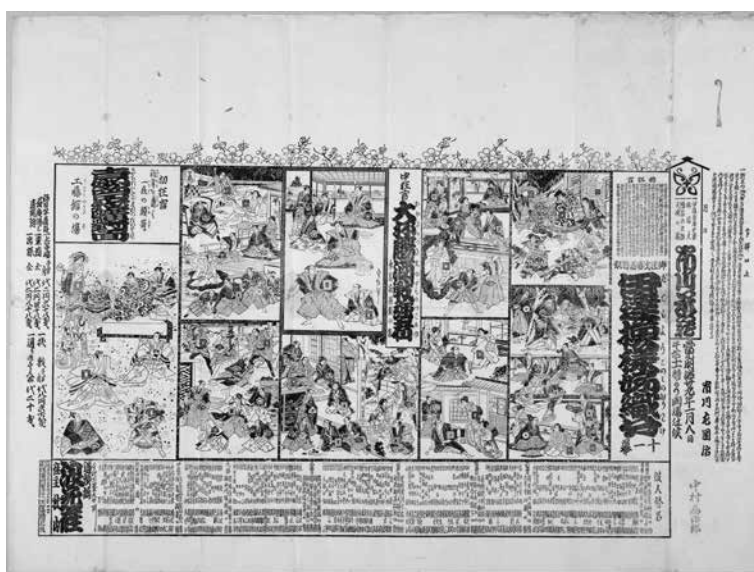


図3



図3拡大

(拡大図) などである。三代貞信は明治27年、28年頃に「三代小信」として画業を開始するので、この頃以降の「小信」は三代小信（後の三代貞信）で、二代貞信自身が手がける場合は「貞信」と署名しているであろう。

さらに、「小信」と「米子」の落款がある番付もセンターには3点所蔵されており、そのうちの1点が、明治24年11月、角劇場上演の「春日局・義経千本桜」(図4)である。外題「切狂言 義経千本桜 三の切／四の口切」左には三の切「鮎屋」を描いた画面があり、そこには「小信筆」(拡大図)とある。そのさらに左には四の口「道行初音の旅」を描いた画面があり、「米子筆」の落款がある(拡大図)。様式化された描き方なので、絵師による個性を見出すことはできないが、この「米子」なる人物については、現在のところ未詳である。名前から女性絵師と思われるが、他に手がけた作品があるのかどうかもよくわからない。

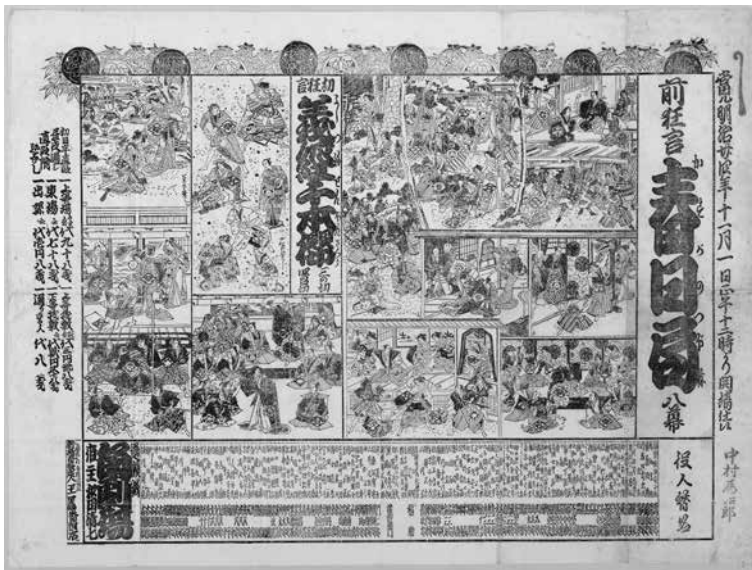


図4



図4 拡大

宗十郎と二代貞信によって確立された形式の辻番付は、早速京都にも取り入れられている。明治18年12月、坂井座の「加賀見山田錦絵・岸姫松轡鑑・接木根岸礎・雪花京都曙」の辻番付（松竹大谷蔵）には、「玉加津筆」とある。未詳絵師でもあり、貞信・小信・米子に比して非常に稚拙な筆である。とはいえ、この形式が京都にも浸透しているのは、注目すべきことであろう。

ところで、関西大学図書館には「長谷川貞信（初代・二代・三代）版画コレクション」が所蔵されている。文字通り初代から三代貞信の浮世絵作品を数多く含むコレクションであり、極一部ではあるが、図書館のホームページ「関西大学図書館電子展示室」の「長谷川貞信」で閲覧することが可能である。世界最大の長谷川貞信コレクションでありながら、あまり知られていないのは残念なことでもある。さらに、図書館にはこのコレクション以外にも貞信の代々の作品が所蔵されている。センター所蔵の辻番付や図書館所蔵の貞信作品を網羅的に考察することで、今後、幕末から近代にかけての大阪文化のあり方を示すことができるのではないかと考えている。

5. 辻番付の版元

宗十郎と二代貞信によって、改良・復活された辻番付は、この頃、役割番付や絵尽しの版元であった玉置（本屋）清七によって作成されている。先述した明治24年11月、角劇場上演の「春日局・義経千本桜」（図4）には「劇場番附製造人 玉置清七板」とあり、この時期、玉置清七が芝居番付を主要な仕事としていたことが理解できる。明治30年頃の番付には「玉置出版合資会社」と名が載るが、その後、番付の版行からは撤退したようである。時代に即した会社に成長した結果か、倒産・廃業の憂き目に遭ったのか、現時点では確認できない。

また、明治27年頃には版元に「加藤虎吉」の名が見えるようになる。最初は玉置清七との相版元であったが、玉置清七が番付版行から撤退した後は、加藤虎吉単独で明治36年頃までその名を見ることができる。

さらに、玉置清七が番付版行から撤退した明治31年頃から版元「井上仲蔵」の活動が始まり、センターが所蔵する明治期末までの辻番付にその名が出続けている。玉置板より大型の判型の紙（およそ縦51×横70cm）となっているので、版元の動向と共に、近代の印刷技術の変遷も考えていかねばならないだろう。本稿では触れないが、当初木版で復活した明治の辻番付は、木版と活版との組み合わせになるなど、時代とともに印刷技術が変わっている。明治期の印刷技術については、まだまだ不明なところも多いが、本稿で触れた辻番付にも技術変遷が見受けられるのである。今後、辻番付が明治期の印刷技術面での資料となり得ることは間違いないであろう。

以上、センター所蔵の芝居番付を、歌舞伎の番付史の中に位置づけ、その意義を見出した。国内外の機関で所蔵資料の画像公開が進んでいる今日、センターの資料が歌舞伎資料や印刷技術の研究に貢献できる日が来ることを切に願っている。なお、本稿は2023年度に公開した所蔵資料データベースについての解説であると共に、当センターの基幹研究班「なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化」のうち「道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究」の成果でもある。

（きたがわ ひろこ 関西大学非常勤講師）

2022年度なにわ大阪研究センター基幹研究班

なにわ大阪研究センターにおける 基幹研究班の役割と意義について

— 2022年度の報告と今後の展望 —

研究代表者	乾	善	彦			
研究分担者	林	武	文	藪	田	貫
	井	浦	崇	橋	寺	知
	丸	山	徹	北	川	博
						子

要 旨：2年目を迎えた基幹研究班の研究成果を報告したうえで、2022年度の研究についてのあり方を反省し、研究成果の「見える化」を中心とした今後の基幹研究班のあり方について、研究課題の選択、研究班の組織方法などの問題点を再検討すべきことを指摘し、今後の展望を示した。

キーワード：基幹研究班、見える化、研究組織、研究課題

1. 研究概要

2021年から改正されたなにわ大阪研究センター規程によって、同センター長を研究代表者とする、基幹研究班が設置されることとなり、これにそって、2022年度は基幹研究のテーマのうち、

- ①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信
- ②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究
- ④豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承

の三つのテーマに取り組むこととなった。

その成果としては、『なにわ大阪研究』第5号の研究概要報告に記したところであり、繰り返すことは省略する。成果物としては、論文、研究ノート、紹介として同誌に掲載の

藪田貫「堺の刃物鍛冶と鉄砲鍛冶」

林武文「3次元CGによる火縄銃製造工程の可視化に関する基礎検討」

丸山徹「現代科学からみた鉄砲用鉄の魅力」

北川博子「口絵 浪華道頓堀 二替芝居積物一覧」

があり、そのほか、コンテンツの作成・バージョンアップがあり、また、橋寺知子の同誌表紙絵の解説と堺市との共同で開催したシンポジウムがある。しかしながら、そういった成果が、「可視化」あるいは「外部発信」という点では一貫するものの、複数のテーマを設定する結果、そこに統一性をみいだせない、方向性が定まっていなかったといった批判も、実際に耳にすることがあった。前稿でも述べたが、コンテンツの作成や研究成果の紹介が「研究」かという問いかけも、同じような批判として聞こえてもいる。

そこで、2022年度の成果報告を兼ねて、基幹研究班のあり方とその意義、そして、2024年度から出発する、博物館の附置センターとしての研究活動のあり方について、考えておきたい。センターとしての今後の展望・戦略でもある。

2. 基幹研究班の理念

そもそも基幹研究班は、一つのテーマにそって共同研究をおこなう公募研究班とは異なり、センターの目的にそって複数のテーマを設定し、各人がそれぞれに関わりながら複数のテーマの研究を遂行するという、一種特異な形式をとっている。それは、センターが設立した経緯をふまえ、センターの前身の、なにわ・大阪文化遺産学研究センター、社会的信頼システム創生センター、大阪都市遺産研究センターの研究成果の継承・整理・発信に重点を置いたからである。昨年度の成果報告において「見える化」(可視化)について論じたのも、その一環としてであった(「道頓堀・堺鉄砲鍛冶屋敷研究の可視化」なにわ大阪研究第5号、2023.3)。

この背景には、2016年に設立された現在のセンターの取り組みが、発足当時から、外部からは「見えにくい」という指摘があり、これを改善するための方策を考えねばならないということがあった。従来の取り組みが、決して発信をともなわないわけではなく、また、「可視化」という観点からも、2011年以来、芝居町道頓堀のCG化に取り組んできており、2011年の東向きと西向きをはじめ、浜側(道頓堀川)から芝居小屋へ、道頓堀五座の風景 幻の洋風浪花座編などを作成公開しており、その発信力は、10年の歳月を経過した現在でも、年間3~5件、各方面で使用されている点からも顕著であると思われる。また、エッゲンベルク城博物館の豊臣期大坂図屏風については、現代の風景と対照させたデジタルコンテンツが作成されており、これも一定の需要がみとめられている。

ただし、これらの成果が見えにくい状況にあったことも事実であり、これは基幹研究班の研究課題というよりは、センター全体の改善課題でもあった。たとえば、研究成果の報告書として多数の著作物が出版されており、それぞれ貴重な研究的価値を有するが、一般の方々にはまったく見えにくいものであり、その総合目録も公開されていない。外部からはセンターのホームページの一々のところからひとつひとつ検索して探し当てるしかなかった。つまり、研究成果の整理と発信、さらに見えやすくするということが積年の課題でもあったわけである。

2005年に発足した「なにわ・大阪文化遺産学」以来、20年近くにわたる「なにわ大阪」研究は実に多様で、人文学のみならずさまざまな分野の研究との連携や融合によって、その蓄積は大きく、成果物も数多くある。上にのべたように、ひろい視聴者層を想定して「可視化」されたコンテンツもある。ただ当然のことながら、20年の歳月のうちに、それらの研究に資された基礎資料も多数にのぼり、資料の整理が追いつかないのが現状であった。そこで単なる研究成果の発信だけでなく、センター自体の機関としての充実が求められていた。そのひとつの方策が「見える化」であった。

センターの機関としての実態の見せ方が課題であったのである。そのために、「なにわ大阪」の各論研究とは別に「基幹研究班」がもうけられることになった。

そこで、基幹研究班の発足にあたり、選ばれたのが「可視化」をキーワードとする以下の4つの研究課題であった。

- ①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信
- ②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究
- ③古写真調査をはじめとする住吉大社関連研究
- ④豊臣期大坂区屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承

このほかに、センターの設定する「なにわ大阪」に関するテーマとして以下のものがある。

- ⑤大学昇格を果たした1922年以降、大大阪時代の各分野で活躍した本学所縁の人材の発掘と大学の足跡を探る研究
- ⑥世界遺産登録を果たした百舌鳥・古市古墳群に関する連携研究
- ⑦世界遺産登録を視野に入れた明日香村との共同研究（発掘50周年を迎える高松塚関連の研究をはじめ飛鳥の歴史的文化遺産に関連する研究）
- ⑧KU-ORCASを含む学内研究機関との連携による研究
- ⑨その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究

センター全体の研究方向としては、⑨に尽きるのだが、具体的な事例を提供することで、研究の深化をはかったものとなっている。中には、なにわ大阪の圏外ではないかと思われる節もあるが、これによって大学の立地する地域のエリアスタディー（地域研究）を担うことができるように仕組みられているのである。

さて、基幹研究班の当面の課題として、2021年度は①と②を、2022年度は①②④を課題として取り上げた。①については、道頓堀五座の東向きと西向きの風景に加えて、あらたに松竹座を含めた大正末から昭和初期の景観のCG化を計画した。これは松竹座との提携を模索する一環として考えられたものであるが、2025年の大阪万博を目標に制作するものであり、当面は資料の収集が中心となるが、この時期は大大阪時代の黎明期でもあり、⑤の課題へと発展させる含みもある。

②についても、井上家文書の紹介はすでに分厚い報告書があるが、これも2024年3月に開館することになった、「鉄砲鍛冶屋敷」における公開を目指してデジタルコンテンツを作成するというものであり、3か年、2023年度の完成を目指すものである。

④も大阪万博をみすえて、オーストリアのエッゲンベルク城博物館との連携によるものであり、以前に作成されていた、コンテンツの充実・バージョンアップによって、万博での展示を目指したものである。

以上のように、基幹研究班のテーマ設定は、外部発信を見すえた研究課題となっているが、それぞれには研究班のそれぞれの専門に応じた基礎研究が基盤にあることを重視するならば、やはり研究活動の一環としてあるのである。近年の研究においては、とくに外部への発信、一般社会への貢献も重視されるようになってきており、むしろ、「見える化」はセンターの目的にそって中心的な「研究」であると考えている。

基幹研究班の研究課題は、基本的に研究期間が1か年であるが、センターの設置趣旨にそって、長期的な展望の上に立ったものであることを書き添えておきたい。このスタンスは、博物館に移行

後もかわることはないと考えている。

3. 研究組織のあり方

基幹研究班の組織は、基本的にセンター長が代表をつとめることになっており、2021年度からセンター長の乾が代表となって、テーマにそった人選をおこない、分担者をお願いする形式をとっている。2022年度は、2021年度の乾、林、藪田に加えて、①に北川、橋寺、②に丸山、①②④に井浦の各先生方に分担をお願いした（後述）。

公募研究班と基幹研究班との大きな違いは、公募研究班はひとつのテーマに対して、その方面の研究に即した専門家による組織が必要とされるのに対して、基幹研究班はかならずしもそうではなく、広い分野、ジャンルのまたがった分野の研究組織を単年度のために組織しなければならないという点にある。本来これはあまり適切であるとはいえないあり方である。

たとえば、②の研究について、近世史の藪田は井上家の調査がはじまった当初から、井上家文書の読解・整理にたずさわっており、一応もっとも専門に近いが、それでも鉄砲の鑄造については専門からは遠い。コンテンツの作成については林が専門であるが、やはり鉄砲の鑄造過程については専門家の力を借りざるをえない。また、丸山は金属の専門であるが、やはり近世の鍛冶の実態となるとわからない部分が多い。つまり、本来ならば、だれか専門の研究者がいて、それを中心にそれぞれの分野で専門がいかせる人材を組織するべきであるのだが、いわば素人の組織とならざるをえなかった。それでも、堺市の協力によって鉄砲の専門家の助言を得ながらCGの完成にこぎつけることができた。これについては、「なにわ大阪研究」の第5号、第6号の林の論考に詳しいのでここでは贅言はひかえる。なにとはともあれ、今後、基幹研究班がその職能・機能をスムーズに担うためには、研究組織の組織の方法を工夫する必要がある。センター長を代表とする必要は必ずしもなく、むしろ、単年度に集中させるテーマの策定にかかわればいいのであって、年度ごとにテーマの策定を行う組織を作ることも考えられよう。そこでテーマをしぼって、それぞれのテーマにそった研究者の集団を組織するようにすれば、寄せ集めの感はまぬかれよう。

4. 研究組織としての基幹研究班

2023年度まで、センターは社会連携部の下部組織であり、その点で、②のテーマにおける堺市との連携や①④のテーマにおける社会発信など、その役割は十分に果たしてきたと思われる。所属が博物館にうつっても、図書館や博物館が担う社会貢献は大きくかわるところがないと思われる。一方で、図書館にしても博物館にしてもある種、研究組織であることにはかわりない。

前年度報告においても述べたことだが、どのような研究においても、近年、「発信」ということが重要視されてきている。従来ならば、人文学分野では研究論文や書籍の作成が、ほぼ唯一の発信手段であったが、社会への還元という点で問題が指摘されていた。近年はそうでもなくなったが、研究者だけがわかるものが価値が高く、一般への啓蒙書は、一段低くみられていた現実があった。ここでいう「発信」とはそのような研究者向きのものではなく、社会一般に向けて、どれだけ啓蒙的に成果を還元できるかということである。その点で今回作成した、火縄銃の製造過程のCGはきわめて魅力的であり、2023年中での完成度は高いものである。先に述べたように、火縄銃の製造に関する専門家がない組織でのこのことはそれなりに評価されるべきであろう。同時に作成した火縄

銃をうつVRも一般に広く歓迎されるアイテムとなっている。今後とも、このような方向で社会還元がめざされるとするならば、人文系・歴史系の時代考証のできる研究者とアイテム作成の情報系の研究者、それに工学的な専門をもつ研究者とが、常時、基幹研究班で組織できる体制を整える必要がある。そのような人材を組織できるネットワークが必要になる。

2022年度の基幹研究班として、昨年度からの代表乾と分担者林、藪田に加えて、次の方々の参画を得た。

井浦崇総合情報学部教授（テーマ①、②、④）

丸山徹化学生命工学部教授（テーマ②）

橋寺知子環境都市工学部准教授（テーマ①）

北川博子本学非常勤講師（テーマ①）

（ ）に示したように、それぞれのテーマにそって専門をいかして分担していただくことになった。これによって、各テーマについては充実した研究となったと思われる。

①については、道頓堀CGの通行人入りバージョンを完成させ、英語版については、台本作りに着手している。また、明治末から大正初期の景観のCG作成についても、調査と会議を重ね、一定の方針を打ち出した。②についても火縄銃製造過程のCGに改良を重ね、そのための調査を数度にわたって実施し、また専門家の意見も取り入れてバージョンアップを重ねている。③については、以前のCGを復旧して動ける環境にもどし、改良点の整理を行った。

しかし一方で、それぞれの独立性も高まった感はいなめない。むしろ、このように各テーマが独立した研究組織を模索することも今後の課題となろう。それは、基幹研究班のあり方を考え直す必要性が生じたということでもあろう。

また、堺市との連携事業として堺鉄砲鍛冶屋敷シンポジウム「よみがえる鉄砲鍛冶屋敷 鍛冶技術の変遷を辿る」を2022年10月23日（日）に千里山キャンパスの関大ソシオ AV 大ホールにおいて開催した。プログラムは以下の通り。

第一部 基調講演 藪田貫「堺の刃物鍛冶と鉄砲鍛冶」

第二部 講演 丸山徹「現代科学からみた鉄砲用鉄の魅力」

講演 林武文「CGで描く火縄銃」

パネルディスカッション「鍛冶技術の中の火縄銃」

パネリスト 藪田・丸山・林・井上俊二（井上家当主弟）

これについては、センターの事業であるが、基幹研究班のテーマでもありここにも基幹研究班の存在の事由がある。センターにおける研究と基幹研究班の研究とを切り分けるべきか、一体として考える方がいいのか、ここにも今後の課題が残されている。

昨年度末の概要報告に、次のような一節を書いた。

基幹研究班は、一年ごとに更新するように定められている。しかし、研究テーマはセンターの設立趣旨にそって、継続性を必要とするものである。ここにはいささかの矛盾と莫大な可能性が秘められている。

「可能性」について追及するためには、さらなる組織の充実が必要であろう。新たな人材の発掘や育成も必要である。

5. 今後に向けて

研究と発信はセンターの二大テーマである。そして基幹研究班はそれを推進する中心組織である。今後センターの事業を推進し展開していくためには、基幹研究班のさらなる充実と、つねにこれを見なおす観点が必要となろう。たとえば、一年単位の研究計画は、身動きの軽さがあって臨機に対応できる柔軟性がある。一方で、一年区切りの難しさも3年目を迎えて露見してきている。一度、立ち止まって見直す時期に来ているかと思量する。2024年度から組織改編によって社会連携部から博物館へと上部組織が変更されて、研究的な側面も社会発信的な側面も充実することが期待されている。基幹研究班もこれを機に、あるべき姿をもう一度考え直してさらなる発展を期したいものである。

謝辞

本研究は、2022年度関西大学なにわ大阪研究センター基幹研究班において、研究課題「なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

(いぬい よしひこ 関西大学文学部教授 なにわ大阪研究センターセンター長)
(はやし たけふみ 関西大学総合情報学部教授 なにわ大阪研究センター副センター長)
(やぶた ゆたか 関西大学名誉教授)
(いうら たかし 関西大学総合情報学部教授)
(はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授)
(まるやま とおる 関西大学化学生命工学部教授)
(きたがわ ひろこ 関西大学非常勤講師)

2021～2022年度なにわ大阪研究センター公募研究班

甘檜丘遺跡群の基礎的研究

— 発掘調査の成果を中心に —

研究代表者 井 上 主 税

研究分担者 西 本 昌 弘 長谷川 透

要 旨：甘檜丘遺跡群の発掘調査を通じて実施した研究の成果として、蘇我氏の邸宅と関連する遺構（飛鳥時代前半期）は確認できなかったが、乙巳の変後、飛鳥時代後半を中心とする大規模な造成跡と土地利用の状況を確認したことが挙げられる。

キーワード：甘檜丘遺跡群、土地利用、建物跡、飛鳥時代後半

1. 研究概要

2021～2022年度なにわ大阪研究センター公募研究班として、標記の研究課題に取り組むこととなった。

飛鳥（現在の奈良県高市郡明日香村）に所在する高松塚古墳は、本学名誉教授の網干善教氏により1972年に発掘調査が行われ、極彩色の壁画が発見されてから2022年で50年を迎えた。飛鳥は古代の都が置かれた地であり、飛鳥時代は律令国家形成期としてさまざまな諸制度が発足した。この時代の実像は、宮殿跡や飛鳥寺や川原寺跡などの古代寺院、中尾山古墳や高松塚古墳といった終末期古墳の発掘調査を通じて明らかになってきた。文献史学では、『日本書紀』や『古事記』などの史料や遺跡から出土した木簡を対象に研究が進められてきた。

このように、飛鳥には多くの歴史的遺産が所在することは周知の事実であるが、飛鳥川の西岸に位置する甘檜丘^{あまかしのおか}もまた歴史的遺産の一つであり、『日本書紀』皇極天皇3年条には蘇我蝦夷・入鹿の家（邸宅）が甘檜丘に並びたっていたと記されている。この丘の東麓では、これまで奈良文化財研究所によって9次にわたる発掘調査（甘檜丘東麓遺跡）が行われ¹⁾、7世紀中頃の焼土層や7世紀の掘立柱建物等の遺構が確認されており、これらの遺構が蘇我氏の邸宅の一部ではないかと推測された。

2020年度から明日香村教育委員会と本学考古学研究室の共同調査（甘檜丘遺跡群）が実施されており²⁾、2024年度までの5か年にわたる発掘調査では、建物などの関連施設の検出や整地の範囲の解明などが期待されている。飛鳥時代の邸宅の様子を知りうる資料は少なく、この遺跡の解明はそ

の手がかりとなり得るものである。また発掘調査を通じて、飛鳥時代に朝廷の実権者として権勢をふるった蘇我氏一族に関する資料が確保されれば、飛鳥時代の研究においては非常に大きな意義をもつ。

本研究では、この甘樫丘遺跡群を対象とし、発掘調査を通じて得られた資料のほか、『日本書紀』などの文献史料にみられる記録などをもとに、本遺跡の性格や歴史的な意義について考察することを目的とする。また、これらの資料をもとに、本学で考古学研究室を中心にこれまで進めてきた飛鳥研究をさらに発展させることが期待できる。そして、発掘技師や学芸員などの専門職への就職を希望する学部生や大学院生が今回の発掘調査に参加することで、現場経験を積むことができ、教育面における貢献も大きいと考える。

以上の研究課題に対して、ここでは2022年度下半期に実施した甘樫丘遺跡群の発掘調査の成果を述べ、そのうえで2021年度・2022年度に実施した発掘調査を通じた研究成果のまとめと今後の課題について述べる。

2. 2022年度甘樫丘遺跡群の発掘調査

2022年度は、2021年度調査³⁾の4区を拡張した本調査区と本調査区の北側に拡張区を設定した。本調査区は、東西15m、南北14m、拡張区は東西3.5m、南北8mに設定し、調査総面積は240㎡である。

本調査区と拡張区は、南向きの傾斜が緩い小さな谷に立地する。遺構の検出は、谷を埋め立てた造成土上面でおこなった。遺構検出の結果、本調査区では総柱建物、石列、柱穴、土坑、炉跡、焼成遺構、木棺墓、砂溝、素掘溝を、拡張区では砂溝と土坑を検出した(写真1)。

以下、検出した各遺構、出土遺物について報告する。

(1) 検出遺構

総柱建物 本調査区の西側中央付近で検出した総柱建物は、南北3間、東西2間以上の規模をもつ。柱掘形の規模は、一辺が約85～110cmで、大きいもので130cmを測る。掘形の深さは約60～95cmとばらつきがある。柱間は掘形芯々で南北約180cm、東西約210cm。柱は1基だけ木柱が

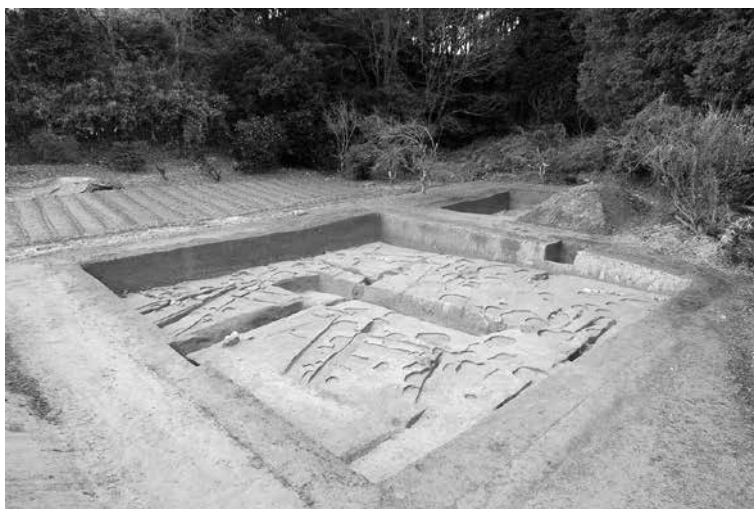


写真1 本調査区 全景(南東から)

遺存しており、木柱の径は10cm以上である。柱掘形には人頭大の石を根固めのために数個入れ、掘形底面には根石のために拳大から人頭大の石を敷き詰めていた。柱抜き取り穴から7世紀後半の須恵器が出土した。

石列 本調査区の北側と南側において東西方向に延びる石列2条を確認した。以下、北側の石列を北側石列、南側の石列を南側石列と表記する。北側石列は約25cm大の横長の石を北側に面を揃えて並べる。横長の1石を立てて東西方向に石の長辺を揃えて一列に並べるが、調査区中央付近で北に向かって長さ約1.1mにわたって折れ、そこから再び西側に折れて延長する。南側石列は、約25cm大の横長の石を南側に面を揃えて並べる。北側石列同様の並べ方だが、石の並びや面の揃え方は北側に比べやや雑な印象を受ける。南側石列の東端付近の2石分だけ、他の石材とは異なる天理砂岩が当て嵌められている。この石列は何らかの区画施設であったと考えられる。

炉跡 本調査区中央付近で確認した鍛冶炉である。約50cm大の粘土を土手状に巡らし、その内側に高温で赤変した焼土が厚さ約7cmにわたり不整形に広がる。この焼土は西側に向かって傾斜しながら受け口状に広がるが、そこに鉄滓が多く絡んでいた。鍛冶操業に伴う排滓口を西側に設けていたものとおもわれる。鞆羽口や炭は認められず、炉の上部構造は削られて残っていない。

焼成遺構 本調査区の南側東寄りで確認した焼成遺構である。この遺構は貼床粘土の東縁中央に位置する。貼床粘土は黄橙色の山土を厚さ2cmという一定の厚さで敷き均したもので、その範囲は約3.5m四方に広がる。焼成遺構は、この貼床粘土の上面に約40cm大の範囲に広がり、赤変した焼土の上には炭が被っていた。この中から何らかの操業を示す遺物は認められず、操業内容は不明である。貼床粘土の存在を考えれば、この焼成遺構は煮炊き用の竈であった可能性がある。また、貼床粘土の下から7世紀後半頃の土器が出土したことから、飛鳥時代後半以降の施設であったと考えられる。

土坑 本調査区南壁西寄りで確認した土坑である。平面形態は不整形を呈し、最大辺で76cmを測る。深さは約40cmで、土坑内から須恵器の平瓶と高杯が出土した(写真2)。平瓶は正位置に据え置かれるが、平瓶の上には開口する口縁に蓋をするよう平らな天理砂岩が置かれていた。平瓶内には粘土が溜まっていたが、遺物などの内容物は認められなかった。また平瓶の横では



写真2 本調査区 土坑内出土状況(東から)

杯部を下に向けた高杯が出土した。

木棺墓 調査区の北壁の東側付近において検出した木棺直葬墓である。墓壙は長さ235cm、幅85cm、残存する深さは30cmである。墓壙内から鉄釘が約38本原位置を保った状態で出土したことにより、木棺の大きさは長さ210cm、幅は北側で50cm、南側で40～45cmである。鉄釘は平均して長さ10cm、厚さ0.7cmと小型である。墓壙の南側底部では黒色土器椀が伏せられて状態で出土し、これによりこの木棺はおよそ10世紀頃に埋葬されたことがわかる。

砂溝 調査区の中央付近に南北方向に1条、それにとりつく東西方向の素掘溝である。溝の規模は幅約70cm、深さ約50cmで、断面形態は箱形である。溝埋土は硬く締まった荒砂で、土砂が大量に流れて埋没したとみられる。埋土から奈良～平安時代頃とみられる水差しの把手片が出土した。

(2) 出土遺物

調査区及び拡張区では、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、瓦、鉄釘、鉄滓、不明金属器が出土した。

(3) 調査成果のまとめ

今回の調査によって、甘樫丘に取りつく南向きの小支谷において、飛鳥時代から古代にかけての土地利用の変遷を確認することができた。検出した遺構の変遷は現段階で次のとおりである。谷の埋め立て（造成開始時期不明）→北側石列→総柱建物・南側石列→柱抜き取り（7世紀後半頃）→土坑→貼床・鍛冶操業→砂溝（奈良～平安時代）→木棺墓（平安時代）。なお、石列および総柱建物については、調査区外に広がることが確実であり、さらに遺構の前後関係を明らかにすることが今後の検討課題である。

3. 成果の公表

2021年度および2022年度の調査成果については、出土資料の整理・分析作業中であるが、概報、展示会や図録、講演会（成果報告会等）で発表している。

【概報】

長谷川透 2023「(2) 2021-3次 甘樫丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和3年度』明日香村教育委員会

長谷川透 2024「(1) 2022-1次 甘樫丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和4年度』明日香村教育委員会

【展示図録】

長谷川透 2022「甘樫丘遺跡群」『大和を掘る37』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

長谷川透 2023「甘樫丘遺跡群」『大和を掘る38』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

長谷川透 2023「甘樫丘遺跡群」『飛鳥の考古学 2022』飛鳥資料館

【講演会】

井上主税 2023「蘇我氏の栄華、蘇我四代の軌跡をたどる」『第182回 奈良学文化講座』於奈良県社会福祉総合センター

井上主税・西本昌弘・長谷川透 2023「甘樫丘遺跡群の基礎的研究——発掘調査の成果を中心に——」

『なにわ大阪研究センター研究成果報告会』 於関西大学

4. まとめと今後の課題

以上、2021年度および2022年度の甘櫓丘遺跡群の発掘調査を通じ実施した研究成果を報告した。期間全体の研究成果として、発掘調査では蘇我氏の邸宅と関連する遺構（飛鳥時代前半期）は確認できなかったが、蘇我本宗家が滅亡した乙巳の変後、飛鳥時代後半を中心とする大規模な造成跡と土地利用の状況を確認したことが挙げられる。2022年度の調査で検出した総柱建物は南北3間、東西2間以上の規模で、柱掘形は大きいもので130cmを測り、大型の倉庫である可能性が高い。甘櫓丘については、文献史料から飛鳥時代前半期の様子は一部知られているが、飛鳥時代後半期以降はよくわかっておらず、今回この時期に関する重要な知見を得たといえる。また、発掘調査では飛鳥時代前半の遺物も出土していることから、周辺には飛鳥時代前半頃までさかのぼる遺構が展開する可能性も考えられる。

2023年度以降は、なにわ大阪研究センター公募研究班（「甘櫓丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究——発掘調査の成果を中心に——」）として、引き続き発掘調査を実施して、甘櫓丘遺跡群に関連する研究を進める予定である。

謝辞

本研究は、2021～2022年度関西大学なにわ大阪研究センター公募研究班において、研究課題「甘櫓丘遺跡群の基礎的研究——発掘調査の成果を中心に——」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

註

- 1) 大林潤・若杉智宏・清野孝之・和田一之輔 2014「048 甘櫓丘東麓遺跡の調査 第177次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所など
- 2) 長谷川透 2022「2020-5次 甘櫓丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和2年度』明日香村教育委員会
- 3) 長谷川透 2022「甘櫓丘遺跡群」『大和を掘る37-2018～2021年度発掘調査速報展-』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
長谷川透 2023「(2) 2021-3次 甘櫓丘遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 令和3年度』明日香村教育委員会

(いのうえ ちから 関西大学文学部教授)

(にしもと まさひろ 関西大学文学部教授)

(はせがわ とおる 明日香村教育委員会文化財課係長)

2023年度なにわ大阪研究センター基幹研究班

なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化

研究代表者	乾	善	彦			
研究分担者	林	武	文	藪	田	貫
	井	浦	崇	橋	寺	知
	丸	山	徹	北	川	博
						子

研究概要

2021年から改正されたなにわ大阪研究センター規程によって、同センター長を研究代表者とする基幹研究班を設置し、そこに提示された基幹研究のテーマのうち、2023年度も、昨年に引き続き、

- ①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信
- ②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究
- ④豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承

の三つのテーマに取り組む予定であった。このうち④は2025年の大阪関西万博を見据えたものであったが、オーストリア側の見通しが立たないことから、一時、保留することになり、2023年度は研究を進めることはしなかった。また、2015年度に調査された「浪花名所図屏風」が本研究センターに寄贈されることになったのにもなって、次年度以降の調査研究のために予備調査を行った。

進捗状況

①については、道頓堀CGの通行人入りバージョンを完成させ、これを公開できる段階に至っている。英語版についても、英語テロップ入りのバージョンが完成し、通行人入りバージョンとあわせて、公開準備を進めている。松竹座を含めた大正末から昭和初期の景観のCG化については、昨年度から松竹100年史をはじめとする資料収集をおこなっているが、松竹座との連携の一環として、松竹座の図面を提供してもらい準備を進めている。また、CG作成については、具体的な案と、それに付随する問題点の整理をおこない、制作に取り掛かって2024年度の完成を目指すことになった。

研究成果としては、本誌研究ノートの北川博子「近代大阪における歌舞伎の辻番付」がある。

②については、昨年度に引き続いて、鉄砲鑄造過程のCGを、より精度の高いものとするべく、国友鉄砲ミュージアム（長浜市）、堺鉄砲研究会・澤田平氏の助言を得て調査研究を重ね、バージョン

アップした。その成果については、12月2日堺市鉄砲鍛冶屋敷講演会（堺市産業振興センター）と、12月27、28日に開催された電気学会知覚情報研究会にて口頭発表をおこない、成果物を展示した。また、本誌に、林武文「3次元CGによる火縄銃製作の可視化」の論文を掲載している。

堺市との連携事業としては、12月2日（土）に、鉄砲鍛冶屋敷講演会「いま、よみがえる 鉄砲鍛冶屋敷」を堺市産業振興センター イベントホールにおいて開催した。プログラムは以下の通り。

第一部 基調講演 藪田 貫「井上関右衛門と堺の鉄砲鍛冶」

第二部 報告（1）林 武文「CGによる火縄銃製作の可視化」

報告（2）岡本 茂（堺市文化財課）「鉄砲鍛冶屋敷の建造物について」

報告（3）相馬 勇介（堺市文化財課）「発掘調査の成果について」

なお、報告（3）において鉄砲鍛冶屋敷の発掘報告があったが、出土した鉄屑塊については、引き続き丸山徹が分析をおこなっている。

④については諸般の事情によって、継続の中断を余儀なくされたが、かわって、2015年に調査した「浪花名所図屏風」が所蔵者のご厚意で本センターに寄贈されたのをうけて、調査を開始した。次年度以降、本格的な研究組織を立ち上げて再調査を企図する必要がある。

総括

以上、本年度における基幹研究班の成果として、テーマ①「道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信」については、次年度以降への継続的な課題であるが、松竹座の開業した大正期の風景版への着実な歩みをおこなっていることの報告となる。なお、中村儀右衛門資料や山田伸吉資料については現在、基幹研究班の研究と並行してセンターの方でその整理を進めてきたが、2023年度中には一応の区切りをつけて一部公開予定である。そのさらなる整理・拡張も今後の課題となる。

また、テーマ②「鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究」については、2024年3月の鉄砲鍛冶屋敷ミュージアムの開館によって、一区切りとなるが、さらなる鍛冶屋敷のCGなど、あらたなコンテンツを開発する予定であり、井上家文書についてもあらたな展開を企画中であることを申し添えておく。

（いぬい よしひこ 関西大学文学部教授 なにわ大阪研究センターセンター長）

（はやし たけふみ 関西大学総合情報学部教授 なにわ大阪研究センター副センター長）

（やぶた ゆたか 関西大学名誉教授）

（いうら たかし 関西大学総合情報学部教授）

（はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授）

（まるやま とおる 関西大学化学生命工学部教授）

（きたがわ ひろこ 関西大学非常勤講師）

2022～2023年度なにわ大阪研究センター公募研究班

「大大阪」の時代と関西大学 —— 山岡家文書の調査・研究を中心に ——

研究代表者 官 田 光 史

研究分担者 米 田 文 孝 伊 藤 信 明

1 本研究の目的

本研究の目的は、山岡家文書（山岡順太郎・倭の旧蔵資料）の調査・研究によって、関西大学関係者の活動という視点から、「大大阪」時代の政治や社会のあり方に光を当てることである。

山岡順太郎（1866～1928年）は石川県生まれ。通信省を経て大阪商船に入社、やがて大阪財界で頭角を現した。大阪商業会議所会頭を務めたころから本学との関わりをもち、1922年には総理事として本学の大学昇格を成し遂げた。山岡倭（1890～1939年）は、順太郎の長男で、北陽商業学校（現・関西大学北陽高等学校）の設立者として知られる企業家である。

本学年史編纂室は2021年4月に山岡家から山岡家文書を借用し、仮目録の作成を進めている。山岡家文書は本学の関係書類、山岡が関わった会社の書類・営業報告書、政官財界関係者が山岡に宛てた書簡、倭が手元に残した観光パンフレットなど約2000点から成る。この概要に鑑みても、本文書が本学の歴史において貴重なものであると同時に、大阪・関西の地域史や日本近現代史においても重要なものとなることは間違いない。

本研究は、山岡家文書に関する初めての本格的な研究である。とくに山岡が本学の総理事や学長などとして本学の経営・教育に携わった1920年代の資料を重点的に調査・研究することで、山岡をはじめとする本学関係者が「大大阪」の形成と発展に貢献した姿を描き出したい。

2 本研究の概要

【山岡家文書の調査・研究】

本研究では、仮目録の作成を継続するとともに、山岡家文書のなかから特徴的な資料を抽出し、分析することに努めた。具体的には、通信官僚時代の山岡順太郎が記した日記、山岡が社長を務め、千里山住宅地を開発した大阪住宅経営の書類、山岡の同郷の先輩で大阪選出の衆議院議員であった中橋徳五郎からの書簡、山岡倭の旧蔵資料のなかの大阪商船・大鉄電車などの観光パンフレットである。

このうち山岡日記については、アルバイトによる翻刻も行った。また、大阪住宅経営の書類と観

光パンフレットの研究については、佐藤健太郎氏（関西大学博物館学芸員）、徳田誠志氏（関西大学文学部客員教授）の協力をそれぞれ得た。

【研究成果報告会】

本研究では、2023年12月9日（土）になにわ大阪研究センター1階セミナー室で研究成果報告会を開催した。そのプログラムは次のとおりである。

13：00～ 開会挨拶 米田文孝

13：05～ 報告

官田光史「1912年の大阪市電路線変更問題」

佐藤健太郎「山岡順太郎と千里山住宅地」

徳田誠志「大大阪時代の陵墓参拝について」

15：05～ 休憩

15：20～16：00

松本洋幸（大正大学文学部准教授） コメント

ディスカッション

官田報告では、1912年1月に発生した「南の大火」後の大阪市電路線変更問題を、中橋徳五郎（大阪商船社長・大阪市会議長・衆議院議員）が山岡順太郎（大阪商船内航部長）に宛てた書簡から捉えなおした。また、佐藤報告では、1920年に山岡順太郎を社長として創立された大阪住宅経営の書類や事業報告書を分析し、千里山住宅地の構想や工事のプロセスについて、柿崎欽吾（同社専務、関西大学専務理事）の方針、住宅の形態・配置も含めて詳細に解明した。さいごに、徳田報告では、吉田初三郎の「歴代御陵巡拝図絵」（1928年の『サンデー毎日』付録）や山岡倭の旧蔵資料のなかの「歴代皇陵巡拝の栞」（1933年ごろに大鉄電車が発行）の内容を踏まえ、「大大阪」時代の陵墓参拝ブームに庶民のレジャーとしての要素を見出した。

3名の報告に続いて、松本洋幸氏からコメントをいただいた。松本氏の専門は日本近現代史、とくに1920年代から30年代の政治史・都市史である。2020年には大著『近代水道の政治史 明治初期から戦後復興期まで』を上梓し、首都圏形成史研究会の会員としても活躍しておられる。

松本氏のコメントでは、1910年代後半以降における「大東京」「大横浜」「大大阪」などの呼称の広がり概観され、戦間期の都市に外延的拡大と内部構造の高度化といった問題が存在していたことが指摘された。そのうえで、大阪で民間主導の都市膨張、都市問題への取り組みの最前線にあった山岡順太郎の一次史料がもつ意義の大きさが確認された。続いて、官田報告に対して1910年代初頭の市政と国政をつなぐ実業家・産業資本家の役割、佐藤報告に対して千里山住宅地をめぐるステークホルダー（大阪住宅経営、北大阪電鉄、関西大学、大阪市など）間の思惑の相違、徳田報告に対してはメディア・鉄道会社・旅行者・政府間の相克といった論点が示された。

これを受けて各報告者によるリプライが行われ、さいごに松本氏から山岡家文書の豊かさをとおして、戦間期日本の都市モダン文化の具体像とその展開が明らかにされることに期待が表明された。本研究報告会の参加者は30名であった。

なお、2024年3月に開催予定のなにわ大阪研究センター2023年度研究成果報告会では、伊藤が仮目録の取りまとめを踏まえて、山岡家文書の概要について報告する予定である。

3 今後の展望

山岡家文書は、1920年代前後の大阪の地域史に関する個人文書として、大阪市史編纂所所蔵「関一文書」に匹敵する質・量を誇ると考えられる。その目録の完成は山岡家文書の利便性を飛躍的に高め、山岡家文書内の諸資料はもちろん、学内外で所蔵される同時代の諸資料と山岡家文書をリンクした研究を可能にする。これにより、関一の都市政策を中心に進んできた「大大阪」時代を対象とする政治・社会史研究の局面が転換する可能性もある。山岡家文書に関する今後の研究成果は、大阪・関西の地域史研究、日本近現代史研究の進展に大きく寄与するはずである。

謝辞

本研究では、山岡家文書の所蔵者である山岡家から多大なるご理解とご協力を賜っています。ここに記して厚くお礼申し上げます。

(かんだ あきふみ 関西大学文学部准教授)

(よねだ ふみたか 関西大学文学部教授)

(いとう のぶあき 関西大学博物館学芸員)

表紙にちなんで

橋 寺 知 子

なにわ大阪研究センター研究紀要の表紙は、本センターが所蔵する赤松麟作の版画集「大阪三十六景」を用いている。この版画集は1947（昭和22）年に発刊されたものだが、赤松が描いた大阪の情景は、戦前期の最も豊かで活気があった頃の風景と推測される。ここでは、表紙にちなんで、風景に表れた大阪の近代をふりかえってみたい。

「心齋橋」

心齋橋という住居表示はなく、橋も今はないが、地下鉄の駅名や「心齋橋筋商店街」として広く使われている。東西の幹線道路・長堀通は、かつては幅約40メートルの堀川で、心齋橋は長堀川にかかる橋だった。開削者の一人、岡田心齋が名前の由来と伝えられる。江戸時代は木橋だったが、1873（明治6）年、ドイツから輸入された鉄橋に架け替えられ、大阪名所として耳目を集めた¹⁾。

1909（明治42）年、心齋橋は大阪最初の純西洋式石橋に架替えられた。2連アーチ橋で、意匠設計は大阪府立中之島図書館を手がけた野口孫吾である。欄干には四葉飾りが並ぶゴシック風のデザインで、装飾的な鉄製のガス灯と調和している。戦後、長堀川の埋立てに伴い、1964（昭和39）年に橋は撤去されたが、地元の強い声もあり、2年後、同地に架けられた横断歩道橋に欄干やガス灯の部材が再利用された²⁾。1997（平成9）年、長堀通地下に「クリスタ長堀」が建設されるのに伴い、路上の横断歩道の両側一部に部材が再び利用され、ガス灯も復元、顕彰碑が設置されている。

表紙の絵は心齋橋北詰から南東方向を望んでいる。江戸期、心齋橋筋は花街の新町と芝居町として栄えた道頓堀を結ぶ賑やかな筋であった。長堀川北岸には市電が走る末吉橋通が並行し、この付近は多くの人が往来していたことがうかがえる。南岸には瓦屋根の木造家屋が描かれているが、古写真にもある通り、西洋風の橋梁と江戸期からの水都の風景が、戦前期には共存していた。東方に矩形の白いビルディングが1棟描かれている。これは堺筋に建つ高島屋呉服店と考えられる³⁾。高島屋長堀店は岡田信一郎設計の鉄筋コンクリート造7階建てで、北浜の三越（1917年）、堺筋本町の白木屋（1921年）に続いて1922（大正11）年に開店、高島屋にとって本格的百貨店としての最初の店舗だった。ゴシック様式で、エントランス周りや四隅の塔部分の意匠が百貨店の華やかさを表現している。昭和初期、心齋橋筋の西隣の御堂筋は拡張され、心齋橋筋の呉服店、そごうや大丸は、御堂筋側にも玄関をもつ大型の百貨店への改築が進み、心齋橋付近にはモダンな街並みが出現した。

50年ほど前、祖母が「お友達と心ブラ」なんて言っていたことを思い出した。百貨店や老舗、ハイカラなお店、おいしいものがあふれる心齋橋の雰囲気を感じられる。現在、心齋橋には世界的ブランドショップが軒を連ねる。変化は激しいが、変わらず賑やかだ。

注釈

- 1) 現在、この鉄橋は現存最古の鉄橋として鶴見緑地に残されている（緑地西橋）。
- 2) 石橋の部材はかなり丁寧に残されていたようだ。橋の中央両側のバルコニー部分を支える装飾柱4基も移設・残存していたことが2020年に判明、2021年度に大阪の近代橋梁遺産として大阪市指定文化財となった。
- 3) 御堂筋の拡幅に合わせ、高島屋は堺筋から御堂筋の南端南海難波駅に店舗を設けた。1932年、高島屋南海店が全館開店、長堀店は1939年に南海店に統合された。<https://www.takashimaya.co.jp/shiryokan/history/index2.html>



(大阪名勝) 心斎橋
(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)



旧心斎橋所在地 現況

南東方向を望む。心斎橋の部材は賑やかな街に埋もれて見えづらい。



大阪長堀橋高島屋
(大阪市立図書館デジタルアーカイブより)



旧心斎橋部材

横断歩道の両端と中央分離帯部分に、欄干やガス灯の部材が配されている。




(はしてら ともこ 関西大学環境都市工学部准教授)

2023 年度なにわ大阪研究センター事業紹介

関西大学なにわ大阪研究センターでは、センターがめざす「ネットワークとしての大阪研究の拠点づくり」を支援するために本センターの活動方針の中核ともいえるべき研究領域・テーマを設定しています。これらを足掛かりとして、本センターにおける地域研究と連携の活動が一層重層化されるとともに、今後の継続的な外部資金獲得の基盤が形成されることが期待されています。

2023年度【基幹研究班】

研究領域・テーマ	<ul style="list-style-type: none"> 道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信 鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究 豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承
研究課題	なにわ大阪研究センターにおける研究成果の可視化
研究代表者	乾 善彦 文学部・教授 なにわ大阪研究センター・センター長
研究概要	<p>2021年から改正されたなにわ大阪研究センター規程によって、同センター長を研究代表者とする基幹研究班を設置し、基幹研究のテーマのうち、2022年度に引き続き、①道頓堀五座、芝居小屋大工中村儀右衛門資料調査研究、上方演芸ならびにCGによる可視化の促進と発信、②鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究、④豊臣期大坂図屏風に関連する海外研究機関との共同研究成果の継承の三つのテーマに取り組むものである。</p> <p>①については、2022年度、道頓堀CGの通行人入りバージョンを完成させたが、2023年度は、英語版の完成とブラッシュアップをおこなう。</p> <p>②については、2022年度、鉄砲製造過程のCGを作成したが、2023年度はそのバージョンアップを期し、鉄砲の製造過程の解明に向けて、鉄砲に用いられた和鉄の鍛造加工性とたたら製鉄原料由来の化学成分に注目した調査を行う。また鉄砲鍛冶屋敷のCG等の作成を推進し、2023年度の「(仮称)堺鉄砲鍛冶屋敷ミュージアム」開館に向けたコンテンツの完成を目指す。</p> <p>④については、2022年度に復旧をおこなった豊臣期大坂図屏風のデジタルコンテンツの公開とバージョンアップに加え、新たにエッゲンベルク城博物館の日本の間のVRの作成に着手し、あらたな段階として博物館展示用コンテンツとWebによる情報発信の準備を行い、2025年度の完成を目指す。</p>
	 
研究分担者	林 武文 総合情報学部・教授 なにわ大阪研究センター・副センター長 藪田 貫 関西大学名誉教授 井浦 崇 総合情報学部・教授 橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 丸山 徹 化学生命工学部・教授 北川 博子 関西大学非常勤講師
研究期間	2023年度（1年間）


2023年度～2024年度 【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> 世界遺産登録を視野に入れた明日香村との共同研究 (発掘50周年を迎える高松塚関連の研究をはじめ飛鳥の歴史的文化遺産に関連する研究)
研究課題	甘樫丘遺跡群の変遷と土地利用に関する研究 — 発掘調査の成果を中心に —
研究代表者	井上 主税 文学部・教授
研究概要	<p>本研究の目的は、甘樫丘遺跡群を対象とし、発掘調査を通じて得られた資料や、『日本書紀』などの文献史料にみられる記録などをもとに、本遺跡の性格や歴史的な意義について考察することにある。飛鳥時代の邸宅の様子を知りうる資料は少ないため、この遺跡の解明はその手がかりとなり得るものと期待される。また、甘樫丘の南東に位置する島庄（石舞台古墳周辺）には蘇我馬子の邸宅があったと推定され、島庄遺跡がその有力候補とみられている。この島庄遺跡の発掘調査成果とも比較検討を行なう。これにより、甘樫丘遺跡群の性格をより明確にすることができるものと考えられる。</p> <p>①研究打合せ（2023年6月頃、2024年6月頃） 準備作業を経て、6月頃に研究打合せを明日香村役場で開催する。代表者と分担者で研究方法の確認と、発掘調査予定について協議し共有化を図る。2年目も同様に打合せを行う。</p> <p>②発掘調査への参加（2023年10月～2024年2月頃、2024年10月～2025年2月頃） 本学考古学研究室に所属する学部生、大学院生が新協定に基づき、発掘調査に参加する。</p> <p>③遺跡の視察 遺跡の発掘調査にあわせて、代表者と分担者で現地を複数回視察する。検出した遺構や出土遺物についての意見交換を行い、遺跡の時期や性格について検討する。</p> <p>④関連資料調査 代表者と分担者が島庄遺跡から出土した資料の実見を行い、甘樫丘遺跡群との比較研究を進める。</p> <p>⑤研究成果のまとめ（2024年3月頃、2025年2月頃） 1年目の研究成果の取りまとめと、次年度の実施計画案の検討を2024年3月頃に行う。2025年2月に、2か年の研究成果の取りまとめを行う。</p>
研究分担者	西本 昌弘 文学部・教授 長谷川 透 明日香村教育委員会・係長
研究期間	2023年度～2024年度（2年間）

2022年度～2023年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> 大学昇格を果たした1922年以降、大大阪時代の各分野で活躍した本学所縁の人材の発掘と大学の足跡を探る研究
研究課題	「大大阪」の時代と関西大学 ー山岡家文書の調査・研究を中心にー
研究代表者	官田 光史 文学部・准教授
研究概要	<p>本研究の目的は、山岡家文書（山岡順太郎・倭の旧蔵資料）の調査・研究によって、関西大学関係者の活動という視点から、「大大阪」時代の政治や社会のあり方に光を当てることである。とくに山岡が本学の総理事や学長などとして本学の経営・教育に携わった1920年代の資料を重点的に調査・研究することで、山岡をはじめとする本学関係者が「大大阪」の形成と発展に貢献した姿を描き出すことを目的とする。</p> <p>また、本研究の特色は、山岡家文書という質・量ともに充実した資料を初めて本格的に研究することであり、そのポイントは①山岡家文書の調査・研究、②「大大阪」を支えた大阪市役所・大阪市会の校友の調査・研究、③「大大阪」のツーリズム研究の3点である。</p> <p>これらの研究の集大成として、最終年度には講演会を開催するとともに、山岡家文書に係る講演資料を作成する。講演会については、1920年代の東京など、他の都市と大阪の比較も視野に入れて企画する。山岡家文書の目録は、新出資料の基礎データとして、大阪・関西の地域史研究はもちろん、日本近現代史研究に大きなインパクトを与えると期待している。</p> <p>(2022年度)</p> <p>①仮目録の作成とともに重要資料の翻刻を進め、山岡を中心とする政官財界のネットワークの広がりを解明する。</p> <p>②山岡家文書、さらには大阪市史編纂所所蔵の地域資料、大阪市公文書館所蔵の公文書のなかから大阪市役所・大阪市会の校友に関する資料を収集する。それらの資料と『大大阪』などの雑誌・新聞の記事を合わせて検討を加える。</p> <p>③山岡倭の旧蔵資料のなかの観光パンフレットを分析する。</p> <p>(2023年度)</p> <p>研究成果に基づいて講演会を開催するとともに、山岡家文書に係る講演資料を作成する。</p>
研究分担者	米田 文孝 文学部・教授 伊藤 信明 博物館・学芸員
研究期間	2022年度～2023年度（2年間）

2022年度～2023年度【公募研究班】

研究領域・ テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・その他、なにわ大阪に関する諸問題に関する研究（大阪の都市景観の変遷）
研究課題	<p>大阪の失われた景観・残る景観 —戦後昭和・平成の大阪を捉えた風景写真集・絵画を用いて</p>
研究代表者	岡 絵理子 環境都市工学部・教授
研究概要	<p>本研究では、戦後復興、またはその後の「都市再生」が行われる直前の1990年ごろまでの写真や絵画を用いて、都市の更新により失われた様々な大阪の景観を見出すことを目的としている。具体的には、主に戦後に撮られた写真と、同じ場所・同じ視点場で写真を撮影し、その両者を比較し、その場所の何が失われ、何が残されたのかを検証する。さらにそこに起こった都市計画的出来事を調査し、記載する。これらから、戦後昭和から平成にかけての大阪の景観の変遷と、その背景にあった文化・都市行政などの社会的状況の変化との関連性を浮かび上がらせることができると考える。</p> <p>大阪の景観構造を歴史的視点から考察した研究は、「浪花百景」や「摂津名所図会」などを用いた近世を対象とした景観研究が複数ある。また、近世、近代においては、中之島、御堂筋、橋梁、大阪駅など、大阪の景観を代表する「部分」の景観研究が多くを占めている。</p> <p>しかしながら、近年「都市再生」が盛んに行われるようになり大阪の町の再開発・更新が進んでおり、大阪の景観構造にも大きな変化が見られることは周知であるが、これらを扱っている研究はほとんどなされていない。大阪の景観変遷の特徴とも言える「移ろいやすさ」の要因について、都市景観・都市計画と建築史の視点から解明しようとする点を、本研究の特色の第一とし、明日の都市景観・都市計画のありようを担うであろう、次世代の育成を、第二の特色としたい。</p> <p>(2022年度・2023年度)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 対象とする写真・絵画の選定 2. デジタルデータの作成 3. 写真・絵画の視点場（地点）確定 4. 写真・絵画の同じ視点場での写真撮影 5. 写真の現在の写真、絵画と現在の写真の比較と変化・変容の確認 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
研究分担者	<p>橋寺 知子 環境都市工学部・准教授 宮地 茉莉 環境都市工学部・助教</p>
研究期間	2022年度～2023年度（2年間）

『関西大学なにわ大阪研究』投稿規程

26 July 2018

1 投稿資格

投稿資格を有する者は次の通りとし、所属機関において研究倫理研修を受講していることを条件とする。

- (1) 関西大学なにわ大阪研究センター（以下、本センターという）において研究活動に従事している者、および従事した経験がある者。
- (2) 関西大学の専任教育職員。
- (3) 上記以外の者で、関西大学専任教育職員の推薦を受けた者。

2 投稿の内容・種別

投稿を受け付ける原稿は「なにわ大阪についての研究」に関するもので、種別は次のとおりとする。

- (1) 審査員の査読を希望する論文
- (2) 査読を希望しない論文
- (3) 研究ノート
- (4) 資料
- (5) その他（事前に本センターに問い合わせること）

3 投稿の体裁・分量

投稿は日本語（横書きまたは縦書き）または英語とする（それ以外の言語での投稿を希望する場合は本センターまで問い合わせること）。原稿は WORD もしくは TeX で作成し、PDF 形式に転換したファイルも添付して提出する。分量は、本誌の体裁（A4判で1ページおよそ1400字）で図表等を含めて最大20ページ以内とする。

4 掲載の決定

掲載の採否は、査読付き論文については審査員の査読を経て編集委員会が、それ以外の投稿については編集委員会が決定する。

5 著作権等の帰属

掲載が決定した投稿の著作権は投稿者（著者）に帰属する。ただし、本センターのホームページや各種電子ポータルなどに掲載・配布する電子複製・配布権は本センターに属するものとする。

6 抜き刷りの作成

投稿者は、掲載が決定した投稿の抜き刷りを作成することができる。30部までは無料、それ以上は有償とする。

7 投稿手続等

投稿は、投稿フォーム（本センターのホームページに掲載）を必ず添えて、下記まで送付すること。投稿の締切日は毎年度12月末日、ただし査読を希望する場合は11月末日とする。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35 関西大学なにわ大阪研究センター
naniwa-osaka@ml.kandai.jp

【編集後記】

なにわ大阪研究センターは、2016年の発足以来、社会連携部に所属していましたが、2024年度から博物館の傘下に移行することになりました。当センターが他の研究機関とは異なり、社会連携部に属していたのは社会連携・社会貢献にその使命があったからにはかなりませんが、これは博物館の使命の一部でもあります。同じ建物のなかで同じ使命を担いながら所属が異なるというのは、ある意味非効率的な面がありました。これを一体化することで、無駄をはぶき、おたがいの長所をさらに充実させようというねらいであります。というわけで、本号は、現行体制での最終号となります。

2015年に調査が行われた「浪花名所図屏風」が、今年度、ご所蔵の門 善孝様より当センターにご寄贈いただきました。調査当時に複製を作成していましたが、やはり現物にふれるとさまざまなことが考えられてきます。現在、再調査の準備をはじめており、調査結果の公開とあわせて、しかるべき時期に公開したいと考えています。ご寄贈いただいた門 善孝様に厚く御礼申し上げます。

本号も関係各位のご努力下、論文2編、研究ノート1編、資料1編を掲載できました。論文2編は現在のセンターの当面の中心課題である「見える化」に関するもので、林副センター長のご尽力によるもの、北川氏の研究ノートは本センターの目的の「なにわ大阪研究」そのものの課題、そして、藪田氏の資料は、現在進行中の堺市との連携事業である、堺鉄炮鍛冶屋敷関係の貴重な資料の紹介です。いずれも本センターならではのもので、各位に御礼申し上げます。口絵として、本学図書館蔵契沖書状を紹介させていただきました。一昨年の新収品ですが、以前本紙で紹介した「歌稿」とともに、4月からの博物館での文学部100周年博物館30周年の記念展示に出展される予定です。

センターの研究報告として、昨年度終了の2件の成果報告2篇と、今年度の研究概要2件があります。基幹研究班は期間が単年度と定められていますが、昨年度まで3年間の総括と次年度以降の展望を兼ねています。次年度以降の新たな展開にご期待ください。

また、橋寺氏には創刊号以来、引き続き表紙絵の選定とその解説をいただきました。裏表紙の大正橋は子どものころ、木津の木材市場に材木を引き取りに行くトラックで渡った記憶があります。アーチ形の橋を渡るときのドキドキ感が妙に心に残っています。今はアーチもなくなって市電もなくなって普通の大きな橋ですが、大阪ドーム（現、京セラドーム大阪）の行き来によく利用しています。大阪の景色も時とともに変わっていく様子が橋寺氏の解説からうかがわれます。われわれも時とともに、つねに、進化した新しい姿でありたいと願いながら、新しい頁へとすすむ所存です。

組織的にはかわりますが、当センターの研究・社会貢献はかわりなく継続します。今まで以上のご協力・ご支援をお願いいたします。

2024年3月

関西大学なにわ大阪研究センター長
乾 善彦

一 壹匁五分玉 長三尺三寸 壹挺
右ハ加藤左近將監殿家来
倉辻猶右衛門詔

同日

一 壹挺 貳匁五分玉 長三尺八寸
右ハ松平阿波守殿家来奥村
三右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸
右ハ松平阿波守殿御知行所
阿波国百姓海部郡牟岐村
為右衛門詔

ノ三丁

加藤左近將監様
加藤出雲守様
一柳山城守様
稲葉右京亮様
木下大和守様
柳生備前守様
丹羽和泉守様
岡部美濃守様
松平阿波守様
山崎兵部様

松平大和守様
松平左兵衛佐様
榊原式部大夫様
堀 丹波守様

同 長門守様

土方河内守様

吉野龍門中之坊

伊達紀伊守様

大久保山城守様

松平備前守様

酒井播磨守様

渡邊越中守様

森川兵部少輔様

(以上)

新助誂

太田勘七誂

右八松平阿波守殿家来

奥村三右衛門誂

同日

八分

十月廿四日

一 式挺 式匁五分玉 長三尺五寸

一 十匁玉 長式尺三寸 壹挺

同日

右八松平阿波守殿家来

右八松平左兵衛督殿家来

一 三匁玉 長三尺二寸 壹挺

芝辻与七郎誂

嶋崎十兵衛少火皿入ねじ誂

右八木下大和守殿家来

坂本重兵衛誂

同日

同日

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸五歩

一 三匁五分玉 長三尺 壹挺

一 式匁八分玉 長三尺三寸 壹挺

右同家中岡崎作之進誂

右八加藤左近將監殿家来

右八稻葉右京亮殿家来

同日

台仕替誂

太田勘七誂

同日

同日

同日

一 壹挺 式匁玉 長三尺六寸

同日

同日

右同家中飯尾久右衛門誂

一 三匁五分玉 長三尺壹寸 壹挺

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺五寸

同日

右同家中鶴飼右仲少筒

右八大久保出羽守殿御知行所

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

仕立直し台仕かへ誂

美作国北条郡南方中村

右八加藤左近將監殿家来

此当り十一月廿三日同廿七日同断

勘六誂

口分田羽右衛門誂

十一月廿二日

同日

一 壹挺 三匁七分玉 長三尺三寸

一 四匁五分玉 長三尺三寸 壹挺

同日

右八山崎兵部殿家来

右山崎兵部殿家来阿部源助少

右八伊達遠江守殿御知行所

筒仕立直し台金具誂

十一月廿二日

右八伊達遠江守殿御知行所

同日

十一月廿二日

右八伊達遠江守殿御知行所

同日

十一月廿二日

右八伊達遠江守殿御知行所

同日

十一月廿二日

右八伊達遠江守殿御知行所

一 式匁八分玉 長三尺二寸 壹挺

十一月廿二日

十二月五日

右八稻葉右京亮殿家来

一 二匁三分玉 長三尺五寸 壹挺

十二月五日

右四挺三人

十 壹挺 ————— 長三尺七寸

布小木久保出羽守殿御知行所

美作国北條郡

八月十五日

三匁玉

一 一匁八分玉 長三尺三寸 壹挺

右八山崎兵部殿家来田中

金弥詔

一 三匁玉 長三尺一寸 壹挺

一 二匁七分玉 長三尺二寸 壹挺

右八木下大和守殿家来

保川長司詔

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺

右八加藤近江守殿家来

笹田万右衛門詔

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺二寸

一 壹挺 三匁玉 長三尺壹寸

右八稻葉右京亮殿家来

清水七郎左衛門詔

一 壹挺 二匁七分 長三尺三寸
右同家中川崎源吉詔

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右同家中小川健藏詔

ノ九丁

一 壹挺 三匁二分玉 長三尺三寸

右八紀伊様御領分紀伊国

牟婁郡高岡村安右衛門詔

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺七寸

右八大久保出羽守殿御知行所

美作国北條郡油木村

和助詔

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八御同人様御知行所同国

同郡山手南村源藏詔

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八伊達遠江守殿御知行所

伊与国宇和郡野村百姓

与二兵衛詔

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿御知行所
いよ国宇和郡のふ川村伝藏詔

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八御同人様同国同郡同村

源二郎詔

ノ七丁

一 二匁八分玉 長貳尺八寸 一挺

右八紀伊様御領分紀伊国

牟婁郡高岡村百姓忠八

筒仕立直し台仕かへ詔

一 三匁玉 長三尺 一挺

右八加藤左近将監殿御知行所

いよ国喜多郡中山村与五郎詔

筒仕立直し台金物詔

一 三匁玉 長三尺一寸 一挺

右御同人様同国浮穴郡

大久保村忠藏詔筒仕立

直し台金巢詔

十月廿四日

一 八分玉 長二尺八寸 壹挺

右八林藤四郎殿家来 ■田

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺二寸

右同家中櫛木源之進誂

同日

〇一 拾匁玉 長二尺三寸 壹挺

右八遠藤備前守殿御組与力

吉田主膳誂

同日

〇一 拾匁玉 長二尺三寸 壹挺

右御同人御組与力鈴木勘兵衛誂

右式挺之筒中り十月十日と廿三日迄

御断十月九日

四月廿九日

一 式挺 二匁九分玉 長三尺三寸

右伊達紀伊守殿御知行所

いと与国宇和郡上川村百姓

勘右衛門誂

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿御知行所

阿波国海部郡牟岐村百姓

為右衛門誂

同日

一 十匁玉 長二尺三寸 壹挺

右八遠藤備前守殿御組与(力)戸田

三二郎筒仕立直し台仕替誂

同日

一 十匁玉 長貳尺三寸 壹挺

右八山崎兵部殿家来奥野理

筒仕立直し台金具誂

六月五日と同十五日迄中り

御断申上候

六月四日

六月四日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八加藤左近将監殿家来

羽岡藤蔵誂

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺

右同家中橋岡茂右衛門誂

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右八稲葉右京亮殿家来

中村権兵衛誂

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右同家中清水七郎左衛門誂

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右八伊達紀伊守殿家来

松田六郎左衛門誂

五挺

六月四日

一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右八伊達遠江守殿御知行

伊与国宇和郡須賀村百姓

金兵衛誂

同日

一 式挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右御同人同国同郡下畑地村百姓

吉太郎誂

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右御同人同国同郡山伐村勘右衛門誂

右八稲葉右京亮殿家来
小園軍七詔

ノ五挺

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右八紀伊様御領分牟婁郡

丸山村百姓覚右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右八加藤左近將監様御知行

い与中国浮穴郡上瀨村儀兵衛詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右御同人様喜多郡中山村

伊助詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右八御同人様同国同郡北表村

良助詔

三月廿三日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺七寸

同

一 三挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

芝辻与七郎詔

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八稲葉右京亮殿家来井上

権左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右同家中清水七郎左衛門詔

ノ五七挺

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右八加藤左近將監殿御知行所

伊与中国喜多郡村前村百姓

伊助郎

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八伊達遠江守殿御知行所

い与中国宇和郡惣川村百姓

祐助詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右御同人御知行所同国同郡

同村林左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右八同人同国同郡同村百姓

仲右衛門詔

四月廿五日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右八稲葉右京亮殿家来

遊佐郡兵衛詔

七月十九日分同廿七日迄

同日

一 壹挺 二匁二分玉 長三尺一寸

右同家中松井正七詔

同日

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿家来

中嶋平角詔

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右小太夫保出羽守殿御知行所美作圍

久米郡山手北村百姓仲右衛門詔

十二月十四日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿御知行所

阿波国海部郡牟岐村百姓為右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右御同人同国同郡同村百姓

喜七郎詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八加藤左近將監殿御知行所

喜多郡中山村与五郎詔

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右御同人様浮穴郡上瀨村百姓

宇右衛門詔

十二月十四日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺貳寸

右八紀伊様御領牟樓郡

板屋村百姓銀平詔

十二月十六日

一 壹挺 二匁六分玉 長三尺三寸

右八柳生備前守殿家来

三浦惣左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺三寸

右八加藤左近將監殿家来

後藤八郎右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁玉 長二尺八寸

右同家中入江庄八詔

同

一 壹挺 三匁玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿御知行所

阿波国海部郡赤松村百姓

新之丞詔

十二月十六日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右八加藤左近將監殿御知行所

伊与国浮穴郡上瀨村百姓

金兵衛詔

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿御知行所

伊与国宇和郡赤野子村百姓

二郎右衛門詔

寅ノ正月

二月廿日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺二寸

右加藤左近將監殿家来中村文次

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺

右八木下大和守殿家来

玉井

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右同家中井上長右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

同日

一 忝挺 六匁玉 長二尺五寸

右八木下大和守殿家来坂本

重兵衛の筒仕立直し台仕(か)へ詔

同日

一 忝挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右八稻葉右京亮殿家来吉田

源右衛門の筒仕立直し詔

メ直し五丁

十一月四日

一 忝挺 十匁玉 長二尺二寸

右八松平左兵衛督殿家来

嶋崎十兵衛の台金具仕かへ

筒仕立直し詔

十一月四日

一 忝挺 拾匁玉 長二尺四寸

一 忝挺 三匁五分玉 長三尺五寸

右八松平左兵衛督殿家来

嶋崎十兵衛詔

此中り四月四日の十六日迄御断

同日

一 忝挺 貳匁玉 長壹尺壹寸

右八山崎兵部殿家来■瀬

九郎兵衛詔

同日

一 忝挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八同家中村瀬大三詔

此中り四月四日の十六日迄

同日

一 忝挺 壹匁五分玉 長三尺三寸

右八加藤左近将監殿家来

倉辻猶右衛門詔

メ五丁

十二月十四日

一 忝挺 四匁玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

垣見大八の筒仕立直し

台仕かへ詔

同日

一 忝挺 三匁五分玉 長三尺

右八同家中永田権太夫の

筒仕立直し台仕かへ詔

同日

一 忝挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来芝辻

与七郎詔

同日

一 忝挺 二匁五分玉 長三尺

右八加藤近江守殿家来沢田

喜右衛門 寺井金吾詔

同日

一 忝挺 四匁玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

荒木与次兵衛詔

十二月十四日

一 忝挺 二匁五分玉 長三尺

右同家中亀田文左衛門詔

同日

一 忝挺 壹匁五分玉 長三尺

右八同家中友松忠右衛門詔

同日

一 忝挺 三匁玉 長三尺

右同家中森五郎左衛門詔

メ六挺

八月廿九日

- 一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸
- 右八松平阿波守殿家来

十五日

濱園之進誂此当り十二月廿十申

廿五日迄御断

十二月十四日

同日

- 一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸
- 右八山崎兵部殿家来村瀬大三

同日

- 一 壹挺 二匁玉 長三尺
- 右八加藤近江守殿家来戸名

傳左衛門誂

同日

- 一 壹挺 二匁五分玉 長三尺
- 右同家中沢田吉右衛門誂

同日

- 一 壹挺 三匁玉 長三尺
- 右八加藤左近将監殿家来

村上忠左衛門誂

六挺

九月十五日

- 一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺五寸
- 同

- 一 壹挺 貳匁玉 長三尺六寸
- 右八松平阿波守殿家来

濱園之進誂

同

- 一 壹挺 三匁二分玉 三尺五寸
- 右八山崎兵部殿家来村瀬大三誂

同

- 一 壹挺 二匁玉 長三尺三寸
- 右八同家中田邊圓之進誂

同

- 一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸
- 右八稲葉右京亮殿家来遊佐

郡兵衛誂

同

- 一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸
- 右同家中板井伊左衛門誂

同

- 一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸
- 右同家中清水七郎左衛門誂

同

- 一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺一寸
- 右加藤左近将監殿家来林

兵右衛門誂

同

- 一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸
- 右家中横田兵太夫誂

同

- 一 壹挺 二匁玉 長三尺三寸
- 右八伊達紀伊守殿家来

櫛木源之進誂

十壹挺

九月十五日

- 一 壹挺 四匁五分玉 長二尺八寸
- 右八松平左兵衛督殿

家来嶋崎十兵衛分台

仕かへ誂

同

一 壹挺 二匁玉 長三尺

同

一 壹挺 三匁玉 長三尺

右八加藤近江守殿家来

筒仕立直し台仕替御詠

同

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺

右八加藤左近將監殿家来

梶原浅右衛門の筒仕立直し

台仕替御詠

四月十三日

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺壹寸

右八稻葉右京亮殿家来

清水七郎左衛門詠

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来

中村助之進詠

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八圃家中丸山申達詠

同

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺三寸

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八木下大和守殿家来

安川唱詠

同

一 壹挺 二匁三分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

芝辻与七郎詠

五月十五日

一 壹挺 貳匁七分玉 三尺三寸

右八一柳山城守殿家来

黒川六郎左衛門詠

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右同家中長谷部兎毛詠

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右八加藤左近將監殿家来

加藤熊之進詠

同日

○一 壹挺 二匁玉 長三尺

右同家中瀧野清右衛門詠

六月六日同十二日迄中り御断

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺壹寸

右同家中人見市右衛門詠

同日

一 貳挺 三匁玉 長三尺

右同家中中村甚五太夫詠

十一月五日同十五日迄中り同断

五月十五日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿御知行阿波

国海部郡牟岐村為右衛門詠

同日

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右御同人様同国同郡中村

林兵衛詠

丑

正月十七日

一 壹挺 壹匁九分玉 長三尺貳寸

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺貳寸

右八木下大和守殿家来安川唱詠

同

一 壹挺 貳匁玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿家来櫛木源之進詠

同

一 壹挺 貳匁五分玉 長三尺三寸

右八同家中宇都宮物左衛門詠

同

一 壹挺 六匁玉 長二尺七寸

右八加藤左近将監殿家来鶴飼右忠詠

一 壹挺 主匁三分玉 長三尺二寸

右岡家中中村甚五太夫詠

同

一 壹挺 二匁玉 長三尺

右同家中鈴木武左衛門詠

同

一 壹挺 二匁玉 長三尺

右同家中岡田藤平次詠

丑正月十七日

一 壹挺 貳匁六分玉 三尺五寸

右八大久保出羽守殿美作国

北條郡南方中村勘六詠

同日

一 壹挺 貳匁三分玉 三尺三寸

右八御同人様同国同郡同村五十郎詠

正月晦日

一 拾挺 三匁五分玉 長一尺壹寸

右八丹羽和泉守殿分筒仕立直し御詠

同日

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来村瀬

大三詠

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺壹寸

右八木下大和守殿家来二宮

新七詠

〇一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

〇一 壹挺 貳匁玉 長三尺

右八加藤近江守殿家来升山

甚右衛門詠此貳丁御断相延し

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右八稻葉右京亮殿家来

中村權兵衛詠

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右家中岡部兵右衛門詠

同日

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿家来

櫛木源之進詠

×七挺

四月十二日

一 壹挺 五拾目玉 長二尺貳寸

同

一 拾挺 三匁五分玉 長壹尺一寸

右八丹羽和泉守殿分筒仕立

直し御詠

右八伊達紀伊守殿家来
櫛木源之進詠

右同家中川上善八詠
阿部源助詠

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺
右同家中中村彦太夫詠
拾挺

同

○一 式挺 二匁八分玉 長三尺三寸

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右同家中中村助之進詠

十二月十二日

右八山崎兵部殿家来石川平吉詠

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺六寸

同

一 式挺 壹匁八分玉 長三尺三寸

右八大久保出羽守殿御知行
北條郡

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八木下大和守殿家来

美作国久米郡宮部村雲治

右同家中高平八郎詠

安川唱詠

五挺

同

同

十二月十二日

一 壹挺 四匁玉 長三尺

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

壹挺

右八加藤右門殿家来升山

同人様御知行山手北村幾右衛門

○一 式挺 三匁玉 長三尺三寸

甚右衛門詠

同

右八稻葉右京亮殿家来

一 壹挺 四匁玉 長三尺

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

板井伊左衛門詠

同

同国同村平三郎詠

二月朔日今同八日迄中り御断

一 壹挺 四匁玉 長三尺

同 七分玉

同

右同家中加藤弥二馬詠

一 壹挺 二匁八分玉 三尺七寸

一 式挺 二匁八分玉 長三尺三寸

十二月十二日

同国同村仲右衛門詠

右八山崎兵部殿家来田邊

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺

同 一 壹挺 二匁七分玉 長三尺七寸

与左衛門詠

右八加藤左近将監殿家来

同 一 壹挺 二匁七分玉 長三尺七寸

同

田村加右衛門詠

同国同村幸右衛門詠

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

同日

一 式挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右同家中清水七郎左衛門詔

十二月十二日中り断

同

一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右八木下大和守殿家来小川

半右衛門詔

ノ

八月九日

一 式挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

同

一 壹挺 三匁玉 長一尺五寸

右八加藤左近将監殿御知行

伊与国浮穴郡佐礼谷治兵衛詔

同 壹挺

一 式挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右八御同人同郡大久保村

忠藏詔

同

一 壹挺 二匁八分玉 三尺二寸

右八紀伊様御領分紀伊国

室郡丸山村宗右衛門詔

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右御同人様同国同郡赤木村

十右衛門詔

同

一 壹挺 二匁八分玉 三尺三寸

右御同人様同国同郡竹公村

善之丞詔

同

一 壹挺 二匁八分玉 三尺三寸

右御同人様同国同郡同村

武右衛門詔

八月九日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺四寸

右八稲葉右京亮殿御知行

豊後国大分郡川登村源左衛門詔

同

一 壹挺 二匁五分玉 三尺三寸

右八松平阿波守殿御知行

淡路国■三原郡白崎村

百姓權四郎詔

ノ拾挺八人詔

九月五日

一 壹挺 式匁五分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

濱園右衛門詔

同

一 式挺 式匁八分玉 長三尺五寸

右八同家中芝辻与七郎詔

一 壹挺 壹匁七分玉 長三尺一寸

同

一 式挺 二匁七五分玉 長三尺二寸

右八木下大和守殿家来

安川唱詔

十二月四日令十一日中り御断

十二月三日

十月朔日

一 式挺 式匁五分玉 長三尺三寸

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

三月廿三日

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺

木下大和守殿家来井上

長右衛門詔

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺

右同家中土屋長右衛門詔

同日

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右八稻葉右京亮殿家来

太田勘七詔

同日

一 七挺 三匁五分玉 長二尺八寸

右八山本紀伊守殿御領分

御鉄炮筒卷直し御詔

五月九日今廿日迄中り御断

五月八日

同日

一 五挺 三匁五分玉 長二尺八寸

右御同人御領分鉄炮ねち

火皿直し御詔

同日

一 六挺 六匁玉 長二尺五寸

右八山本紀伊守殿御与力

中条伝之丞今ねち火皿

直し詔

五月廿九日

一 七挺 三匁五分玉 長三尺三寸

同日

一 廿挺 五匁玉 長三尺壹寸

右八丹羽和泉守殿今

筒仕立直し御詔

五月廿九日

一 壹挺 二匁玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

濱園右衛門詔

同 壹挺

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺五寸

同

一 壹挺 二匁八分玉 三尺三寸

右同家中芝辻与七郎詔

同

一 壹挺 壹匁七分玉 長三尺二寸

右八木下大和守殿家来

安川唱詔 九月十九日今廿一日迄

中り御断

×四挺

七月八日

一 拾挺 拾匁玉 長二尺三寸

右八丹羽和泉守殿今筒仕立

直し御詔

八月九日

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来中村

助之進詔

同

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右同家中村瀬大三詔

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右八稻葉右京亮殿家来

高宮多七郎詔

同

右八山崎兵部殿家来
石川平吉誂

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸
右同家中竹田庄左衛門誂

同日

一 貳挺 三匁玉 長三尺三寸
右同家中川上善右衛門誂

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 三尺八寸
右八松平阿波守殿家来

濱園右衛門誂

子ノ正月廿日同廿八日迄中り御断

正月十九日

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸
右八稻葉右京亮殿家来

太田勘七誂

ノ六挺

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八北條美濃守殿御知行

河内国錦郡西野村百姓

小兵衛誂

子

正月十九日

○一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右八木下大和守殿家来

小川半右衛門誂 二月廿二日

同廿九日迄中り

御断二月廿一日

同 六

一 壹挺 四匁玉 長二尺五寸

右同家中長沢采女誂

同

一 壹挺 二匁六分玉 長三尺

右八稻葉右京亮殿家来

清水七郎左衛門誂

同

一 壹挺 三匁玉 長三尺

一 壹挺 四匁玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

横田兵太夫誂

同

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

渡部源太左衛門分筒仕立直し

台仕かへ誂

同

一 壹挺 四匁玉 長三尺

右同家中石河孫左衛門分筒

仕立直し台かへ誂

二月十日

一 貳挺 二匁六分玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿家来

櫛木源之進誂

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺三寸

右八稻葉右京亮殿家来

清水七郎左衛門誂

一 貳挺 二匁■分玉 長三尺五寸

一 貳挺 二匁七分玉 長四尺

右八松平阿波守殿家来

芝辻与七郎誂

佐伯甚左衛門詔

八月八日同十三日中り御断

八月七日

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八稻葉右京亮殿家来

稻葉■詔 牧田弥左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八同家中加納貞之進詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

右同家中昼田治左衛門詔

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

大野孫兵衛詔

五月廿九日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八紀伊様御領紀伊国

牟婁郡赤木村百姓儀右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右御同人様御領同国同郡

尾川村百姓宗右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八御同人様御領同国同郡

丸山村百姓覺右衛門詔

七月廿四日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八柳生備前守殿家来

楠庄太夫詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右同家中横田伊住詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来谷田

作平詔

同日

一 壹挺 貳匁玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

芝辻与七郎詔

同日

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺三寸

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八板倉美濃守殿御知行

備中国川上郡田井村武兵衛詔

七月

十一月廿四日

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸

右八紀伊様御領分紀伊国

室郡板屋村百姓久米右衛門詔

同日

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸

右御同人様同郡同村伊右衛門詔

同日

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸

右御同人様同郡同村市之助詔

十一月十九日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八稲葉右京亮殿家来清水
七郎左衛門詔

三宅与市詔台金仕かへ
筒仕立直し詔

右八山崎兵部殿家来
田邊与左衛門詔

同日

同日

同日

一 壹挺 六匁玉 長貳尺八寸

一 三挺 二匁八分玉 長三尺三寸

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八加藤左近将監殿家来

右八水野筑後守殿御知行

右同家中小野弥市詔

永井仁兵衛詔

紀伊国室郡小栗須村
百姓儀兵衛詔

五月八日

同日

此断相延

一 式挺 三匁玉 長三尺五寸

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

一 壹挺 貳匁玉 長三尺五寸

右同家中渡部太右衛門詔

右八能勢治左衛門殿御知行

右八松平阿波守殿家来

廿五日迄御断

撰津国能勢郡田尻村平助詔

濱園右衛門詔

十二月九日

三月廿七日

同日

三月廿七日

一 壹挺 二寸八分玉 長三尺五寸

一 式挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

○一 壹挺 拾匁玉 長貳尺三寸

右八北条美濃守殿河内国

右八稲葉右京亮殿家来

右八山崎兵部殿家来奥野

錦郡西野村長八郎詔

田宮三右衛門詔

■理詔筒仕立直し台

五月八日

同日

金具詔

五月八日

一 壹挺 壹匁玉 長貳尺

六月朔日同十一日中り御断

一 壹挺 五分玉 長壹尺八寸

右八菅谷兵庫殿御詔令

五月廿九日

右八山本紀伊守殿御組同心

筒卷直し御詔

同日

同日

五月廿九日

一 壹挺 拾匁玉 長二尺三寸

一 式挺 二匁八分玉 長三尺三寸

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺五寸

右八遠藤備前守殿御組与力

一 式挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八一柳美濃守殿家来

久二郎詠

一 壹挺 二匁玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守殿御領分

伊予国三間郡中野村百姓

丈左衛門詠

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右加藤左近將監様伊予国

喜多郡柳沢村利作詠

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右御同人様御領分浮穴郡

上灘村金兵衛詠

十二月

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右山崎兵部殿家来鈴木

金治郎詠

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八稻葉右京亮殿家来

清水七郎左衛門詠

亥ノ正月

二月十六日

一 壹挺 三匁玉 長三尺

右八加藤左近將監殿家来

小沢喜左衛門詠

同

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

濱園右衛門詠

三月廿七日 四月十日迄

中り御断

三月廿六日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右開家中中村林兵衛詠

同

一 三挺 二匁五分玉 長三尺五寸

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺六寸

右同家中芝辻与七郎詠

二月十七日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右八加藤左近將監様伊予国

喜多郡北表村百姓傳七詠

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右御同人様同郡同村百姓

宇右衛門詠

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右小北條美濃守殿百姓

錦之郡西野村長八郎詠

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八北條美濃守殿百姓

錦郡西野村清一郎詠

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右同村作二郎詠

三月廿七日

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来波多野

周助詠

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺壹寸五歩

同日

○一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

不破五郎右衛門詔

十一月廿五日迄中り御断

十一月廿日

右八柳生備前守殿家来

倉山藤内詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右同家中楠庄太夫詔

同日

一 式挺 二匁八分玉 長三尺六寸

右八板倉美濃守殿御領分

備中国川上郡田井村百姓

六郎左衛門詔

同

一 壹挺 三匁玉 長二尺三寸

右八木下大和守殿家来

長沢采女詔

同日

一 壹挺 三匁二分玉 長三尺二寸

右八木下大和守殿家来

工藤嘉七詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八北條美濃守殿御領分

河内国錦郡西野村百姓

吉三郎詔

一

九月十七日

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

鵜飼市左衛門少筒仕立直し

台金具詔

一 式挺 二匁五分玉 長三尺五寸

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八蜂須賀大炊殿家来濱

園右衛門詔

十二月

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八紀伊様御領分紀伊国

室郡神木村百姓源作詔

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺

右八稻葉馬左衛門少筒仕立直し

台金具詔

十一月廿日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八大久保出羽守殿御領分

北久米郡

美作国久米郡宮部村百姓

雲治詔

百姓幸右衛門詔

一 壹挺 二匁三分玉 長三尺五寸

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八松平土佐守殿御領分

土佐国幡多郡下田陣百姓

十一月廿日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右八稻葉右京亮殿家来

清水幸之丞詔

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右同家中清水七郎左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺一寸

右同家中稻葉馬左衛門詔

六月十五日

一 五挺 二匁八分玉 長三尺四寸

右八紀伊様御領分伊勢国

渡会郡日向村百姓三郎治詔

七月廿七日

〇一 壹挺 拾匁玉 長貳尺五寸

右八中山遠江守殿御組与力

仁木九郎兵衛詔

八月廿一日同晦日迄御断申上候

力様し中り八月廿日

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八松平蜂須賀大炊守殿

家来

濱園右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右八稻葉右京亮殿家来

後藤与左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺

右同家中矢野勘八詔

同日

〇一 三挺 三匁五分玉 長三尺

右八柳生備前守殿家来

竹田源吉詔

メ七丁此三挺之中り

九月十六日同廿五日中り御断

九月十五日

同日

一 三挺 二匁六分玉 長三尺四寸

右八紀伊様御領分伊勢国

渡会郡火打石村繁右衛門詔

同日

一 三挺 二匁六分玉 長三尺五寸

右御同人様同国同郡津村

重兵衛詔

同日

一 式挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右八加藤左近将監殿御領分

浮穴郡上灘村儀兵衛詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右御同人様御領分同国同郡

佐礼谷村藤二郎詔

メ九丁

九月十七日

〇一 壹挺 拾匁玉 長貳尺三寸五分

右八遠藤備前守家来

餌取権平詔

十月八日同十六日中り御断

十月七日

右不■申来り明日の廿五日迄
中り御断

二月廿六日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸
右八松平阿波守殿家来芝辻
与七郎詠

同日

一 式挺 二匁八分玉 長三尺一寸
右八稻葉右京亮殿家来
清水七郎左衛門詠

同日

一 式挺 二匁玉 長三尺
右八加藤左近将監殿家来
池戸八兵衛詠

同日

一 壹挺 壹匁三分玉 長三尺一寸
右同家中渡邊丹治詠

二月廿六日

一 壹挺 四匁三分玉 長二尺八寸
右八菅谷兵庫殿令筒
仕立直し台金具詠

四月十日

一 四挺 三匁五分玉 長式尺八寸
右八筒卷直し台仕かへ御詠

同

一 三挺 三匁五分玉 長二尺八寸
右八筒卷直し御詠
右七挺之台直し力様し中り五月朔日迄

同十五日迄御断 四月晦日

一 式挺 三匁五分玉 長一尺八寸
右八筒仕立直し台仕かへ御詠

同日

一 九挺 三匁五分玉 長二尺八寸
右八筒仕立直し御詠
十六挺
右八神尾備前守殿御領分

御鉄炮御詠

四月十日

一 壹挺 二匁三分玉 長三尺
右八柳生備前守家来
豊嶋嘉四郎詠

同日

一 壹挺 二匁三分玉 長三尺一寸

右八稻葉右京亮殿家来
牧田弥左衛門詠

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸
右同家中石田峯之進詠

同日

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺二寸
右同家中林五郎作詠

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸
右八同家中中嶋市郎左衛門詠
ノ五挺
六月十五日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸
右八山崎兵部殿家来

阿部源助詠
中り七月廿八日迄八月三日迄
御断 七月廿七日

同日

一 壹挺 八分玉
一 壹挺 式匁玉 長三尺五寸
右同家中中村助之進詠

〇一 壹挺 二匁玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来濱

園右衛門詔

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八紀伊大納言様紀伊国

室郡丸山村百姓覚右衛門詔

同日

〇一 壹挺 三匁壹分玉 長三尺六寸

右八一柳山城守殿家来

矢野源左衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右御同人様同国同郡同村百姓

十右衛門

十二月十二日御断申上候十一月晦日

同

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来鈴木

金治詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺壹寸

右八御同人様同国同郡同村

百姓宇右衛門詔

ノ五挺

十一月晦日

一 壹挺 二匁玉 長三尺五寸

右八松平阿波守殿家来

濱園右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八伊達紀伊守様伊予国宇和郡

川上村百姓五右衛門詔

戊正月十日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部家来小川賢弥

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来井上

藤九郎詔

同日

一 壹挺 三匁玉 三尺五寸

右八同家中小野弥市詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 三尺三寸

右同家中笹川自■詔

同日

〇一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

同日

〇一 壹挺 三匁五分 長三尺一寸

右八加藤左近将監殿家来

林兵藏詔

此中り四月八日夕十一日廿五日迄

御断申上候

四月十日

正月十日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八室野郡赤木村十右衛門詔

紀伊様御領分

二月十五日

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸

右山崎兵部殿家来谷田■

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸
右御同人喜多郡柳沢村百姓
利作誂

九月廿一日

一 式挺 拾匁玉 長二尺三寸

右八菅谷兵庫殿令命

筒仕立直し台仕かへ御誂

同日

一 壹挺 拾匁玉 長二尺五寸

右八遠藤備前守殿御組与力

牧原猪八郎誂

十月晦日令十一月十五日中り御断

十月廿九日

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺

右八加藤出雲守殿家来

津田太右衛門誂

同日

一 壹挺 二匁三分玉 長三尺

右同家中西嶋太左衛門誂

此中り十月廿七日令晦由御断

十月廿木申

此中り十月晦日令十一月

十三日迄御断 十月廿九日

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八稲葉右京亮殿家来

福田藤吉誂

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右同家中溝口才兵衛誂

同日

一 壹挺 二匁六分玉 長三尺一寸

右同家中郡家弥五右衛門誂

同日 三分

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺二寸

右八加藤左近将監殿家来

梶原浅右衛門誂

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺五寸

松平阿波守殿家来芝辻

与七郎誂

九月廿一日

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺一寸

右八加藤左近将監殿家来

横山孫太夫誂筒仕立直し

台仕かへ誂

同日

一 壹挺 四匁玉 長三尺

右同家中口分田久左衛門令

金具

筒仕立直し台仕かへ誂

同日

一 壹挺 四匁玉 長三尺

右八同家中山下源兵衛令

筒仕立直し台金具誂

十月廿木申

十一月朔日

一 式挺 三匁玉 長三尺壹寸

右八稲葉右京亮殿清水

七郎左衛門誂

同日

四月廿日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

山崎兵部殿家来嶋瀬庄右衛門詠

同日

一 壹挺 二匁玉 長三尺五寸

松平阿波守殿家来芝辻与七郎詠

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

加藤出雲守殿家来沢田吉右衛門詠

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

同日

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺一寸

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺二寸

稻葉右京亮殿家来稻葉馬左衛門詠

ノ七挺

四月廿日

一 壹挺 二匁五分玉 三尺壹寸

右八稻葉右京亮殿家来村井

吉左衛門詠筒仕立台仕かへ詠

同

一 壹挺 二匁玉 長三尺三寸

右八松平阿波守殿家来濱

園右衛門台筒仕立直し台仕かへ詠

四月廿日

一 壹挺 拾匁玉 長貳尺三寸三分

右八菅谷兵庫殿台詠

同日

一 壹挺 壹匁玉 長貳尺八寸

右八菅谷兵庫殿台筒仕立

直し台仕かへ御詠

五月廿日

一 壹挺 三匁玉 長三尺二寸

右八木下大和守殿家来小川

半右衛門詠

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八稻葉右京亮殿家来

橋本権右衛門詠

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸五分

右同家中芝崎弥一兵衛詠

同

一 壹挺 二匁三分玉 長三尺壹寸

同

一 壹挺 二匁三分 長三尺

右同家中田宮三右衛門詠

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来石田

安右衛門詠

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右加藤左近将監殿家来

田村岡右衛門詠

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺五寸

右八九鬼長門守殿撰津国有馬郡

百姓徳兵衛詠

同

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右八加藤左近将監殿伊予国浮穴郡

百姓清九郎詠

酉ノ年御断扣

正月廿一日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八稻葉右京亮殿家来

永野幸八詔 四月廿一日分廿九迄

中り御断四月廿日

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右同家中河崎五右衛門詔

同

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来

中嶋磯八詔

同

三

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右大洲御領喜多郡北表村

徳二郎詔

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右同村五兵衛詔

同

一 貳挺 二匁分玉 長三尺壹寸

右八新谷領喜多郡只海村

金兵衛詔

十日

三月九日

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸五分

山崎兵部殿家来上田定五郎詔

同

一 壹挺 貳匁八分玉 長三尺三寸

右同家中田邊九郎左衛門詔

同

一 壹挺 三匁五分玉 長三尺

右八加藤出雲守殿家来沢田

吉右衛門詔

同

一 壹挺 三匁五分玉 三尺

右八加藤左近将監殿家来

口分田羽右衛門詔

三月十日

一 壹挺 四匁玉 長四尺壹寸

同

一 貳挺 三匁五分玉 長三尺貳寸

右八菅谷左門殿分筒仕立直し

台仕替御詔

同 貳拾四挺

一 五挺 四匁玉 長貳尺七寸

右御同人分筒仕立直し御詔

廿七挺

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八加藤出雲守殿御領分

百姓浮穴郡上川村小右衛門詔

同

一 三挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右八同郡同村惣七詔

同

一 三挺 二匁五分玉 三尺二寸

右八大洲御領浮穴郡

二名村半之丞

治八郎 三人

善之丞

右同家中白須半兵衛詔

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右八加藤左近將監殿家来

後藤順八詔

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右八伊達伊紀(伊予力)守殿御領分

伊予国宇和郡奥野川村百姓

勘之丞詔

三

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右御同人同郡同村百姓市平詔

一 貳挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八板倉周防守殿御領分備中国

田井村百姓武兵衛詔

一 三挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八大久保出羽守殿御領分

美作国久米郡中北上村百姓

源次郎詔

十一月廿三日

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右八加藤出雲守殿家来

沢田吉右衛門詔

同日

一 壹挺 壹匁貳分玉 長三尺一寸

右八加藤左近將監殿家来

加藤三郎兵衛詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来坂口

三平詔

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺

右八加藤左近將監殿家来

加藤三郎兵衛分筒不録吟味致候

申来り十一月廿四日同廿九日迄

中り御断 十一月廿三日

十一月廿三日

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

加藤左近將監殿喜多郡中山村

百姓次八詔

同

一 貳挺 二匁五分玉 長三尺二寸

右御同人同郡同村伊八詔

同

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺壹寸

右御同人浮穴郡百姓治兵衛詔

同

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺五寸

右板倉美濃守殿備中国川上郡

西方村百姓宇右衛門詔

六挺 十一月廿三日断

十二月十九日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺二寸

右八加藤左近將監様家来

吉田右膳詔

一

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺壹寸

右同家中久野長右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来川上

善八詔

右同家中稲葉角右衛門詔

八月十日分同廿二日当り御断

八月九日

同日

一 壹挺 貳匁五分玉 長三尺三寸

右同家中中嶋市郎左衛門詔

同日

一

同日

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺三寸

右同家中溝口軍五郎詔

五月三日

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右同家中長瀬甚五兵衛詔

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右八山崎兵部殿家来

丸橋官仲詔

中り御断 六月十五日

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸

右同家中川上善八詔

右式丁之中り六月十六日分

同廿五日御断申上候

六月十五日

五月廿六日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右八加藤左近将監殿家来

口分田羽右衛門詔

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右八同家中江口八九郎詔

右式丁中り十月八日分同廿日迄御断

申上候 十月七日

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右八稲葉右京亮殿家来

加納忠助詔

同日

同日

一 壹挺 二匁七分玉 長三尺三寸

右同家中清水七郎左衛門詔

同日

一 壹挺 三匁玉 長三尺三寸

右同家中稲葉馬左衛門詔

同日

一 壹挺 四匁玉 長三尺

右八加藤出雲守殿家来

沢田吉右衛門詔

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺一寸

右同家中春木紋左衛門詔

右八式挺之中り十二月廿日分

同廿五日迄御断申上候

十二月十九日

八月

一 壹挺 三匁玉 長三尺

右八稲葉右京亮殿家来

清水七郎左衛門詔

一 壹挺 貳匁三分玉 三尺三寸

右同家中渡邊金八詔

一 壹挺 貳匁八分玉 三尺三寸

【凡例】

- ・「鉄炮御断控」(宝暦二年一月～明和二年六月)(箱14の1)の宝暦八年末までを筆録する。
- ・改行・文字遣い・見消し・罫線などは原文のまま。
- ・抹消などで判読できない箇所は■で示した。
- ・原文に従い、文字の級数を一段小さくした箇所がある。
- ・旧字・略字は正字に直した箇所がある。

(表紙 横帳)

壬ノ宝暦貳年

鉄炮御断扣

申正月吉日

正月廿四日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺壹寸

右ハ加藤左近将監様家来

山下与次右衛門詠

同日

一 壹挺 壹匁七分玉 長三尺壹寸

右同家中田村岡右衛門詠

同日

一 壹挺 四匁玉 長三尺壹寸五分

右同家中永田権太夫詠

此当り四月廿日今同廿九日御断

同日

一 壹挺 壹匁五分玉 長三尺

右ハ同家中森五郎左衛門分筒

仕立直し台金具詠

正月廿四日

○一 壹挺 拾匁玉 長式尺九寸

右ハ山崎兵部殿家来新海

田多宮分筒仕立直し

台金具詠

二月十日今十五日迄中り御断

二月九日

二月十七日

一 百挺 四匁玉 長二尺五寸

一 五拾挺 四匁三分玉 長三尺二寸

右ハ大坂為御用御修復

被 仰付候

九人

二月十七日

一 式挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右ハ内方哲五郎殿御代官

備中国哲多郡田渕村

百姓平右衛門詠

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺三寸五分

右御同人同郡同村百姓

龜八詠

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸五分

右御同人同郡成松村百姓

次郎右衛門詠

四月三日

一 壹挺 三匁玉 長三尺五寸

右ハ木下大和守殿家来

吉弘主木未詠

岩尾甚蔵詠

同日

一 壹挺 二匁五分玉 長三尺三寸

右ハ稲葉右京亮殿家来

稲葉馬左衛門詠

同日

一 壹挺 二匁八分玉 長三尺二寸

家に残る（報告書口絵7）。

「鉄炮御断控」の宝暦八年末に挟み込んだ顧客リストが、二つのグループに分かれていたのに対し、「仲ヶ間覚書」は、大和・山城など畿内を先頭に国別で、大名家の下に出入りする鉄炮鍛冶を記すという形式を取っている。視点の中心には大名がおり、その関係で鉄炮鍛冶が捉えられている（ただし四家で齟齬がある。中田B）。それはやがて「鉄炮鍛冶諸家様出入名前帳」を生み出す。山田五平氏蔵として享和元年（一八〇一）のモノが、戦前の『堺市史』第六巻に収録されているほか、天保一三年（一八四三）のモノが井上家に所蔵されている。それを図示すれば、井上関右衛門をはじめ二〇軒前後の堺の鉄炮鍛冶すべての出入り先が一目で分かることとなる。『報告書』には図3～図5「井上関右衛門出入先地図」として記載されているが、宝暦八年から天保一三年にかけて、井上家の出入先が増加している様子が一目瞭然である。五代吉次が享和元年、芝辻・榎並らの幕府御鉄炮師に代わって、鉄炮年寄に抜擢された背景がそこにある。

要するに「鉄炮御断控」はなによりもメーカーから見たデータであるが、「御出入先」に視点を置けば、それぞれの鉄炮鍛冶の先にユーザーである武家（炮術師を含む）が見えてくる。「メーカーたちの銃砲史」と副題を付ける所以である。井上関右衛門家資料が銃砲史研究にとっていかに優れた価値を持つものか、理解されるだろう。

（二〇二四年一月六日記す）

【参考文献】

- A 中田佳子 「井上関右衛門家の人々」
 B 中田佳子 「井上関右衛門家の出入先関係」
 藪田 貫 「鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家資料から見えてくるもの」

いずれも『堺鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家資料調査報告書』堺市・関西大学、二〇一九年に所収。

藪田 貫 「銃砲史」のなかの堺鉄砲鍛冶井上関右衛門家について『ヒストリア』二八八、大阪歴史学会、二〇二一年

藪田 貫 「堺鉄砲鍛冶井上関右衛門と「下職」について」『堺市博物館研究報告』四〇、二〇二一年

藪田 貫 「堺の刃物鍛冶と鉄炮鍛冶」『関西大学なにわ大阪研究』五号、関西大学なにわ大阪研究センター、二〇二三年

吉田 豊 「堺近世の産業構造と鍛冶職」『堺研究』四三、堺市立中央図書館、二〇二一年

（付記）本稿は、なにわ大阪研究センター基幹研究班の一つ「鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究」に従事することで得た成果である。人名・地名については誤りがあることも考えられるが、原史料に従ったことを付記する。なお調査に当たっては資料所蔵者である井上俊二氏、堺市文化財課ならびに春里友季子さんの助力を得た。ここに深甚なる謝意を表したい。

（やぶた ゆたか 関西大学名誉教授）

奉行所に提出された原本と比べると、対応関係を明らかにできただろうが、鉄炮鍛冶の「御断控」のみでは不可能である。

しかし、それが組合規則の冒頭に書かれていることから、すべての鉄炮鍛冶が作成したのは間違いない。宝暦八年の定書には末尾に、桜町榎並屋勘左衛門や中浜一丁井上関右衛門など二一名の鍛冶が列記されていることから、彼らすべてが「鉄炮御断控」を作成していたと推測されるが、現存するのは井上関右衛門家のみである。

こうして「鉄炮御断控」が、仲間規則に従って作成されていたことが明らかとなったが、その起点が宝暦二年と、仲間規則制定の同八年に先じているのはなぜか、という問題が残る。

本史料には後年の「御断控」にない特徴的な記載が一つある。それは棒グラフに明らかのように武家からの鉄炮修理の件数が一五〇挺と異様に多い点である。翌年からこの数値は激減するが、修理件数のこの多さには前提がある。鉄炮鍛冶組合史料である「諸事留帳」（堺市立中央図書館蔵）によつて、延享三年（一七四六）には一〇〇挺、寛延四年（同年一〇月宝暦改元、一七五一）には一五〇挺の修理注文がそれぞれ、堺鉄炮鍛冶に出さされていることが判明する（藪田二〇二三）。翌宝暦二年にある一五〇挺という数値と連続性を認めることができ、同年の数値は、井上関右衛門家個人ではなく鍛冶仲間の数値であると理解することが適切であろう。いわば記載方式の切り替えが完了していないことの現れと理解できよう。とすれば宝暦二年は、新形式への切り替えが始まった年、いわば起点と位置づけることができるであろう。

視点を变えて「御断控」をみるならば、鉄炮鍛冶の申告を通じて堺奉行所、つまり公儀が、諸大名の鉄炮修理や新規製造を監視するシステムと理解することができる。そこには幕府が諸大名家に対し、軍事・政治・文化を問わず管理・監督するという幕藩体制の基本原則があった。その中でも

大名家における再軍備の動向は、幕府にとって神経質な問題であったことは論を待たない。その気配をもし感じるとすれば、鉄炮鍛冶を通じて、その動向を把握しようと幕府首脳が考えるのではないだろうか？

「諸事留帳」には、寛保三年（一七四三）五月の出来事として注目される記事がある。それは大坂城代酒井忠恭が、堺鉄炮鍛冶の芝辻長右衛門と井上関右衛門が、姫路藩主松平大和守忠矩から新筒八〇〇挺の注文を受けたことを聞き、両名が堺奉行所に召喚されるという事件であった。それはのち、芝辻が一〇〇挺、井上が一五〇挺、それぞれ修理注文を受けたことだと判明することで事なきを得たが、その後、五〇挺以上の注文は口上書として差し出すように求められた、というのである。

この出来事に加え、延享三年（一七四六）一月には、堺鉄炮鍛冶が長年、求めていた百姓猟師筒の製造が認められている。これも「御断控」に反映している。さらに同年、火薬の製造を大鳥郡夕雲開の新田畑で精製することが認められ、寛保四年（一七四三）には、七堂浜の試射場が整備されるなど、一七四〇年代には堺鉄炮鍛冶をめぐる環境が大きく変っている。いわば鉄砲生産復興への兆しが芽生えている。その延長線上に、宝暦二年の「鉄炮御断控」が位置づけられると考えられる（藪田二〇二三）。

最後に鉄炮鍛冶と大名家と幕府の関係に触れる。鉄炮鍛冶がそれぞれに大名家から受けた注文の申告を通じて、奉行所には、大名家と鉄炮鍛冶の出入り関係が明示されることとなる。宝暦八年「定書」には第五条として「諸大名方へ御出入の義は、鉄炮屋覚書に書き載せた通り、相互にきつと相守り、違背致すまじきこと」とある。

鉄炮鍛冶には、月ごとの注文を申告するだけでなく、それが互いの出入り関係を遵守した注文であることを証明する義務があったのである。つまり、鉄炮鍛冶仲間では鍛冶相互に、出入大名家を記した帳面を作成し、公開していたのである。現に宝暦八年一月付「鉄炮屋仲間覚書」が井上

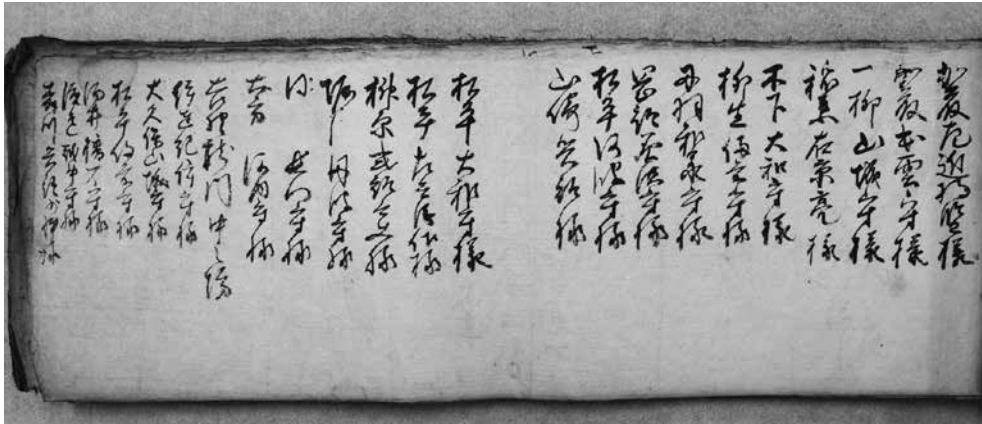


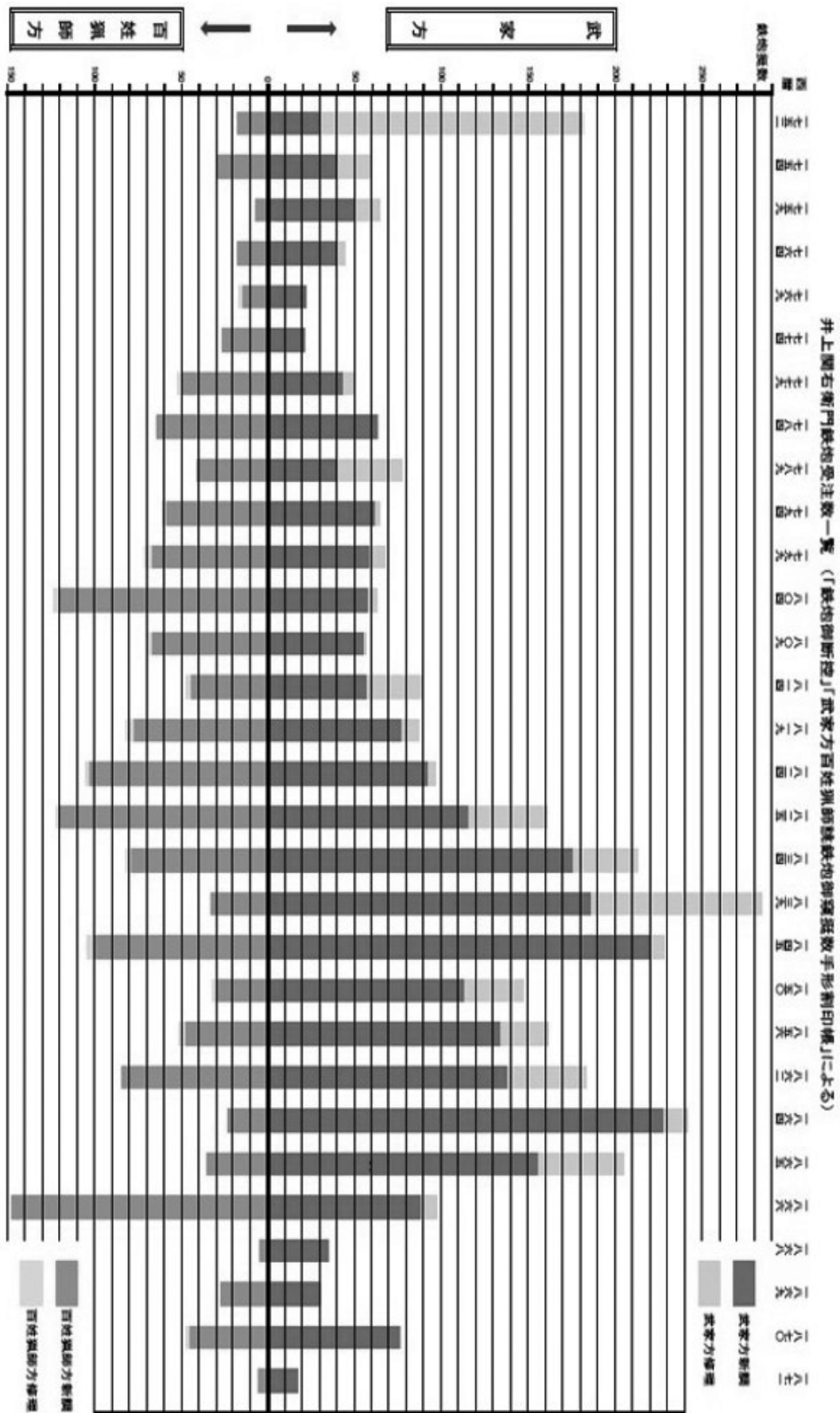
写真4

表 出入先別鉄炮注文（宝暦2～8年）

国名／武家名	注文者数			注文挺数		
	武家	百姓	合計	武家	百姓	合計
近江・三上	6	0	6	6 (2)	0	6
大和・柳生	6	0	6	9	0	9
紀州	0	18	18	0	33 (1)	33
紀伊・新宮	0	1	1	0	3	3
河内・狭山	0	5	5	0	6	6
摂津・三田	0	1	1	0	1	1
摂津	0	1	1	0	1	1
播磨・三草	1	0	1	58 (58)	0	58
播磨・明石	1	0	1	5 (3)	0	5
美作	0	10	10	0	16	16
備中・成羽	31	0	31	55 (4)	0	55
備中・松山	0	4	4	0	9	9
備中	0	3	3	0	4	4
阿波・徳島	7	4	11	49 (1)	8	57
淡路	0	1	1	0	1	1
土佐	0	1	1	0	2	2
伊予・大洲	47	20	67	63 (12)	39 (2)	102
伊予・新谷	10	3	13	19 (2)	6	25
伊予・小松	4	0	4	4	0	4
伊予・宇和島	0	8	8	0	10	10
伊予・吉田	4	8	12	14	10	24
豊後・日出	11	0	11	28 (2)	0	28
豊後・臼杵	38	1	39	76 (4)	1	77
大坂御用	1		1	150 (150)		150
菅谷左門	1	0	1	27 (27)	0	27
菅谷兵庫	1	0	1	6 (5)	0	6
中山遠江守	1	0	1	1	0	1
神尾備前守	1	0	1	18 (18)	0	18
山本紀伊守	2	0	2	19 (18)	0	19
林藤四郎	1	0	1	1	0	1
計			263			758
備考	※ () の数字は注文の内、修理分					

※墨で消された注文を含む

(狭山1、美作2、成羽5、徳島2、大洲1、新谷1、日出1、神尾備前守2)



図「井上関右衛門鉄炮受注数一覧」

「鉄炮御断扣」は、文政八年（一八二五）に一部、形式変更され、「武家方百姓獵師詔鉄炮御用窺挺数手形割印帳」に変わるが、武家方と百姓方に分け、さらに新調と修理に分けるといふ基準は変わっていない。その結果、同帳面が残存する明治四年（一八七一）まで、八〇年間の注文数の推移が判明する。それを棒グラフとして提示したのが図「井上関右衛門鉄炮受注文一覽」報告書図七（四四頁）で、右肩上がりの趨勢が明らかである。

宝暦年間の五〇挺前後から増減を繰り返して、文政七年には一〇〇挺を超え、さらに天保一〇年に二五〇挺を超えるに至っている。その増加は武家方の新調に顕著で、百姓獵師筒を凌駕している。しかもこの趨勢は、八代関右衛門壽次が晩年に語った「大阪府勸業調査委員への報告書」（明治三五）にある一節——「文政・天保年間（中略）ノ前後ハ実ニ鉄炮師ノ全盛ヲ高メシ時代ナリ」——（報告書翻刻資料一三）を彷彿とさせ、証言を裏付ける数値となっている。この証言には、注文数の増加とともに、鉄炮の大型化、つまり十匁以上の大筒の注文増という現象が含まれていると考えられる（藪田二〇二一）。

このグラフは、平成三〇年一月の報告会ではじめて紹介したデータで、新聞各紙が驚きをもって報じたことで鉄炮鍛冶井上関右衛門家の名を高らしめることとなった。その意味から史料として明示されることが求められていたと言える。初回に取り上げる理由である。

ただし宝暦二年から明和二年まで一四年間の記事をすべて掲載するのは冗長に過ぎるので、宝暦八年末で止めているが、そこには一つ明確な理由がある。加藤左近将監を初めとする大名のリストが記されているからである（写真4）。伊予大洲加藤左近将監泰衡を先頭に備中成羽山崎兵部信盛に至る九名のグループと、上野前橋松平大和守朝矩から下総生実森川兵部少輔俊令に至る一二名のグループに分かれているが、彼らの多くが「鉄炮御断控」に注文者として載ることは、表「出入先別鉄炮注文」に示す通りで

ある。したがって、時系列で付けていた注文を、記帳以来八年目にして顧客別に書き出してみると推測できる。

問題はその切っ掛けはなにかであるが、宝暦八年（一八五八）一月付「鉄炮屋仲ヶ間定書」と題する史料があり、事情が窺える。堺の鉄炮鍛冶は同業者組合である仲間を結成しており、その時期は元禄一五年から享保三年の間と推測される（中田二〇一九B）。まさに三代正次の期間であるが、仲間規則として知られる最古のモノがこれである。

内容は一三方条からなり、冒頭、公儀あつりから出される条項を厳守することを誓った上で、第二条に「中放あつり・力様あつり、その外小細工請取物、何事によらず、御番所へ御断り洩らざる様に致すべき事」とある。命中度と発射距離などの検査、その他、鉄炮に関する注文は、堺奉行所に届けるようにという意味だが、その役割として与力・同心に御武具方・鉄炮改方があることに照応する。ここに「御断」とあるのが、「鉄炮御断控」と表題にある所以である。ただし何を届け出るのが義務付けられていたかはいえは、つぎのように注文を受けて後の「中り」（命中検査）を「断」として届けている事例から、すれば、それが義務であった可能性がある。

五月三日 壹挺 式匁八分玉 長三尺三寸

右ハ山崎兵部殿家来

丸橋官仲詔

中り御断 六月十五日

その場合でも、注文を逐一、記録しておくことは前提として不可欠なので、「詔」を記すこととなったのではないだろうか。

さらに安永九年（一七八〇）の「定書」には、「毎月改印形の通」とあるので、鉄炮鍛冶からの提出は月ごとで、しかも押印を伴うものであった。



写真1



写真2

壬申正月吉日と起筆された年を記す。注目されるのは裏表紙に「井上関右衛門正次」とあることで、井上関右衛門家三代正次の代の記録であることが示されている(写真1・2)。果して記事は明和二年(一七六五)六月で終わっており、翌七月二十四日からは四代為次の帳面が新たに作成されている。正次は前年八月に六八歳で亡くなっている(中田二〇一九A)ので若干、齟齬はするが、当主の代替わりに合わせて綴じられた帳面と言うことができる。いわば当主代々の鉄炮鍛冶としての実績を示す史料として整えられたものと言えよう。

よく見れば、表紙を含め全体に簿冊全体が茶色く変色している。それは帳簿の先に付けられた紐から想像されるように、店の間に常時、掛けられ

ていたことから来る変色であろう。まさに井上関右衛門家の鉄炮ビジネスを物語る優品である。

内容は釈文に明らかないように、顧客の大名家から受けた鉄炮注文を日付順に記したもので、鉄炮ビジネスの基本が、店売りではなく、注文生産であったことを物語る。そこには①挺数・②玉目と③銃身の長さとともに、④注文者を記すという基準が守られている(写真3)。さらに注文には「誂」と「仕立直し」の別があり、注文者は武家と百姓(農民)に分けられているが、武家は家来・家中の下に、百姓は領分の下に、それぞれ領主名とともに記されている。いずれにしても何がしかの基準に従わなければ、これだけ整理された帳面は作成されないだろう(後述)。

こうした帳簿が作成され続ければ、当然、鉄炮鍛冶井上関右衛門に対する武家からの注文の変遷を跡付けることができる。



写真3

出られたのである。弟の俊二氏と相談されてのご英断であったと聞くが、正直、驚きを禁じ得なかつた。なぜなら、長年、日本国内での旧家の資料調査を経験してきているが、いくら価値が高いとはいえ、現に住んでいる家屋敷を即座に寄贈するという選択をされた例を聞いたことがないからである。

この提案を受けることで翌三一年度から、堺市による鉄炮鍛冶屋敷整備事業が始まることとなったが、同年度末には『堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家所蔵資料調査報告書 蔵のとびらを開いてみれば』が刊行された。三〇年一月のわたしの講演を含め本文編には九編の論考、別編には「井上家の年中行事」をはじめ二編の論考に、コラムを加えた大著で、頁数はA4二四五頁からなる。貴重な成果として現在も販売されている。注目されるのは巻頭に口絵として一五五の資料が写真として収められ、さらに重要史料一四点が、約五〇頁にわたって翻刻収録されていることである。

堺の鉄炮鍛冶としては、戦前と戦後に二度にわたって編纂された『堺市史』『新修堺市史』に、幕府の御用を受けた鉄炮鍛冶芝辻理右衛門家の旧蔵資料が収録されている。三浦周行（一八七一一一九三二）・朝尾直弘（一九三一〜二〇二二）という希代の歴史家が編纂に関わったもので、堺市博物館所蔵資料と広く知られている（令和五年堺市文化財に指定）。しかしながら、その数わずかに一〇七点に過ぎず、大半は、戦前、堺市から奈良市に移転する際に処分したとの証言が、博物館への購入を担当した元学芸員吉田豊氏によって記されている（吉田二〇二二）。堺鉄炮を象徴する鍛冶であっただけに、もしすべてが残っていればとどれだけのことが明らかになっただろうと、一万点を超える井上関右衛門家資料を前にして思うことが一度ならずあった。それほどに鉄炮鍛冶井上関右衛門家資料の残り方は異常なのである。

異常な数値は、井上家住宅の寄贈にともなう悉皆調査の結果、さらに増

えた。蔵はもちろん、主屋の店の間・座敷・離れ座敷など家屋敷の各所から一干からびた鼠の死骸の傍からも資料が出現することで、ついに二万点に到達したのである。しかもそれは文字資料に限ったもので、銃身や玉鑄型・袴などの有形資料は含まないのである。鉄炮鍛冶屋敷に二万を超える資料が残っていると、誰が予想できたであろうか。その異常な量の背景を説明することが、わたしたちに求められている。

いまわたしたちの手許にあるのは、収蔵された収納箱（中性紙）ごとに作成された目録であるが、いずれは、鉄炮鍛冶という井上家代々の職業（ビジネス）を中心として、暮らしや信仰・交際にも及ぶ総合目録を編みたいと考えている。二万点余をその組織に相応しく分類してみたいのだが、そこでの話題は、鉄炮鍛冶仲間の一員としての側面はもちろん、鍛冶師として下職・出入人を指揮した一面、鉄炮鍛冶年寄としての業務、先祖が関右衛門の名を拝命した大洲藩加藤家との被官関係、先祖の系譜や由緒の作成、堺町人としての暮らしぶりなどにも及ぶことが想定され、鉄炮鍛冶だけでなく、江戸時代の堺の歴史を豊かにする可能性にも富んでいる。

しかし何よりも重要なのは、鉄炮鍛冶史料としての価値を示すことであることから、この度、本誌誌面を借りて、鉄炮鍛冶井上関右衛門家が所蔵する資料から選ばれた史料（古文書）の掲載を始めることとする。鉄炮のユーザーである砲術家を中心としたこれまでの銃砲史に対し、メーカーであった鉄炮鍛冶を中心とした砲術史として裨益することがあれば幸いである。

「鉄炮御断控」について

さて初回に取り上げるのは、「鉄炮御断控」と題する簿冊である。横長の帳面で、表紙中央に「鉄炮御断扣」とあり、左右に宝暦二（一八五二）年

宝暦二年「鉄炮御断控」

藪田 貫

要旨

堺市との共同調査によって、堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家の歴史資料は二万点を超えることが明らかとなりました。その結果、日本の鉄炮の歴史、ならびに近世・近代堺の歴史の解明に貢献する史資料であることが判明しました。その事情に鑑みて、銃砲史に関する重要な史料を紹介します。

キーワード：堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家、銃砲史、史料紹介、鉄炮御断控

はしがき

平成二七（二〇一五）年に堺市文化財課と関西大学大阪都市遺産研究センターとの共同で始まった堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家所蔵資料の調査は、翌年、大阪都市遺産研究センターの後継組織として設立された関西大学なにわ大阪研究センターに引き継がれ、平成二九年度末まで続けられた。終了直前の三〇年一月二一日には、三ヶ年の調査成果を広く市民に報告するべく調査報告会「蔵のとびらを開いてみれば…鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛

門家資料から見えてくるもの」が、関西大学堺キャンパスで開催された。厳冬の日曜午後であったが、三百名を超える聴衆が集い、熱気を帯びた会場で、わたしは基調講演に立った。そして冒頭、「今日ここに来られた方々は、歴史的な瞬間に立ち会われています。」と話し始めた。

最初から考えていた文言でなく、その場の雰囲気煽られてつい口に出たのではないかと今にして思うが、三ヶ年の間、堺市文化財課の全面的な協力を得て、なにわ大阪研究センターの仲間とともに調査してきた者としての正直な気持ちであった。その数約一万点（当時）という資料の豊かさは、日本の鉄炮の歴史、堺鉄炮鍛冶の歴史を変える！という予感が、わたしの体内に生れていたのである。

その場の反響が大きかったことは、報告会終了後、こもごもわたしの耳に入ってきたが、堺市からあった提案―報告会の成果を別途、報告書の形で公表するために調査期間を一年、延長する―も、その一つであった。

しかしその後、もっと大きな反響が待っていた。三〇年の秋に、資料所蔵者井上修一氏から堺市に対し、住んでおられる住宅（昭和三四年、現存する国内唯一の鉄炮鍛冶屋敷遺構として堺市によって文化財に指定されている）を寄付するので「市民共有の文化財として役立ててほしい」と申し

関西大学なにわ大阪研究 第6号

発行日 2024年3月31日

発行者 関西大学なにわ大阪研究センター

〒564-8680

大阪府吹田市山手町3-3-35

TEL: 06-6368-0095

印刷 株式会社 遊文舎

なにわ

大阪

研究

第 6 号

